福島県文化財調査報告書第423集

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告４

荒 屋 敷 遺 跡（３次）

2004年

福　島　県　教　育　委　員　会
財団法人 福 島 県 文 化 振 興 事 業 団
国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告４

荒屋敷遺跡（３次）

口絵　遺跡全景（空中写真撮影：１次～３次調査　合成写真）

序　　文

「会津縦貫北道路」は，喜多方市と会津若松市を結ぶ延長約13.1㎞の地域高規格道路です。平成８年度に都市計画道路として決定され，平成９年度からは建設省（現国土交通省）直轄事業として建設工事が進められています。

この計画路線内には，先人が残した貴重な埋蔵文化財が所在しております。この埋蔵文化財は，各地域の長い歴史の中で育まれ，今日まで大切に受け継がれてきたものであり，我が国の歴史や文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。

そこで，福島県教育委員会では，国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所と埋蔵文化財の保護・保存について協議を重ね，現状保存が困難な埋蔵文化財については，記録として保存することとし，平成13年度から発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は，耶麻郡塩川町に所在する荒屋敷遺跡の発掘調査の成果をまとめたものですが，県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに，地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに，この発掘調査の実施にあたり，御協力いただいた国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所，財団法人福島県文化振興事業団等の関係機関並びに関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成16年12月

福島県教育委員会
教育長　富　田　孝　志

あ　い　さ　つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模な開発に伴う埋蔵文化財の調査業務を行っております。会津縦貫北道路に関連する埋蔵文化財の調査もそのひとつであり，平成13年度より本格的に事業を開始いたしました。

平成15年度は，工事工程の優先される塩川町遠田地区にある荒屋敷遺跡について発掘調査を実施いたしました。本報告書は，この荒屋敷遺跡の３次調査について成果をまとめたものであります。

荒屋敷遺跡は出土品の年代から平安時代及び中世の複合遺跡で，日橋川右岸の河岸段丘上に営まれた遺跡です。特に中世の出土品に輸入陶磁器の白磁や青磁も含まれており，当時の会津地域と他地域との流通関係を知る上で，貴重な資料になるものと思われます。

今後, これらの調査成果を考古学や歴史学など研究の基礎資料として, さらに地域社会の理解や生涯学習の場で幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに，発掘調査当初から報告書刊行に至るまで，御指導と御協力をいただきました関係諸機関並びに関係各位に対し，深く感謝申し上げますとともに，埋蔵文化財の保護に対し，今後とも一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。

平成16年12月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　　髙　城　俊　春

緒　　言

１．本書は平成15年度に実施した会津縦貫北道路遺跡発掘調査の報告書である。

２．本書には福島県耶麻郡塩川町に所在する荒屋敷遺跡（３次調査）の調査成果を収録した。
埋蔵文化財番号：403－00073　荒屋敷遺跡；耶麻郡塩川町遠田字荒屋敷　他

３．当遺跡調査事業は，福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し，調査に係る費用は国土交通省が負担した。

４．福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

５．財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配置して調査にあたった。
文化財主査　　井　　憲治
なお，臨時的に次の職員の参加・協力を得た。
専門文化財主査　　芳賀　英一　　文化財主事　　福田　秀生

６．本書の執筆は，担当職員が分担して行い，各文末に文責を明記した。

７．本書に使用した地図は，国土交通省国土地理院長の承認を得て，同院発行の５万分の１地形図・２万５千分の１地形図を複製したものである（承認番号　平16東複第201号）。

８．本書の79号土坑内堆積物に関する自然科学分析は，株式会社古環境研究所に依頼し，付章にその結果と考察を掲載している。
また，銅製鈴の蛍光Ｘ線分析については文化財主事奥山誠義の協力を得た。

９．本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

10．発掘調査から本報告書を作成するまでに，次の諸機関及び諸氏から指導・助言・協力をいただいた。（順位不同・敬称略）
塩川町教育委員会・喜多方市教育委員会・会津本郷町教育委員会・塩川町遠田行政区
和田　聡・植村　泰徳・梶原　圭介

用　　例

1． 本文中および遺物整理に使用した略記号は次のとおりである。

塩川町…ＣＫ　荒屋敷遺跡…ＡＹＳ　掘立柱建物跡…ＳＢ　柱列跡…ＳＡ
土　坑…ＳＫ　溝　跡…ＳＤ　小穴・ピット…Ｐ　グリッド…Ｇ
トレンチ…Ｔ　遺構外堆積土…Ｌ　遺構内堆積土…ℓ

2． 本書における遺構実測図の用例は，以下のとおりである。

（１）方位記号の表記がないものは，全て真上を真北とする。

（２）遺構番号は基本的に１次・２次調査からの連続番号である。

（３）遺構平面図は，原則として座標軸経線の北を上にして割り付けを行った。

（４）遺構図は原則として，掘立柱建物跡・柱列跡を1/50～1/80，土坑を1/40，溝跡を1/100～1/200の縮尺とし，スケール脇に縮尺率を表示した。但し，溝跡の断面図については1/40を基本としている。

（５）原則として遺構内の傾斜面は ▥ で表示したが，相対的に緩傾斜の部分は ▤ で表している。また，後世の削平や人為的な削土部分は ▤ の記号で表記した。風倒木跡やその他の撹乱による範囲には，▤ のケバを使用し，「カクラン」などの語句を記している。なお，必要に応じて網点を貼り付けている。

（６）断面図および地形図における高さは標高を示す。

（７）遺構外堆積土はローマ数字，遺構内堆積土は算用数字で表記した。

［例］遺構外堆積土：ＬⅠ・ＬⅡ…　，遺構内堆積土：ℓ１・ℓ２…

（８）各小穴の深さは，平面図に示したピット番号の脇の（　）内，または一覧表に明記している。単位はcmである。

3． 本書における遺物実測図の用例は，以下のとおりである。

（１）縮尺率はスケールの脇に表示したが，原則として土器・石器は1/3に縮小し，他の遺物については大きさ・性格等により適宜決定した。

（２）土器の断面は，土師器・かわらけを白ヌキ，須恵器はベタ黒，中世陶器類を網点とし，粘土紐の積み上げ痕は器面で実線，断面図では一点鎖線で表記した。

（３）遺物番号は挿図版ごととし，文中では下記のように省略している。また，掲載土器の出土位置・層位は，右下に示している。

［例］図28の10番の土器　…　図28－10

（４）計測値は挿図中に掲載した。推定値（　），遺存値［　］で表示した。

4． 文章中の土器などの点数は，接合・復元された遺物も含め，すべて破片点数である。

5． 本書における遺物写真の中で個々に付した番号は，挿図番号と一致する。

6． 引用・参考文献は，執筆者の敬称を省略し，各章末に収めた。

目　　次

第１章　遺跡の環境と調査経過 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調 査 経 過 …… 1

1　平成14年度までの調査経過（１）　2　平成15年度の調査（４）

第３節　遺跡の位置と自然環境 …… 5

第４節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 7

第５節　調査の方法 …… 12

第２章　遺構と遺物 …… 15

第１節　遺跡の概要と基本土層 …… 15

1　遺構の分布と出土遺物(15)　2　基本層序(15)

第２節　掘立柱建物跡 …… 18

８号建物跡(18)　９号建物跡(22)　10号建物跡(23)　11号建物跡(25)
12号建物跡(26)

第３節　土　　坑 …… 27

78号土坑(28)　79号土坑(28)　80号土坑(29)　81号土坑(29)
82号土坑(31)　83号土坑(32)

第４節　溝　　跡 …… 32

53号溝跡(32)　54号溝跡(34)　55号溝跡(35)　56号溝跡(36)
57号溝跡(37)　58号溝跡(37)

第５節　その他の遺構と遺物 …… 39

1　ピット群(39)　2　遺構外出土遺物(39)

第３章　ま　と　め …… 43

第１節　遺構について …… 43

1　遺構群の構成(43)　2　遺構群の変遷と性格(44)　3　歴史にみる荒屋敷(46)

第２節　調査の成果 …… 49

付章１　荒屋敷遺跡（３次調査）79号土坑堆積物分析 …… 65

付章２　荒屋敷遺跡（２次調査）出土の鈴について …… 72

第１節　鈴の蛍光Ｘ線分析 …… 72

第２節　鈴の製作方法について …… 74

挿図・表・写真目次

〔挿図〕

図１　会津縦貫北道路位置図 …… 1
図２　調査遺跡位置図・一覧表 …… 3
図３　会津盆地および遺跡周辺地形・地質概略図 …… 6
図４　周辺の遺跡 …… 9
図５　調査範囲と予定路線図 …… 13
図６　遺構配置図とグリッド配置 …… 16
図７　基本土層図 …… 17
図８　８号掘立柱建物跡（１） …… 19
図９　８号掘立柱建物跡（２） …… 21
図10　８号掘立柱建物跡（３） …… 22
図11　９号掘立柱建物跡 …… 23
図12　10号掘立柱建物跡 …… 24
図13　11号掘立柱建物跡 …… 25
図14　12号掘立柱建物跡 …… 27
図15　78～80・82号土坑 …… 30
図16　81・83号土坑，78号土坑出土遺物 …… 31
図17　53・54号溝跡 …… 33
図18　55・58号溝跡 …… 36
図19　56・57号溝跡，溝跡出土遺物 …… 38
図20　ピット群① …… 40
図21　ピット群② …… 41
図22　ピット群③，ピット・遺構外出土遺物 …… 42
図23　荒屋敷遺跡（３次）遺構変遷図 …… 45
図24　荒屋敷周辺の地籍図 …… 47

〔表〕

表１　周辺の遺跡一覧（１） …… 10
表２　周辺の遺跡一覧（２） …… 11
表３　８号掘立柱建物跡柱穴一覧 …… 20

〔写真〕

1　遺跡遠景 …… 53
2　調査区南半 …… 53
3　８号掘立柱建物跡検出状況 …… 54
4　８号掘立柱建物跡全景 …… 54
5　８号掘立柱建物跡（１） …… 55
6　８号掘立柱建物跡（２） …… 56
7　９号掘立柱建物跡 …… 57
8　10～12号掘立柱建物跡全景 …… 58
9　10号掘立柱建物跡 …… 58
10　11・12号掘立柱建物跡 …… 59
11　78～81号土坑 …… 60
12　82・83号土坑 …… 61
13　基本土層 …… 61
14　53・54号溝跡 …… 62
15　55～58号溝跡 …… 63
16　出土遺物 …… 64

付章１

〔挿図〕

図１　荒屋敷遺跡（３次調査）79号土坑における花粉ダイアグラム …… 69

〔表〕

表１　荒屋敷遺跡（３次調査）における寄生虫卵・花粉分析結果 …… 67

〔写真〕

図版１　荒屋敷遺跡の種実 …… 69
図版２　荒屋敷遺跡の花粉・胞子 …… 71

付章２

〔挿図〕

図１　荒屋敷遺跡出土銅鈴とその類例 …… 76
図２　銅鈴製作の模式図 …… 77

〔表〕

表１　銅鈴の蛍光Ｘ線分析結果 …… 73

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯

会津縦貫北道路(地域高規格道路)は，喜多方市関柴町大字西勝から耶麻郡塩川町・河沼郡湯川村を経て会津若松市高野町大字木流の２市１町１村に至る延長13.1㎞の４車線自動車専用道路である。平成８年度に都市計画道路の決定が行われ，平成９年度から建設省(現国土交通省)直轄事業として進められている。

この事業は喜多方市と会津若松市の会津北部地域の縦軸を強化し,「会津地方拠点都市地域」･「会津リフレッシュ構想」･「会津西北地域活性化対策事業」等の広域的な地域開発プロジュクトを支援し，会津地方の定住化と活性化を図ることを目的としている。この事業の完成により，会津北部地域は東北地方の高速交通体系に組み入れられ，産業・経済の発展が期待される。将来的には北へ向かっては東北中央道路の米沢ＩＣ(仮称)と，南では会津縦貫南道路（会津若松～田島：約50㎞)を経て，栃木西部・会津南道路（田島～栃木県今市市：約60㎞)と結ばれる計画である。

第２節　調　査　経　過

１．平成14年度までの調査経過

福島県教育委員会では，路線内に所在する埋蔵文化財の保護を図るため，平成９年度に財団法人福島県文化センター（現財団法人福島県文化振興事業団）に表面調査を委託した。表面調査は，建

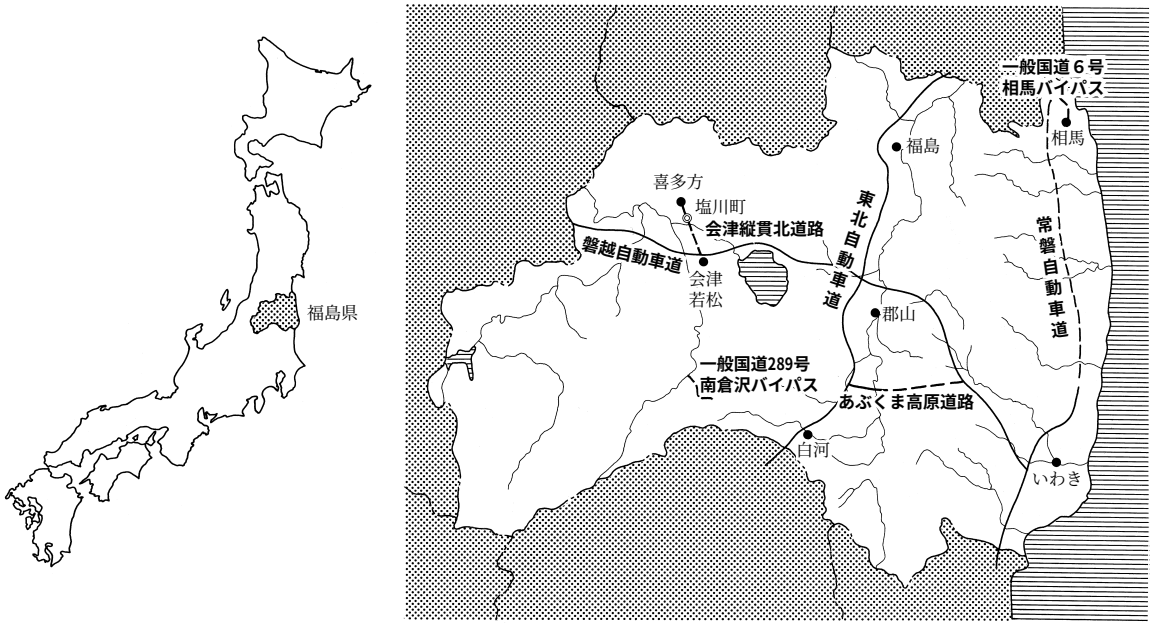


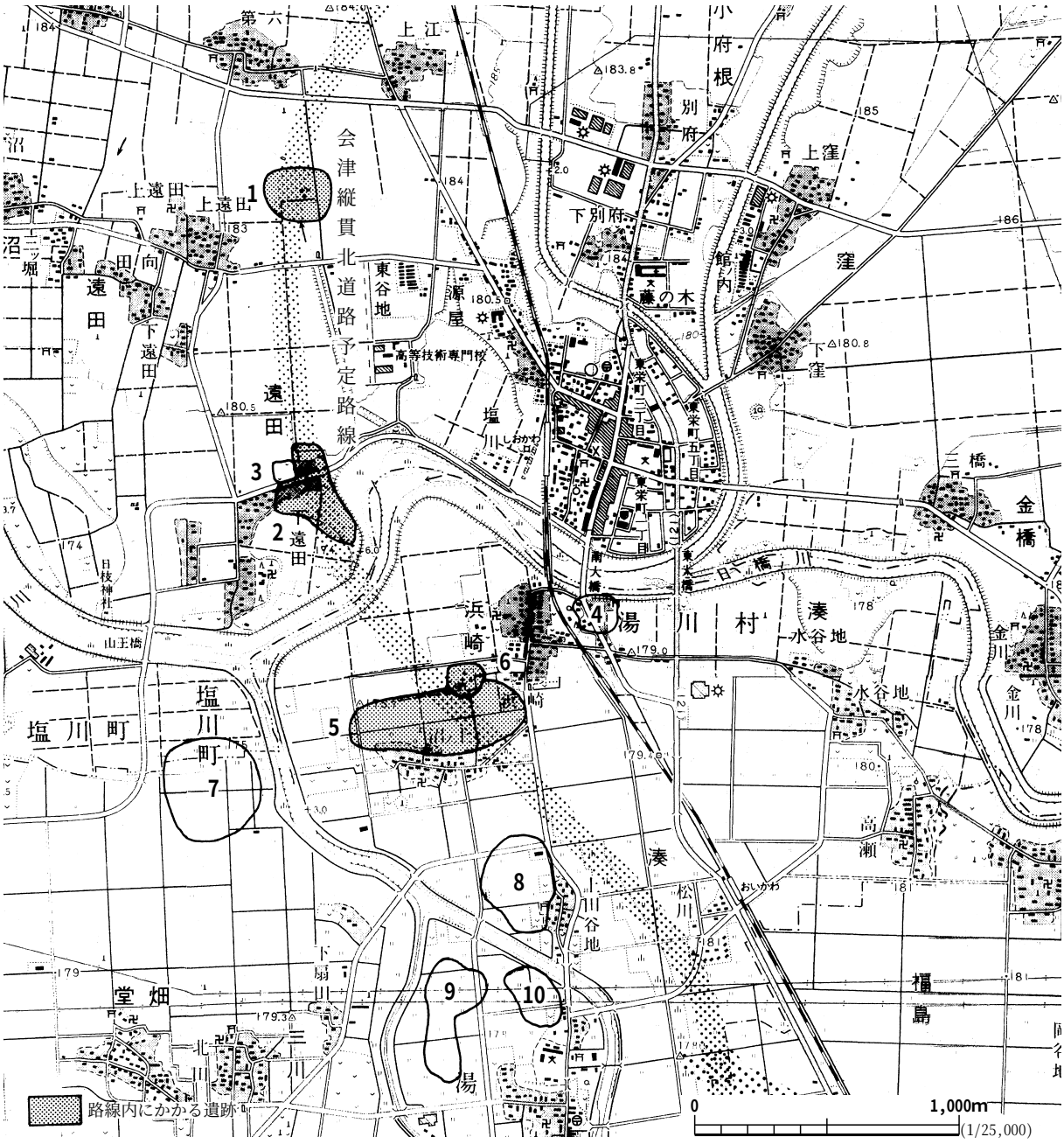
図１　会津縦貫北道路位置図

設省（現国土交通省）東北地方建設局（現東北地方整備局）郡山国道工事事務所から提供された計画路線図（1:2,500）を基に，喜多方市から会津若松市までの延長約12.3㎞・幅150mを対象として，平成９年11月12～26日に現地調査を実施した。また，周知の遺跡についても，今回の表面調査で遺跡範囲を再確認した。試掘調査は当初，道路予定全区間を対象に計画したが，会津若松市中沼地区12haについては除外した。調査の結果，２市２町１村で21遺跡と遺跡推定地３箇所を確認した。その内訳は，喜多方市で５遺跡，塩川町で５遺跡，湯川村は河東町側に広がる範囲も含めて４遺跡と推定地３地点，会津若松市で７遺跡である。この調査結果は，平成10年刊行の『福島県内遺跡分布調査報告４』（藤谷他：1998）に掲載した。

平成12年度は，福島県教育委員会と国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所との協議の結果，建設工事優先となる塩川町遠田地区の麻生館跡・荒屋敷遺跡の計39,100㎡を対象とした試掘調査を実施した。この調査は，10月２～27日と11月27～30日まで実施された。麻生館跡は館跡との関連が想定される建物跡の他，奈良・平安時代の建物跡・井戸跡やピット群など集落跡が確認されたため，名称を麻生館遺跡と変更した。また，荒屋敷遺跡では，古墳時代及び平安時代の遺構・遺物を確認した。この調査成果については，同年度刊行の『福島県内遺跡分布調査報告７』（斎藤他：2001）に掲載した。なお，同年度には会津縦貫北道路建設に伴う付属施設整備のため，麻生館遺跡・荒屋敷遺跡について10月４～７日と20～27日にかけて塩川町教育委員会で試掘調査を実施している。試掘調査の結果，荒屋敷遺跡から土坑や溝跡など，奈良～平安時代・中世の遺構が検出された。このため，塩川町教育委員会では大型排水路建設に伴う1,180㎡を11月22日～12月20日に本発掘調査を実施した。その後，年が明けて平成13年３月には荒屋敷遺跡にかかる路線の側道や上水道管敷設に関連して工事立会・立会調査を実施している（和田：2002）。

平成13年度は，前年度の試掘調査成果を踏まえ，本線部分にかかる麻生館遺跡6,200㎡と荒屋敷遺跡9,700㎡の計15,900㎡を対象に発掘調査を実施した。条件整備が整った麻生館遺跡から調査に着手し，荒屋敷遺跡の調査は５月16日から12月21日まで行った。その結果，荒屋敷遺跡では竪穴状遺構１基，掘立柱建物跡１棟，柱列跡１基，土坑60基，溝跡33条，ピット群等の遺構を検出している。遺物は12世紀～13世紀を主体とする在地系土器（かわらけ）・貿易陶磁器（白磁・青磁）・中世陶器（珠洲系・瓷器系）のほか，木質遺物など該期の多くの資料を得ることができた。なお，両遺跡については「会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告１・２」（2002・2003）として報告書を刊行している。

平成14年度の調査は，平成13年度に県道会津坂下・塩川線の南側で本線と日橋川堤防とに挟まれた範囲について，県教育委員会・(財)福島県文化振興事業団が実施した試掘調査によって確定された要保存範囲である（『福島県内遺跡分布調査報告８』：2002）。この調査成果を受け，平成14年６月21日付けで2,100㎡を対象とする発掘調査の指示が出された。７月１日より現地調査に着手し，10月31日まで調査を行った。調査の結果，１次調査と同様，平安時代～鎌倉時代の遺構・遺物が多く検出された。中でも12世紀代を中心とする貿易陶磁器や在地系土器は，量・質共に県内でも良好な資料であり，性格的には日橋川沿いの自然堤防上に立地する「川湊」と判断されている（井他：2004）。



	№	遺　跡　名	遺跡番号	所　在　地	時　代	備　考
塩川町	1	麻生館遺跡	4030049	塩川町遠田字麻生館	平安・中世	H13発掘調査
	2	荒屋敷遺跡	4030073	遠田字荒屋敷・灰塚他	縄文～古墳 平安・中近世	H13～15 発掘調査
	3	下遠田館跡	4030050	遠田字荒屋敷・館ノ腰	中世	
湯川村	4	浜崎城跡	4220001	湯川村浜崎字北殿町	中近世	
	5	沼ノ上遺跡	4220020	湊字沼ノ上	奈良・平安	
	6	浜崎館跡	4220029	浜崎字宮前	中世	
	7	北田城跡	4220002	三川字大館	中世	
	8	上田谷地遺跡	4220021	湊字上田谷地	奈良・平安	
	9	下川原遺跡	4220022	笈川字下川原	奈良・平安	
	10	西川原遺跡	4220023	笈川字西川原	奈良・平安	

図２　調査遺跡位置図・一覧表

同年11月１日～13日には県道坂下・塩川線北側部分の5,900㎡を対象に試掘調査が行われ，遺構・遺物の検出状況から3,000㎡が要保存面積とされた（香川他：2003）。以上のような調査経過を経て，平成15年度の荒屋敷遺跡（３次調査）の発掘調査が開始されることとなるが，県道坂下・塩川線を挟んだ西側（宅地）部分の約4,000㎡については未試掘・未調査範囲となっているため，さらに調査が継続される予定（４次調査）にある。

２．平成15年度の調査

本年度の荒屋敷遺跡の発掘調査は，福島県教育委員会により４月18日付けで指示された2,600㎡を対象に，継続調査（３次調査）として行われた。発掘調査に先立ち，国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所・福島県喜多方建設事務所・福島県教育庁文化財グループ・（財）福島県文化振興事業団遺跡調査部遺跡調査課の４者で協議を行った。現状確認や調査区範囲，路線幅，排土置き場の確認等を行い，５月から調査に着手する運びとなった。

調査にあたっては，各遺構番号は基本的には１次調査からの継続番号とし，概要・検出数等については第２章各節の冒頭等において記述した。

今回の荒屋敷遺跡の発掘調査は，条件整備等が整った５月12日から開始した。重機による表土剥ぎをＬＩ及び盛土層直下で遺構検出面となるＬＶ上面まで行った。

５月20日には，現地調査連絡所や仮設トイレ，駐車場等を調査区外北側の予定路線内に設け，26日から作業員を投入した。遺構の密度が高い調査区南側から手掘りによる調査を開始した。また，遺構の検出・精査作業と並行して測量基準杭の設定と水準点の移動を随時行った。

調査開始当初は比較的好天に恵まれたが，遺跡の基盤層が粘土質のため，乾燥して固くなり遺構検出には苦渋を強いられた。そのため，動力噴霧機を用いて随時散水を行った。６月には調査が本格化し，建物跡や土坑，溝跡等の掘り込みを精力的に進め，古代末から中世の土器・陶磁器等も僅かだが出土するに至った。調査区南側では遺構の密度が高く，２条の溝跡に区画された建物跡群や土坑，ピット群が確認できた。調査途中，梅雨による長雨や雷雨，台風等の影響により調査の進捗に遅れを来したが，水中ポンプ等による排水作業を随時行いながら調査を展開した。

調査区南半の掘り込みも終盤を迎えた６月下旬には，高所作業車により各地点の全体撮影を行い，７月３日にはラジコンヘリによる高度からの写真撮影を行った（口絵）。その後，地形測量を行い，全面的に遺構の基盤面を掘り下げ，遺構・遺物の存否の再確認を行った。同月11日には調査連絡所，仮設トイレ，リース物件の返却，発掘器材の撤収等を行い，調査を終了した。

７月14日には福島県教育庁文化財グループ・国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所が調査の終了を確認し，引き渡しを行った。なお，７月15～17日には重機による埋め戻し作業を行い，現地における調査の全工程を完了した。

最終的に今回の調査で発見された遺構は，掘立柱建物跡５棟，土坑６基，溝跡６条，それにピット群等である。遺物は希薄であったが，当地域では希少な例である中世～近世の屋敷跡と関連遺構の資料を得ることができた。

第３節　遺跡の位置と自然環境

福島県は，東北地方の最南端に位置し，県としては岩手県に次いで全国２番目の13,782㎢の面積を持つ。県土のおよそ８割は山地で占められ，東は太平洋に面し，中央やや西寄りには国内有数の大湖である猪苗代湖がある。また，阿武隈川・久慈川・阿賀川など大きな河川も流れている。東部には太平洋岸に沿って阿武隈高地，中央部には磐梯吾妻を含む那須火山帯に属する奥羽山脈が南北に連なり，西に越後山脈が迫っている。これらの山地・山脈により，県全体は３つの地方に区分される。太平洋に面した浜通り地方，阿武隈高地と奥羽山脈に挟まれ阿武隈川の流れに沿って広がる中通り地方，新潟県境に連なる越後山脈と奥羽山脈間の高原，盆地を含めた会津地方である。

県内３地方の気候はそれぞれ大きな違いがあり，浜通り地方は海洋性気候，会津地方は内陸性気候を示す。会津地方の冬は寒冷で積雪が多く，山間部では数mに及ぶことも多い。春は雪解け水により河川が増水するが，治水工事が発達している現在では被害はない。梅雨時は中・浜通り地方と比較すれば好天の日が多く，降水量もあまり多くない。夏は高温多湿であり，雷雲の発生も多い。秋は盆地霧が多く発生し，時として視界が大変悪くなり交通事故等の原因にもなる。

荒屋敷遺跡が所在する耶麻郡塩川町は，人口10,554人（平成14年10月１日現在），46.24㎢の面積を測り，会津地方の中央北部に広がる。地質学上は西南日本内帯の東端に位置し，南北およそ30㎞，東西およそ12㎞の南北に長い形状を示す会津盆地のほぼ中心に当たる。盆地の地表部は，北からは濁川，東からは猪苗代湖を源流とする日橋川，南からは南会津の山々を源流とする大川とその支流が葉脈状に盆地内を西進している。これらの河川により盆地内は，周辺の山地から運ばれた堆積物に広く厚く覆われ，なだらかな沖積平野及び扇状地を形成している。これらの堆積物は，年代的には第四紀完新世に属する。堆積物を運んだ河川は喜多方市慶徳町付近で一つに合流し，阿賀川となって越後山地の地峡をさらに西進し，新潟県に入り阿賀野川と名を変えて新潟市から日本海に注ぐ。

会津盆地の地質は，東の奥羽山脈等の山々は新第三紀層を基岩とし，南部の会津若松市南東域では背炙山安山岩，北部の塩川～喜多方市東部では猫魔ヶ岳火山噴出物が地表を覆っている。西の越後山地等は，新第三紀鮮新世及び第四紀更新世の堆積岩層を基岩とし，只見川流域には沼沢火山噴出物（約5,000年前）が堆積する。この他，盆地の南東部及び北西部にはそれぞれ南北に断層が走るが，この断層は有史以来しばしば活動している。特に，江戸初期の慶長16(1611)年の大地震では，慶徳町付近の地峡で崩落や断層隆起があり，阿賀川が堰き止められて「山崎新湖」が形成され，標高175m以下の付近の集落（12村ほど）が水没して多大な被害を生じ，元通りに開削するまでに約40年もの年月を要したことが記録として残っている。

今回発掘調査を実施した荒屋敷遺跡周辺は，盆地内堆積土のうち，氾濫原と段丘・扇状地の境界に位置する。そのため，遺跡東南部は旧河川流路，西北部は自然堤防及び微高地となっており，周囲は標高175m～178m前後の南に緩やかに傾斜した地形となっている。

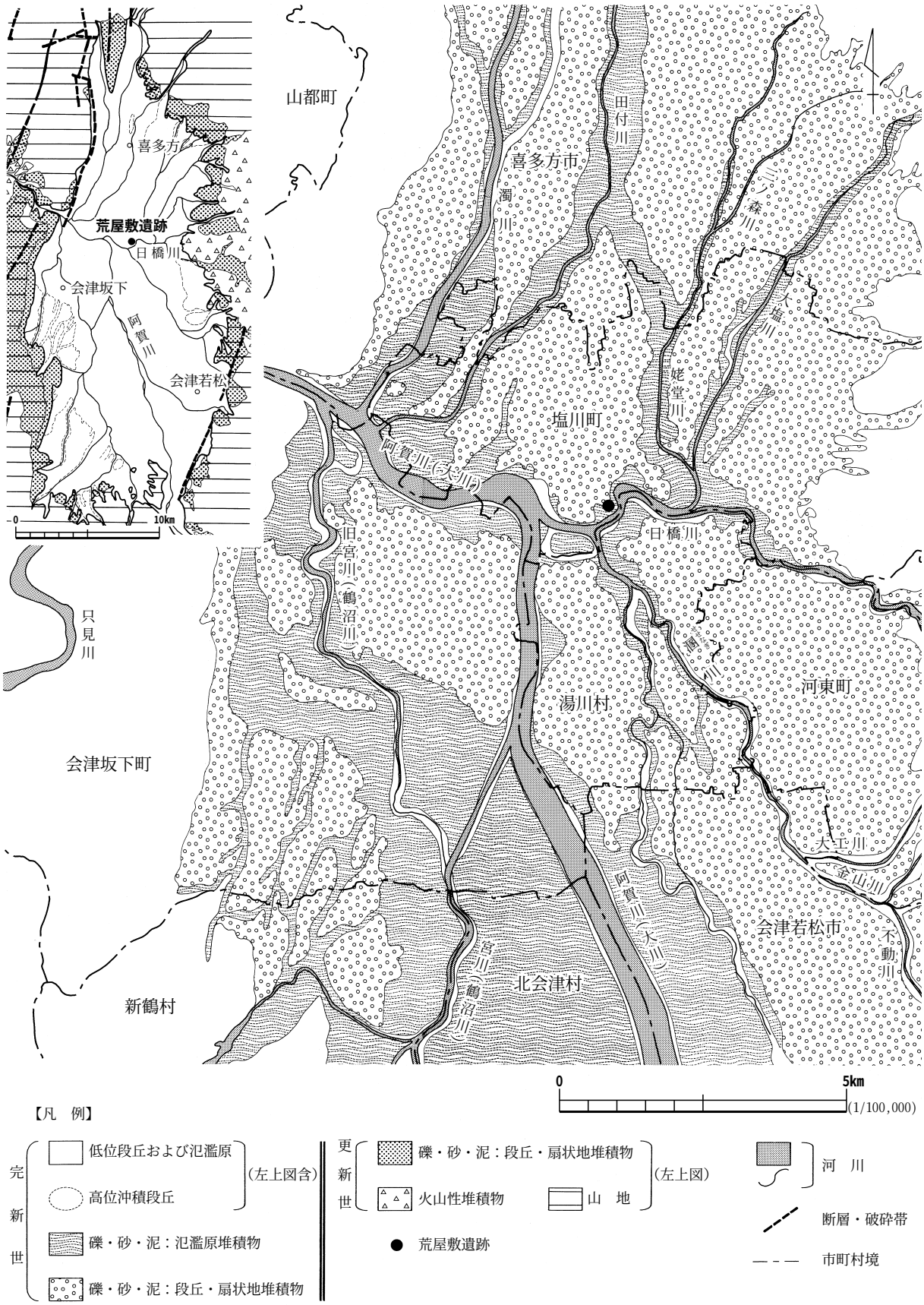


図３　会津盆地および遺跡周辺地形・地質概略図（鈴木・吉田・真鍋他：1976，1987をもとに作成）

第４節　周辺の遺跡と歴史的環境

塩川町内の歴史的環境については不明な点が多いため，1984年刊行の『福島県埋蔵文化財地図及び一覧表』や1996年刊行の『福島県遺跡地図』，最近の文化財調査報告書を参考に概観していく。『福島県遺跡地図』では町内には69ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている。その後，遺跡数はしだいに増加しており現在では74ヵ所を数える。

旧石器時代の遺跡・遺物は現在まで町内では確認されていない。近隣では後期旧石器時代の遺跡として西会津町山本遺跡や高郷村塩坪遺跡がある。

縄文時代の遺跡は，町東部にある標高1271.2mの雄国山の西側山麓を中心に数多く発見されている。地形的には西側に広がる扇状地の扇央から扇端に分布する傾向にある。遺跡地図には11ヵ所が確認されている。これらの遺跡の中で，常世原田遺跡は縄文時代早期中葉の貝殻条痕文系土器群である「常世式」の標識遺跡である。常世式土器は，貝殻腹縁文・平行沈線文・各種刺突文・波状文と底部が乳房状を呈する尖底土器等の特徴を持ち，その分布は広く東北地方南部一円に及んでいる。この他に，縄文時代の遺跡として上ノ台・南原・堀込・大原・森台・鶴塚(14)遺跡がある。今回発掘調査を実施した荒屋敷（１）・麻生館（２）遺跡からは縄文時代後期～晩期にあたる新地式期・大洞ＢＣ式期の土器が出土している。

弥生時代の遺跡は，町内平坦部の沖積地に立地する舘ノ内(20)・堂後(36)・村南(38)・高畑(91)遺跡から土器片が出土している。まだ本格的な調査が実施されておらず，遺跡の性格や時期等は不明点が多い。荒屋敷遺跡からは弥生土器の小片が出土しているが，時期は明確でない。

古墳時代に入ると会津盆地内でも数多くの古墳が築造されており，周辺の開発が進み支配階級の台頭が著しい時期である。会津盆地内では，前期の古墳群として塩川町から喜多方市周辺の深沢・田中舟森山・観音森（竹屋古墳群）・高森山古墳・十九壇古墳群等が，会津若松市周辺では会津大塚山・堂ヶ作古墳等などが，会津坂下町の亀ヶ森(85)・鎮守森(86)古墳等が分布している。これらの古墳分布から会津盆地には，盆地東部・北西部・北東部に大きな勢力を持つ豪族の存在が考えられてきた。近年，塩川町舘ノ内遺跡から２基の方形周溝墓が発見されている。共に一辺10m程の規模で周溝のみの確認であったが，いずれも四隅が張り出す平面形態を示しており，周溝内からは北陸系土器も出土している。これらの特徴から山陰・北陸地方で確認されている「四隅突出型墳丘墓」の影響が推定され，東北地方における最古段階の周溝墓と考えられている。このような古墳を形成する有力者の出現の背景には，会津盆地北部の地域が濁川・田付川・姥堂川・大塩川・日橋川等の中小河川の洪水等がもたらした肥沃な土壌が生産性の高い地域を形成していたからと考えられる。

次の中期～後期の古墳は，前期古墳同様に雄国山麓の末端部に数多く築造されており，七ツ壇（５）・金森(11)・狐壇・松崎・前畑・常世竹花・茶臼森古墳，明蓮寺・深沢前山古墳群などが確認されている。また，中通り地方で特色的な横穴墓の発見例は少なく，盆地西側の丘陵縁部に分布し

ている喜多方市山崎横穴群や盆地東側の丘陵縁部に分布する河東町駒板新田横穴群等があるものの会津盆地全域では５個所と少ない。

古墳時代の集落跡では，塩川町の西端で濁川の自然堤防上に古墳時代中期の豪族（首長）居館跡とされる古屋敷遺跡(13)があり，盆地平坦部の鶴塚遺跡や舘ノ内遺跡などが後期の集落跡として確認されているが町内に多くの古墳群が築造されているのに比べて現在のところ集落跡の数は少ない。今後の可能性として阿賀川（大川）に注ぐ中小河川流域の自然堤防や沖積地に集落遺跡の発見が期待される。

奈良・平安時代に入ると，律令体制の地方浸透に伴い安定した社会が形成されたものと考えられ，会津盆地内では集落跡を中心として遺跡の数は増加する。町内においても，沖積地にも遺跡が多く分布しており，盆地平坦部の田付川沿いに位置する鏡ノ町Ａ遺跡を中心に舘ノ内遺跡をはじめとして，古屋敷・鶴塚・墓ノ前(15)・鏡ノ町Ｂ(17)・妙見(18)・内屋敷(19)・沼ノ上(33)遺跡などが確認されている。鏡ノ町遺跡Ａ(16)からは，数多くの建物や倉庫群，そして奈良三彩小壺や瓦塔片等の遺物が出土しており，地方官衙に関連する在庁官人の居宅跡と推定されている。麻生館遺跡からは３×５間の大型建物跡が検出されたほか，同時期と推定される比較的小型な建物跡，土師器・須恵器片が検出され，同時代の集落の様相が明らかになってきた。また，荒屋敷遺跡からも平安時代の９世紀後半を中心とした土師器，須恵器が流路跡を中心に数多く出土しており，土師器杯には墨書や線刻が施されたものもあり，遺跡の性格を考える上でも興味深いものがある。

武家社会が成立した中世には，新たな支配者が台頭する。鎌倉時代後半以降の会津地方では，三浦・蘆名氏の勢力が伸び，その一族が各地を領して行ったと考えられている。本町内も位置的に北田城の北田氏と，新宮城の新宮氏の支配下にあったものと推定される。中世以降には城館跡を中心とした遺跡が町内外で多く確認されており，麻生館遺跡近隣には沖館跡(25)・上江館跡(26)が，荒屋敷遺跡近隣には下遠田館跡(21)・新屋敷跡(31)が所在している。城主名は記録も少ないが，沖館跡には山口沙弥道光，上江館跡には栗村弾正清政，下遠田館跡には三橋備前定重と二男の刑部重治との伝承が残っている。本年度発掘調査を実施した荒屋敷遺跡でも貿易陶磁器である青磁・白磁が出土しており，当時の日本海側での海運の発達を会津盆地の遺跡でも検証することができる。

戦国時代に入ると，会津地方でも戦乱が相次いだ。その多くは戦国大名化する蘆名氏と中小在地領主との戦いであり，文亀２(1502)年には常世・三橋など会津盆地北東部の在地領主らが追い払われ，天文年間(1532～1554年）には，会津地方の領主達の殆どは蘆名氏に服属し，蘆名氏は盛氏の時代に全盛期を迎える。その後，蘆名氏は内部で支配体制の矛盾が顕在化したり，家督相続や重臣間の対立が深まって，しだいに家勢も衰えてきた。天正17(1589)年６月には蘆名義広と伊達政宗による磨上原の戦いが行われ，伊達政宗が勝利した。蘆名氏を滅ぼして会津へ入った伊達政宗により，金川・三橋・塩川などが片倉景綱へ安堵されている。その後，豊臣秀吉による奥州仕置き以後の会津地方は，蒲生氏郷・秀行から上杉景勝と支配者が変遷し，関ヶ原の戦いを迎える。遺跡の周辺には，中世～近世にかけての塚・供養塔・石造物等が建立されており，当時の人々の信仰に関連する

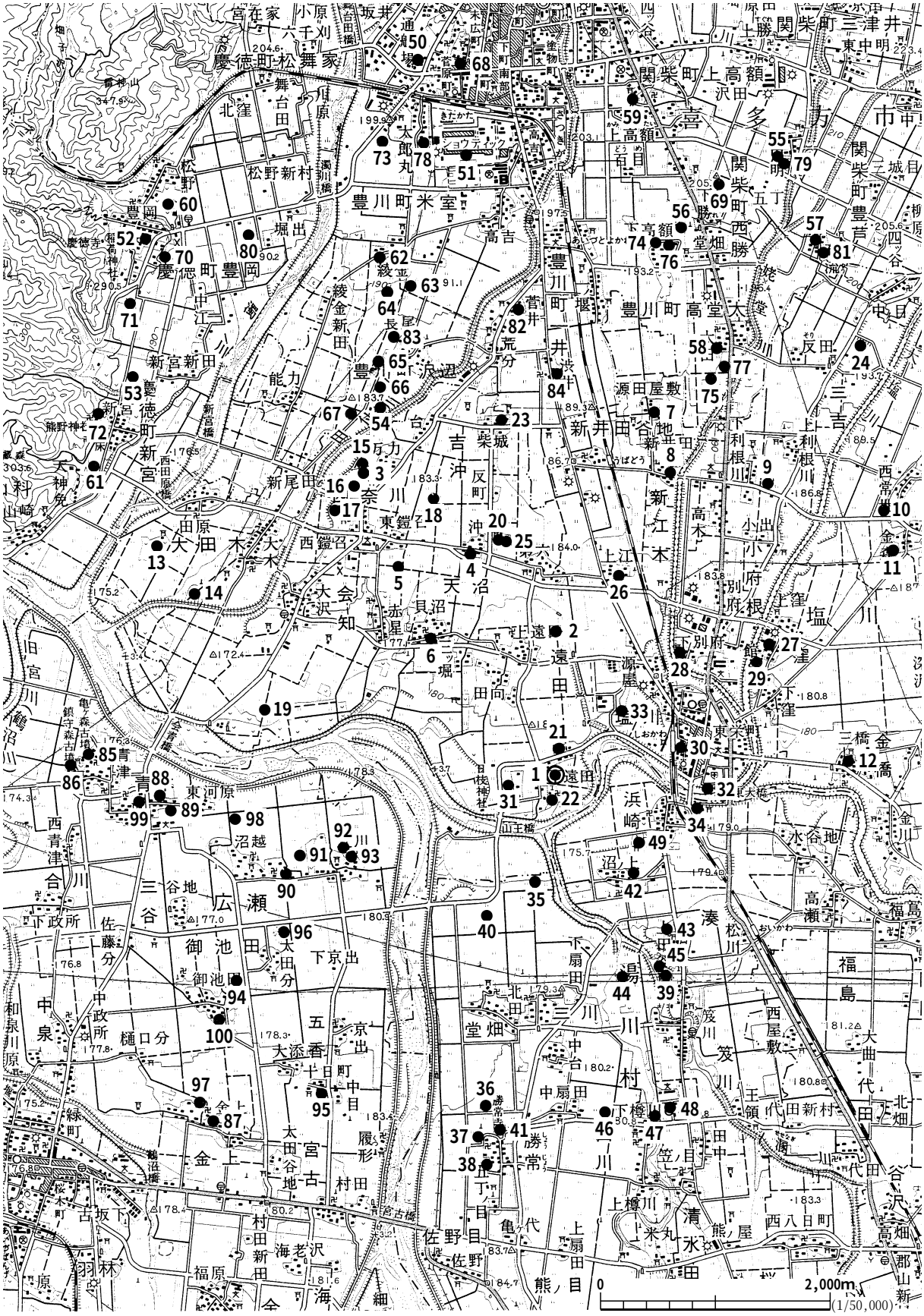


図４　周辺の遺跡

表１　遺跡周辺の遺跡一覧（１）　※№は図４，遺跡番号は『福島県遺跡地図』（1996）に対応

№	遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地		遺　跡　の　概　要
1	40300073	**荒屋敷遺跡**	塩川町	遠田字荒屋敷・灰塚他	縄文～古墳・平安・中近世の散布地
2	40300049	麻生館遺跡（麻生館跡）		遠田字麻生館	平安時代の集落跡・中世の館跡
3	40300001	牛塚		四奈川字墓ノ前	古墳時代～近世の塚（旧牛塚古墳）
4	40300002	沖舎利塔		吉沖字村前	中世・近世の石造物
5	40300003	鎧召・七ツ壇塚群		四奈川字千刈	古墳時代～近世の塚（旧七ツ壇古墳群Ａ）
6	40300004	貝沼館跡		天沼字貝沼	中世の城館跡
7	40300005	鏡ケ城跡		源太屋敷字前畑・館ノ腰	中世の城館跡
8	40300007	新井田・田辺館跡		新江木字新井田	中世の城館跡（旧田辺館跡）
9	40300008	下利根川石造供養塔		下利根川字仲田	中世の石造物
10	40300010	常世館跡		常世字西町	中世の城館跡
11	40300039	金森古墳		五合字金森	古墳
12	40300023	三橋館跡		金橋字舘ノ内	中世の城館跡
13	40300040	古屋敷遺跡		大田木字古屋敷	縄文・古墳～平安時代の集落
14	40300042	鶴塚遺跡		大田木字鶴塚・下屋敷	縄文～平安時代の散布地
15	40300043	墓ノ前遺跡		四奈川字墓ノ前	奈良・平安時代の散布地
16	40300044	鏡ノ町遺跡Ａ		四奈川字鏡ノ町	奈良・平安時代の集落
17	40300045	鏡ノ町遺跡Ｂ		四奈川字鏡ノ町	奈良・平安時代の集落
18	40300046	妙見遺跡		吉沖字妙見	奈良・平安時代の散布地
19	40300047	内屋敷遺跡		会知字内屋敷	奈良・平安時代の集落
20	40300048	舘ノ内遺跡		吉沖字舘ノ内	奈良・平安時代の集落
21	40300050	下遠田館跡		遠田字荒屋敷・館ノ腰	中世の城館跡
22	40300051	下遠田石造供養塔		遠田字谷地中	中世の石造物
23	40300054	柴城跡		吉沖字柴城	中世の城館跡
24	40300056	南館館跡		三吉字南館・内屋敷・沢田	中世の城館跡
25	40300057	沖館跡		吉沖字館ノ内	中世の城館跡
26	40300060	上江館跡		新江木字館跡	中世の城館跡
27	40300061	丹波館跡		窪字館	中世の城館跡
28	40300063	別府館跡		小符根字館ノ内	中世の城館跡
29	40300064	上窪南館跡		窪字館ノ内・館野	中世の城館跡
30	40300066	小十郎館跡		塩川字館ノ内・堀目	中世の城館跡
31	40300067	新屋敷跡		遠田字新屋敷	中世の城館跡
32	40300068	柏木城館		塩川字古町・古城	中世の城館跡
33	40300069	沼ノ上遺跡		遠田字沼ノ上	縄文時代の貝塚，弥生・平安時代の散布地
34	42200001	浜崎城跡	湯川村	浜崎字北殿町	中世・近世の城館跡
35	42200002	北田城跡		三川字大館	中世の城館跡
36	42200003	堂後遺跡		勝常字堂後	弥生・奈良・平安時代の散布地
37	42200004	覚成上人墓		勝常字堂後	中世の墳墓
38	42200005	村南遺跡		勝常字村南	弥生時代の散布地
39	42200008	笈川館跡		笈川字舘	中世の城館跡
40	42200018	堂畑館跡		堂畑字大舘	中世の城館跡
41	42200019	勝常寺薬師堂		勝常字代舞	中世の社寺跡（国指定）
42	42200020	沼ノ上遺跡		湊字沼ノ上	奈良・平安時代の散布地
43	42200021	上田谷地遺跡		湊字上田谷地	奈良・平安時代の散布地
44	42200022	下川原遺跡		笈川字下川原	奈良・平安時代の散布地
45	42200023	西川原北遺跡		笈川字西川原	奈良・平安時代の散布地
46	42200024	下樽川西遺跡		笈川字下樽川	奈良・平安時代の散布地
47	42200025	下樽川遺跡		笈川字下樽川	近世
48	42200026	殿田遺跡		笈川字殿田	縄文時代の散布地
49	42200029	浜崎館跡		湊字宮前	中世の城館跡
50	20800017	塚原壇	喜多方市	長源壇	中世の塚

表２　遺跡周辺の遺跡一覧（２）　※№は図４，遺跡番号は『福島県遺跡地図』（1996）に対応

№	遺跡番号	遺　跡　名	所　　在　　地	遺　跡　の　概　要
51	20800019	長内遺跡	喜多方市　豊川町米室字長内	弥生時代の散布地
52	20800020	慶徳城跡	慶徳町富岡字今町	中世の城館跡
53	20800021	新宮城跡	慶徳町新宮字館内	中世の城館跡
54	20800022	八幡塚古墳	豊川町沢部字宮下	古墳
55	20800030	西中明板碑	関柴町西勝字三島	中世の石造物
56	20800036	水谷地古墳	豊川町高堂太字水谷地	古墳
57	20800037	布流板碑群	関柴町豊芦字村中	中世の石造物
58	20800041	太田板碑	豊川町高堂太字村中	中世の石造物
59	20800058	台畑遺跡	関柴町上高額字宮越	平安時代の散布地
60	20800067	木曽原遺跡	慶徳町豊岡字木曽原	古墳・平安時代の散布地
61	20800068	招木遺跡	慶徳町新宮字招木	平安時代の散布地
62	20800069	村前遺跡	豊川町米室字村前・綾金	奈良・平安時代の散布地
63	20800070	塚田Ａ遺跡	豊川町沢部字塚田	奈良・平安時代の散布地
64	20800071	塚田Ｂ遺跡	豊川町沢部字塚田	奈良・平安時代の散布地
65	20800072	長尾遺跡	豊川町沢部字長尾	平安時代・中世の散布地
66	20800073	前田遺跡	豊川町沢部字前田	奈良・平安時代の散布地
67	20800074	四十苅遺跡	豊川町沢部字四十苅	奈良・平安時代の散布地
68	20800076	塚原館跡	天満前	中世の城館跡
69	20800089	下勝館跡	関柴町西勝字館ノ内	中世の城館跡
70	20800094	新館跡	慶徳町豊岡字本町	中世の城館跡
71	20800095	八幡館跡	慶徳町豊岡字不動前	中世の城館跡
72	20800097	駿河館跡	慶徳町新宮字熊野	中世の城館跡
73	20800098	太郎丸西館跡	豊川町米室字館跡	中世の城館跡
74	20800099	下高額館跡	豊川町高堂太字千苅・村東	中世の城館跡
75	20800100	太田館跡	豊川町高堂太字館ノ内	奈良時代の散布地，中世の城館跡
76	20800108	下高額板碑	豊川町高堂太字村東	中世の石造物
77	20800110	於壇遺跡	豊川町高堂太字於壇	奈良・平安時代の散布地
78	20800129	太郎丸東館跡	豊川町米室字太郎丸	中世の城館跡
79	20800130	中明館跡	関柴町西勝字館ノ内	中世の城館跡
80	20800133	谷地ノ城館	慶徳町豊岡字柳町	中世の城館跡
81	20800134	布流館跡	関柴町豊芦字布流	中世の城館跡
82	20800135	菅井館跡	豊川町一井	中世の城館跡
83	20800136	長尾館跡	豊川町沢部字長尾	中世の城館跡
84	20800137	渋井館跡	豊川町一井	中世の城館跡
85	42100009	亀ケ森古墳	会津坂下町青津字館ノ越	古墳時代前期の前方後円墳（国指定）
86	42100010	鎮守森古墳	青津字館ノ越・中西	古墳時代前期の前方後方墳（国指定）
87	42100030	金上城跡	金上字館	中世の城館跡
88	42100093	吉原遺跡	青木字吉原	縄文・古墳・平安時代の散布地
89	42100094	青木遺跡	青木字青木	平安時代の散布地
90	42100099	辻田遺跡	沼越字辻田	平安時代の散布地
91	42100100	高畑遺跡	沼越字高畑	縄文・弥生・平安時代・中世の散布地
92	42100101	中立川遺跡	立川字中立川	平安時代の散布地
93	42100102	東立川遺跡	立川字東立川	平安時代の散布地
94	42100105	御池田山ノ神遺跡	御池田字山ノ神・江免	平安時代・中世の散布地
95	42100131	中目経塚	五番字家ノ西	中世の塚
96	42100133	稲荷北遺跡	沼越字稲荷北	平安時代の散布地
97	42100163	金上村東遺跡	金上字村東	弥生・平安時代の散布地
98	42100176	古舘遺跡	沼越字古舘	平安時代・中世の散布地
99	42100179	樋渡館跡	樋島字樋渡	中世の城館跡
100	42100181	旭田館跡	御池田字旭田	中世の城館跡

遺構が多数残っている。

近世(江戸時代)に入り幕府と藩で全国の土地や人民を支配する幕藩体制が確立し，会津藩でも上杉景勝から蒲生秀行(再蒲生)・忠郷，加藤嘉明・明成氏の支配を経て保科(松平)氏の治世を迎え，明治時代に至る。現在では町の中心地である旧塩川村は，慶長13(1608)年出羽米沢に通じる檜原峠越米沢街道の宿駅に定められた。また，毎年暮れには旧塩川村に詰市と称される市が開設され，諸産物の売買が盛んに行われた。当時の塩川は会津藩内における阿賀川水運の起点であり，このため船問屋・米問屋が軒を並べ，藩の大阪廻米を納めるための蔵などが建ち並び，阿賀川水運や米沢街道の陸運の中継地として栄えたと伝えられる。この地域の主な特産物は米であったが，この他に薬用ニンジンの栽培があり，藩の専売品として全国有数の生産高を誇った。

第５節　調査の方法

今回の荒屋敷遺跡の調査では，遺構・遺物の明確な位置関係を記録するために前回からの１次・２次調査で設けたグリッド網をそのまま利用した。これは業者委託により，高規格道路計画用基準点（基－９・10）を視準点とし，本遺跡のグリッド設定における基準杭としたものである。この基準杭のデータを基に，遺跡内に５m四方のグリッド網を設定している（図５）。

各グリッドは，Ｘ：176,230.00，Ｙ：4,160.00を起点（Ａ０）に南から北に向かって１次・２・３……35・36と付した算用数字と，西から東に向かってＡ・Ｂ・Ｃ……Ｘ・Ｙ・Ｚと付したアルファベットとの組み合わせによって表示し，Ｖ19グリッドやＹ８グリッド等と呼称した。ただ，今回の調査区範囲はＡより更に西側へ延びるため，この部分につてはＡＡ・ＡＢ・ＡＣ……等と呼称した。調査区範囲はＡＦ～Ｆ－54～65グリッド内に相当する。これらの各グリッドは，遺物の出土位置表示，遺構の大まかな位置表示を行うためのものであり，さらに平面図作成のための基準線を１m方眼で割り付けている。地点の表記については，国土座標のＸ・Ｙ座標をそれぞれN(北)・Ｅ(東）に置換し，下３桁の数字を使用した（起点：N230・Ｅ160)。調査区内においては，測量基準点が調査区南西外に設定されているため，ＮとＥのみが存在する。

上述のグリッド設定方法は，塩川町教育委員会が行った１次・２次調査の方法と基本的には国土座標第Ⅸ系を基準としている点で同様であるが，15m四方の大グリッド網を用いている点や基準点等で異なっている。図５に示したとおり，町調査区の起点ｂ－１はＸ：176,220.00，Ｙ：4,095.00であり，南北軸１が98～０，２が１～３……13が34～36，東西軸ＤはＣ～Ｅ，ＥはＦ～Ｈ……ＩはＲ～Ｔに各々対応している。今回の調査区範囲をこのグリッド法を用いて表せば，Ａ～Ｄ－19～22グリッド内に該当する。

遺構の掘り込みにあたっては，遺構の大きさや重複関係を考慮して，土層観察用ベルトを随時設定し，写真撮影や実測図等の作成を行った。また，建物跡を構成する個々のピットについては，明確な形状・深さ・土層観察を行うために平面図作成後，全てのピットについて断ち割り調査を実施

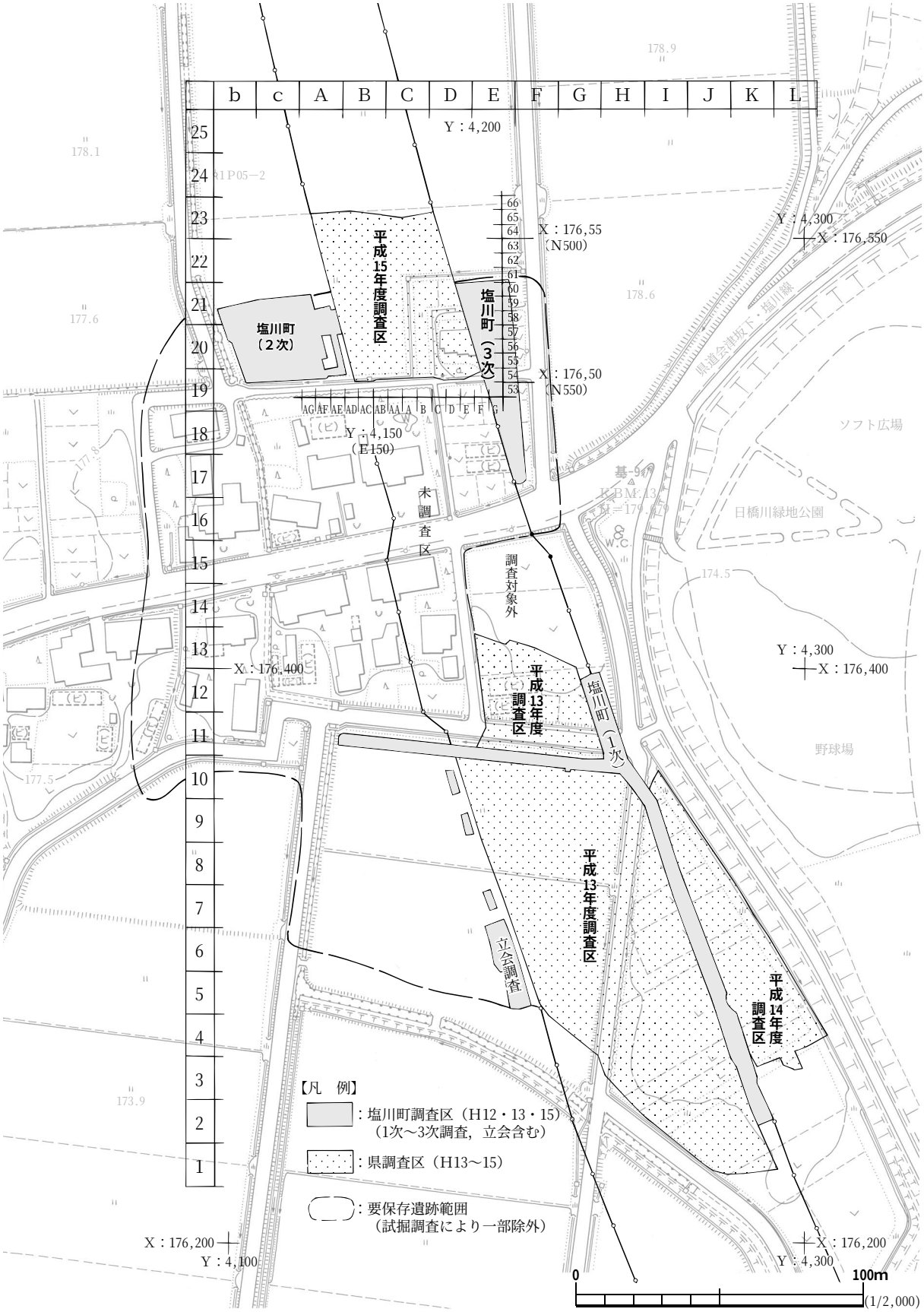


図５　調査範囲と予定路線図

している。遺構外出土遺物は基本土層に準拠して取り上げ，土層注記には新版標準土色帖（1997年版）を使用している。

記録写真撮影は，調査の進捗に合わせて随時35㎜判の小型カメラを使用，遺物出土状態や全景など必要に応じて６×4.5判の中型カメラも併用した。フィルムは，モノクロームとカラーリバーサルフィルム２種を使用し，遺構の検出・土層断面・完掘状況のほか，遺物の出土状態の撮影を適宜に行った。また，遺構図は1/20の縮尺を基本としたが，大型の溝跡等は遺構の性格上，平面図と断面図の縮尺率を変えて作成している。

これらの発掘調査で得られた出土品・実測図・写真等の資料は，当事業団の整理基準に準拠して整理を行い，報告書作成終了後，それぞれの台帳を作成し，福島県教育委員会で収蔵・保管する予定である。（井）

引用・参考文献

井　憲治　他　2003「会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告２」福島県教育委員会

井　憲治　他　2004「会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告３」福島県教育委員会

小山正忠・竹原秀雄　他　1997版　新版　標準土色帖

香川　愼一　他　2001「福島県内遺跡分布調査報告７」福島県教育委員会

久保田鉄工株式会社　1987「URBAN　KUBOTA　26」久保田鉄工株式会社

塩川町史編纂委員会　1966『塩川町史』塩川町

鈴木　敬治　他　1973「喜多方地域の地質」福島県

福島県教育委員会　1988『福島県の中世城館跡』

福島県教育委員会　1996『福島県遺跡地図　会津地方』福島県

藤谷　誠　他　1998「福島県内遺跡分布調査報告４」福島県教育委員会　第342集

文化６年会津藩編　1983『新編会津風土記』雄山閣

森　幸彦　他　1999『常世原田遺跡－吉田格氏昭和23年調査資料－』福島県立博物館

横須賀　倫達　他　2002「福島県内遺跡分布調査報告８」福島県教育委員会

横須賀　倫達　他　2002「会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告１」福島県教育委員会

和田　聡　他　1998「舘ノ内遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書３』福島県耶麻郡塩川町教育委員会

和田　聡　他　1999「古屋敷遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書４』福島県耶麻郡塩川町教育委員会

和田　聡　他　2001「鏡ノ町遺跡Ｂ」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書５』福島県耶麻郡塩川町教育委員会

和田　聡　2002「荒屋敷遺跡」『塩川町文化財調査報告第10集』福島県耶麻郡塩川町教育委員会

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と基本土層

１．遺構の分布と出土遺物

今回の荒屋敷遺跡の調査で検出された遺構は，掘立柱建物跡５棟，土坑６基，溝跡６条，それにピット群等である。前回までの１次・２次調査分と塩川町調査の１次・２次調査で検出された遺構数を合わせると，竪穴状遺構３軒，掘立柱建物跡12棟，柱列跡２基，土坑102基，溝跡81条，性格不明遺構２基，ピット多数となる。ただ，溝跡については連続する同一遺構もあるため，本来は40条程の検出数と考えられる。これらの遺構全体の配置は図６に示したが，各節の冒頭や遺構説明の中で地形や隣接する遺構同士の関連性を把握するため縮尺率を変えて一部便宜的に掲載している。

検出された遺構の分布状況を概観すると，上部はほ場整備等により削平されていたが，ほぼ平坦な地形を呈し，調査区南半に遺構密度が高いことが分かった。やや幅広い53・54号溝跡を境とする南側では掘立柱建物跡や土坑，ピット群が集中して確認され，区画溝を有する屋敷跡と関連遺構の存在が想定された。逆に北側では一転して遺構・遺物は殆ど検出されていない。

遺物は遺構の分布状況とほぼ同様な傾向を示しているが，僅かな出土量である。明確に遺構に伴って出土しているものはなく，遺構内から52点，遺構外から37点を数え，総計89点の出土である。出土遺物の内訳は，在地系土器である土師器・かわらけ片が52点，須恵器片が19点，陶磁器類が12点，石器類が２点，その他土製品・木炭等が４点である。県道坂下・塩川線南側を調査した１次・２次調査成果とは出土遺物の分布状況（量・質等）が明らかに異なる特徴がある。このため，12世紀（鎌倉時代前後期）頃を主体とする日橋川沿いの自然堤防上に立地する遺構群とは時代を前後するか，あるいは性格が異なる可能性が高い。

なお，これまでの試掘調査成果や本調査の所見でも明らかなように，基盤整備やほ場整備，用水路建設等に伴う掘削や整地によって改変された区域もあり，該期の遺構群への影響が少なからず存在したものと考えられる。

２．基本層序

荒屋敷遺跡は，阿賀川の支流である日橋川右岸の標高175.50～178.30m前後の低位段丘及び自然堤防上に位置する。第１章第３節で述べたとおり，塩川町の東から北部の山々にかけては，新第三紀鮮新世及び第四紀更新世の堆積岩層を基岩とする火山性の堆積物（猫魔ヶ岳火山噴出物）が覆い，西側平野部はなだらかな沖積層及び扇状地となっている。本遺跡が所在する遠田地区は，複数の扇状地の先端部が集まってできた三角州性の低地に分類されている。現在，遺跡周辺は日橋川の氾濫を抑える堤防が築かれ，南西へ緩やかに傾斜する畑地・水田跡地となっている。大正７年頃の基盤整備や平成６年のほ場整備等によって地形が著しく改変されているが，遠田地区南側では幾分残っ

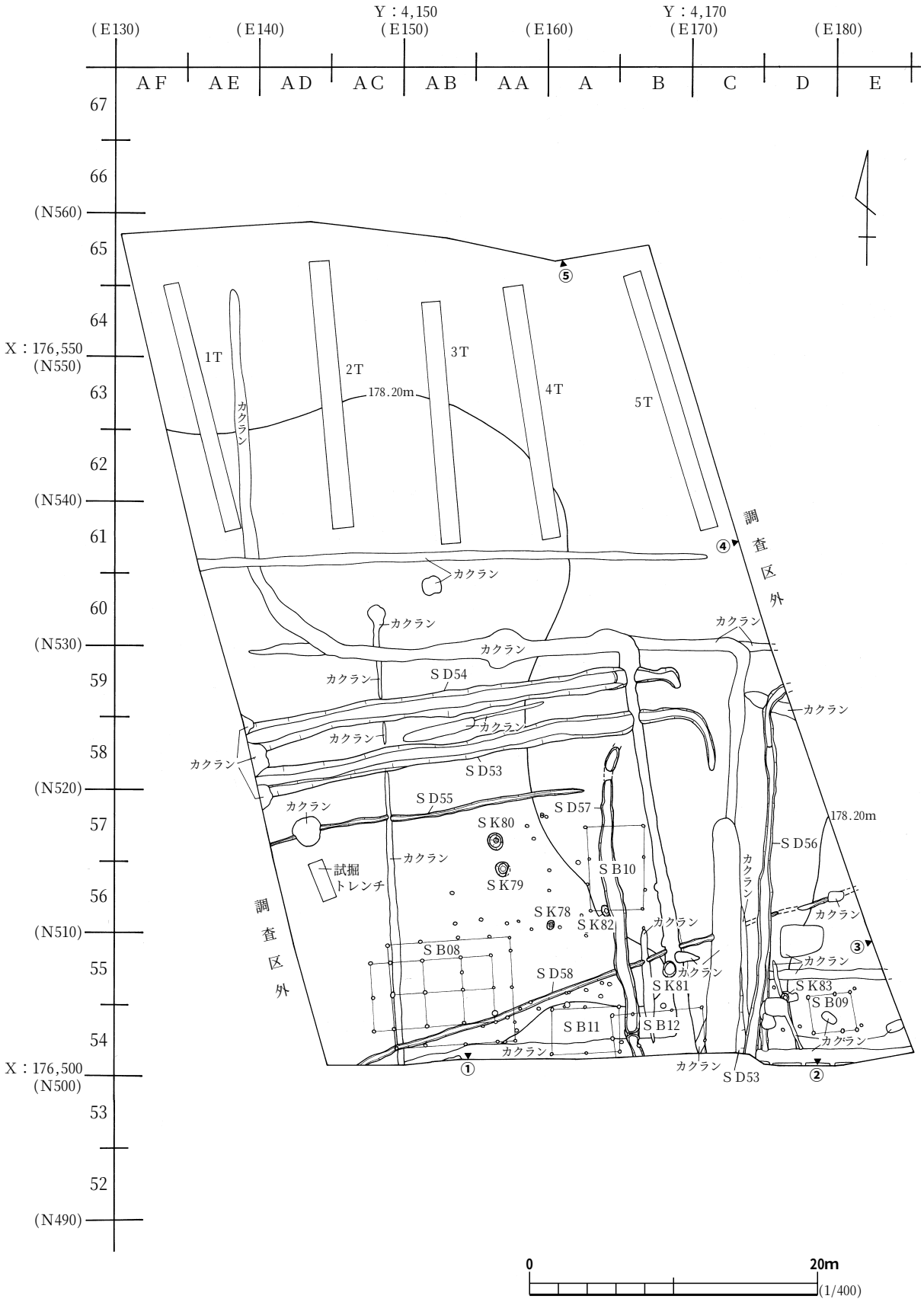


図６　遺構配置図とグリッド配置

た旧地形の観察から日橋川の蛇行の痕跡が読みとれる。

遺跡内における基本土層は，調査区境の壁を利用して土層観察を行った。基本的には１次・２次調査に準拠したが，約250mと南北に長い調査区のため，１次・２次調査区である南側の低位段丘境や氾濫原部分と今回調査を実施した遺跡北側端にあたる部分では堆積状況が必ずしも一様ではない。ただ，間層が殆ど入らない盛土・耕作土（ＬＩ）直下が基盤層（ＬＶ）となる部分が多いため，新たに基本層位を変更するには至らないと判断した。従って，１次・２次調査時に用いたＬⅡ～Ⅳ層とは整合性が認められず欠層となるため，今回の調査ではＬＩ層とＬＶ層がその主体となる。

土層の観察は，調査区境全てを対象としたが，土層柱状図として図化したのは図７に掲載した５地点である。以下，堆積土の特徴と遺構・遺物の関係について概略する。

ＬＩ：10ＹＲ3/3　暗褐色土。調査区全体を覆う耕作土で，盛土・耕作土も含まれる。層厚は平均して35㎝程である。ＡＣ～Ｅ－54グリッド付近の調査区南境では，農道や水路工事に伴い盛土が厚く堆積している。また，Ｄ・Ｅ－54グリッド付近では旧表土が観察されたため，これをＬＩｂと呼称した。現耕作土・盛土及び旧表土を含むＬＩには，平安時代から現代に至る遺物が極少数含まれる。

※今回の調査区内では，１次・２次調査で観察されたＬⅡ～ＬⅣ層は欠除となる。

ＬＶ：10ＹＲ5/6　黄褐色土。遺跡の基底面である。ほ場整備や水路建設，農道，宅地造成等によって撹乱を受け，削平が著しい部分もある。遺構の検出面であり，これより下層は無遺物層となる。（井）

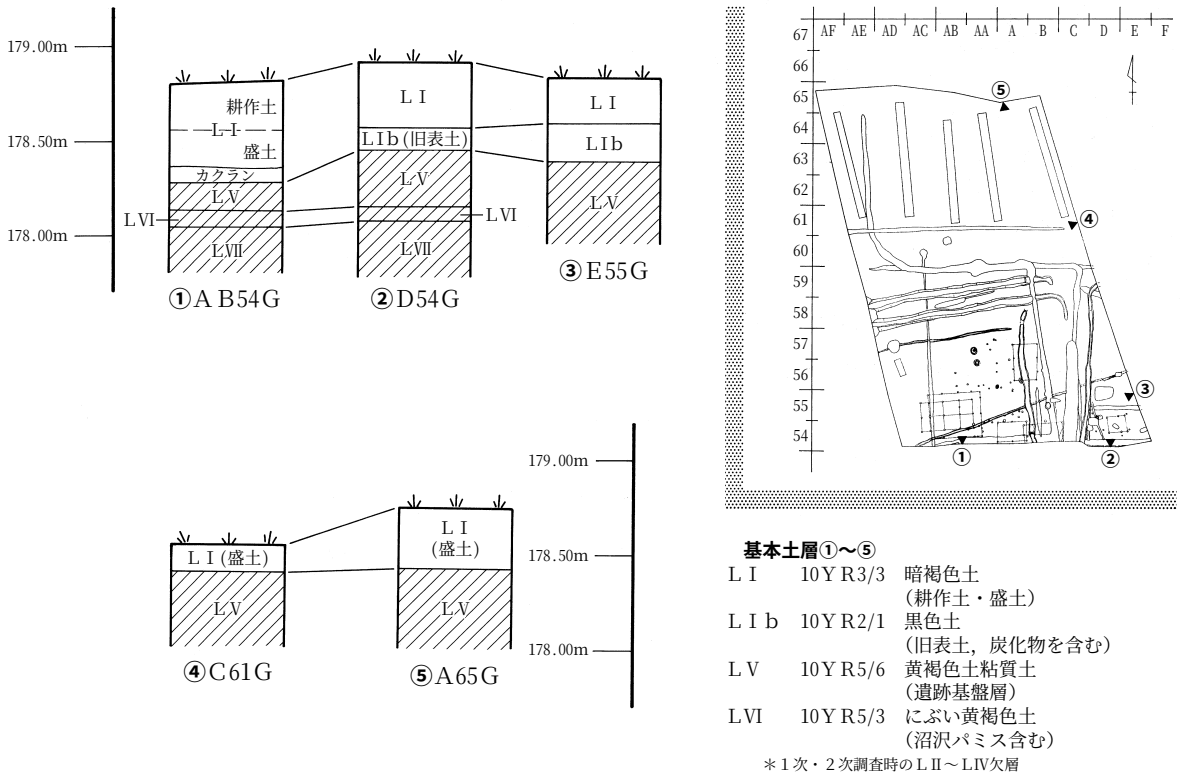


図７　基本土層図

第２節　掘立柱建物跡

今回の調査では，掘立柱建物跡５棟を検出した。調査区南側の平坦地に構築されており，区画溝（ＳＤ53・54）内から建物跡（ＳＢ08・10～12）も確認された。報告にあたっては，溝跡や土坑など建物跡に付随する一連の施設も存在すると判断されるが，ここでは掘立柱建物跡のみの事実報告とし，詳細は第３章において述べる。また，各柱間距離を土層断面図下に掲載した。なお，遺構番号は１次調査からの継続番号である。

８号建物跡　ＳＢ08（図８～10，写真３～6，表３）

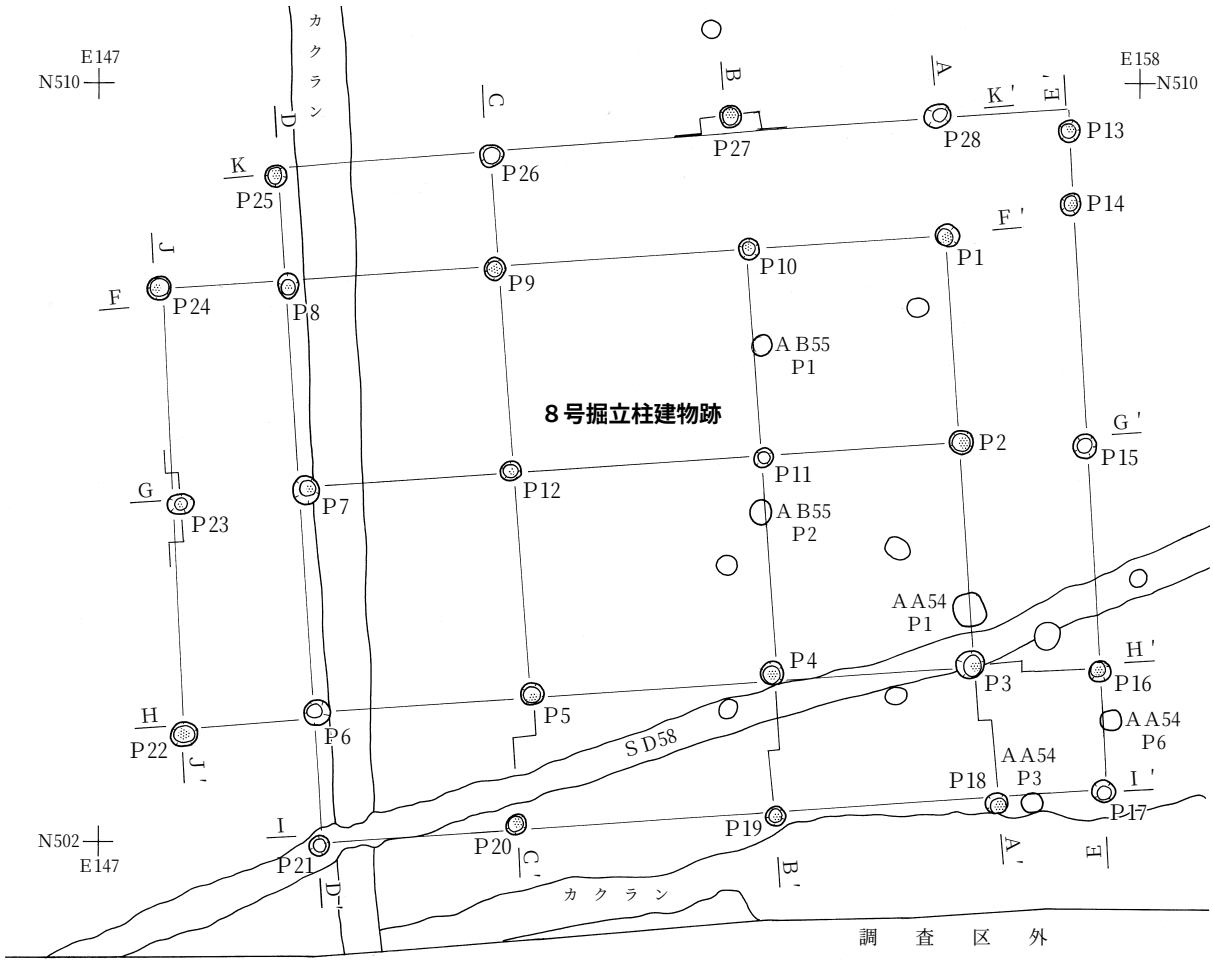
遺　　構　本遺構は調査区南側，ＡＡ～ＡＣ－55・56グリッドに位置する建物跡である。周辺の地形は，標高178.20m程の平坦地である。建物跡を構成する柱穴は，規則的に配列され，28個の柱穴を本建物跡として認定した。遺構検出面は，遺跡の基底面であるＬＶ上面である。本遺構のＰ３・Ｐ４・Ｐ21と58号溝跡が重複し，本遺構の方が古い。また西側には10・11号建物跡が建物の軸線を揃えて近接する。建物の北東側には78～82号土坑がまとまって分布している。さらに北側には，建物軸線と平行して東西方向に延びる53～55号溝跡が所在する。

本建物跡は南北２間，東西３間の身舎に，四辺にそれぞれ庇が付く。主軸方向は南北柱列を基本軸とした場合，真北に対して約３ 西に傾いている。身舎部分の全長は，東西軸の北側柱列Ｐ１－Ｐ８が6.99m，南側柱列Ｐ３－Ｐ６が7.03m，南北軸の東側柱列Ｐ１－Ｐ３が4.53m，西側柱列Ｐ６－Ｐ８が4.52mを測る。柱間については，東西３間のうち中央部分Ｐ４－Ｐ５・Ｐ９－Ｐ10は2.6m・2.62mと広く，その両側の柱間は2.15m～2.28mと狭い。南北２間では，北側Ｐ１－Ｐ２・Ｐ７－Ｐ８が2.17m・2.16mで，南側Ｐ２－Ｐ３・Ｐ６－Ｐ７が2.36mと広い。

Ｐ13・Ｐ14を除く庇の柱は，それぞれ身舎の柱穴に対応するが，西側柱列Ｐ６－Ｐ８に対応する庇列はＰ22－Ｐ24の３本だけであり，庇が身舎の周囲を全周しない造りとなる。庇の柱痕は，身舎の柱痕とは一直線に並ばず，それぞれ柱材１本分程ずれた位置に据えられている。庇部分の規模は，北側庇列Ｐ13－Ｐ25が8.24m，南側庇列Ｐ17－Ｐ21が8.32m，東側庇列Ｐ13－Ｐ17が6.96m，西側庇列Ｐ22－Ｐ24が4.76mとなる。身舎と庇までの柱間は，1.30m～1.52mと身舎部分の柱間の約半分となる。身舎部分の床面積は約32㎡で，庇を含めた床面積は約68㎡である。

各柱穴の平面形は円形を基調とするが，庇部分の柱穴は楕円形となるものが多い。柱穴の規模は検出面で直径20～28㎝，底面では12～24㎝である。検出面からの深さは，Ｐ11が浅くなる他は32～42㎝と深く，柱穴底面の標高は177.80m前後に揃う。柱痕の観察では，柱材には直径６～10㎝の丸木が用いられている。 掘形内堆積土は，黒褐色及び暗褐色粘質土・褐色砂質土の混土で，堅く締まっている。また柱痕が確認できた柱穴の中には，柱材を抜き取った痕跡が認められるものもある。

遺物はＰ21・Ｐ22から土器片が各１点出土した。いずれも摩滅した小破片であるため，図示して



柱痕

P1内堆積土

1　10YR2/1　黒色粘質土
（黄褐色土粒を極少量含む）
2　10YR2/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土粒を多量に含む）
3　10YR3/3　暗褐色粘質土
（黄褐色土粒を多量に含む）
4　10YR4/4　褐色砂質土
（黄褐色土粒を極少量含む）
5　10YR4/1　褐灰色砂質土
（黄褐色・黒色粘土塊を多量に含む）

P2・P10・P13・P19・P24内堆積土

1　10YR2/3　黒褐色粘質土
（黄褐色土粒を含む）
2　10YR2/1　黒色粘質土
（黄褐色土粒を少量含む）
3　10YR4/1　褐灰色砂質土
（黄褐色土粒を含む）

P3・P4・P27内堆積土

1　10YR2/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土粒を極少量含む）
2　10YR2/1　黒色粘質土
（黄褐色土粒を極少量含む）
3　10YR6/1　褐灰色粘質土
（黄褐色土粒を極少量，褐灰砂を含む）
4　10YR4/1　褐灰色砂質土
（黄褐色土粒を含む）

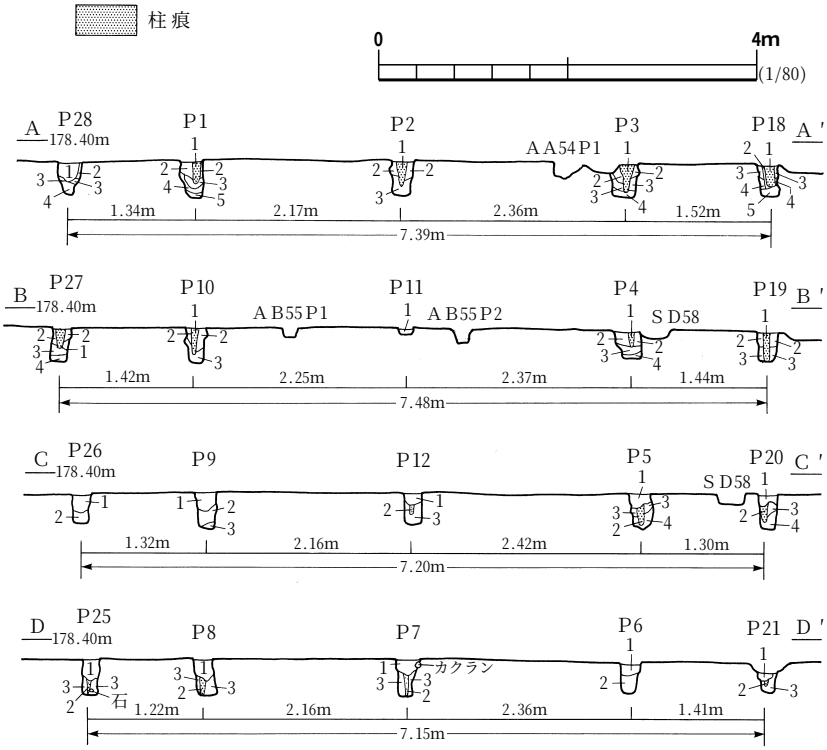
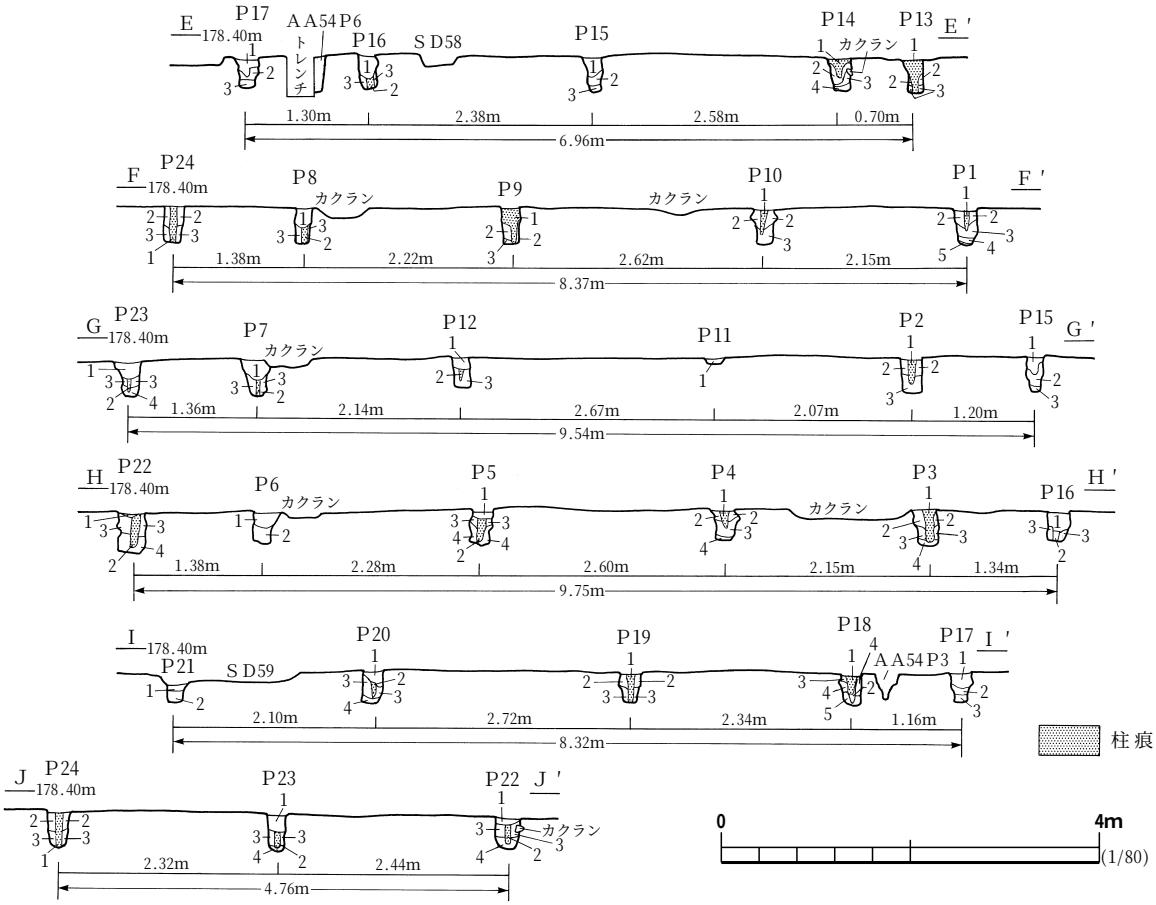


図８　８号掘立柱建物跡（１）

表３　８号掘立柱建物跡柱穴一覧

番号	平面形	柱穴の規模(cm)			底面標高	柱痕			備考
		検出面直径	底面直径	深さ	(m)	平面形	直径(cm)	抜取り痕	
1	円	25	15	39	177.81	円	8	－	
2	円	24	20	38	177.82	円	8	－	
3	円	30	24	37	177.81	円	10	○	ＳＤ58より古
4	円	28	20	34	177.86	円	8	－	ＳＤ58より古
5	円	22	20	38	177.82	円	8	○	
6	楕円	22～27	14～18	34	177.82	－	－	－	
7	円	28	15	40	177.80	円	5	○	
8	円	20	14～20	40	177.80	円	6	○	
9	円	22	16	38	177.82	円	6	○	
10	円	22	16	40	177.80	円	8	－	
11	円	20	14	8	178.12	－	－	－	
12	円	20	18	34	177.87	円	4	○	
13	円	22	16	34	177.82	円	6	○	
14	円	24	15	36	177.84	円	6	○	
15	円	22	12	37	177.83	－	－	－	
16	円	22	16	34	177.86	円	6	○	
17	円	24	14	32	177.86	－	－	－	
18	円	22	20	34	177.82	円	8	－	
19	円	22	14	32	177.84	円	6	－	
20	円	22	14	38	177.82	円	6	○	
21	円	20	14	22	177.84	－	－	○	ＳＤ58より古
22	楕円	22～28	18～24	34	177.82	円	8	○	
23	楕円	20～28	12	42	177.78	円	6	○	
24	円	20	18	38	177.82	円	8	－	
25	円	18	16	38	177.82	円	6	○	
26	楕円	20～24	15～20	32	177.88	－	－	－	
27	円	20	18	38	177.82	円	8	－	
28	楕円	24～28	8～18	38	177.82	－	－	－	

身舎	梁行２間	東側柱列				西側柱列			
		柱列	規模(m)	柱間	規模(m)	柱列	規模(m)	柱間	規模(m)
		Ｐ１－Ｐ３	4.53	Ｐ１－Ｐ２	2.17	Ｐ６－Ｐ８	4.52	Ｐ６－Ｐ７	2.36
				Ｐ２－Ｐ３	2.36			Ｐ７－Ｐ８	2.16
	桁行３間	北側柱列				南側柱列			
		柱列	規模(m)	柱間	規模(m)	柱列	規模(m)	柱間	規模(m)
		Ｐ１－Ｐ８	6.99	Ｐ１－Ｐ10	2.15	Ｐ３－Ｐ６	7.03	Ｐ３－Ｐ４	2.15
				Ｐ10－Ｐ９	2.62			Ｐ４－Ｐ５	2.60
				Ｐ９－Ｐ８	2.22			Ｐ５－Ｐ６	2.28
庇	四面庇	東側庇列				西側庇列			
		柱列	規模(m)	柱間	規模(m)	柱列	規模(m)	柱間	規模(m)
		Ｐ13－Ｐ17 4間	6.96	Ｐ13－Ｐ14	0.70	Ｐ22－Ｐ24 2間	4.76	Ｐ22－Ｐ23	2.44
				Ｐ14－Ｐ15	2.58			Ｐ23－Ｐ24	2.32
				Ｐ15－Ｐ16	2.38				
				Ｐ16－Ｐ17	1.30				
		東側柱列との距離		Ｐ１－Ｐ14	1.36	西側柱列との距離		Ｐ６－Ｐ22	1.38
				Ｐ３－Ｐ16	1.34			Ｐ８－Ｐ24	1.38
		北側庇列				南側庇列			
		柱列	規模(m)	柱間	規模(m)	柱列	規模(m)	柱間	規模(m)
		Ｐ13－Ｐ25 4間	8.24	Ｐ13－Ｐ28	1.32	Ｐ17－Ｐ21 4間	8.32	Ｐ17－Ｐ18	1.16
				Ｐ28－Ｐ27	2.22			Ｐ18－Ｐ19	2.34
				Ｐ27－Ｐ26	2.38			Ｐ19－Ｐ20	2.72
				Ｐ26－Ｐ25	2.32			Ｐ20－Ｐ21	2.10
		北側柱列との距離		Ｐ１－Ｐ28	1.34	南側柱列との距離		Ｐ３－Ｐ18	1.52
				Ｐ８－Ｐ25	1.22			Ｐ６－Ｐ21	1.41



Ｐ５・Ｐ20・Ｐ23内堆積土

1　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（黄褐色土粒を極少量含む）
2　10ＹＲ2/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土粒を含む）
3　10ＹＲ4/4　褐色砂質土
（黄褐色粘土塊を含む）
4　10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色砂質土
（黄褐色土粒を含む）

Ｐ6・Ｐ21・Ｐ26内堆積土

1　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（黄褐色土塊を極少量含む）
2　10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色砂質土
（黄褐色土塊を含む）

Ｐ7・Ｐ8・Ｐ12・Ｐ16・Ｐ25内堆積土

1　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（黄褐色土塊を少量含む）
2　10ＹＲ3/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土塊を含む）
3　10ＹＲ5/4　にぶい黄褐色砂質土
（黄褐色粘土塊を多量含む）

Ｐ9内堆積土

1　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（黄褐色粘土塊を極少量含む）
2　10ＹＲ4/4　褐色粘質土
（黄褐色粘土を少量含む）
3　10ＹＲ3/2　黒褐色粘質土
（褐灰砂を含む）

Ｐ11内堆積土

1　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（黄褐色粘土塊を極少量含む）

Ｐ14内堆積土

1　10ＹＲ2/2　黒褐色粘質土
（黄褐色粘土塊を極少量含む）
2　10ＹＲ3/3　暗褐色粘質土
（黄褐色土塊を含む）
3　10ＹＲ6/4　にぶい黄褐色粘質土
（黄褐色粘土をブロック状に含む）
4　10ＹＲ4/1　褐灰色砂質土
（黄褐色粘土塊を少量含む）

Ｐ15・Ｐ17内堆積土

1　10ＹＲ2/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土塊・酸化鉄を極少量含む）
2　10ＹＲ3/3　暗褐色粘質土
（黄褐色土塊を含む）
3　10ＹＲ4/1　褐灰色砂質土
（黄褐色土粒を含む）

Ｐ18内堆積土

1　10ＹＲ2/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土粒を極少量含む）
2　10ＹＲ3/3　暗褐色粘質土
（黄褐色土粒を含む）
3　10ＹＲ3/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土粒を多量含む）
4　10ＹＲ6/1　褐灰色砂質土
（ＮＰブロックを含む）
5　10ＹＲ4/1　褐灰色砂質土
（黄褐色土粒を少量含む）

図９　８号掘立柱建物跡（２）

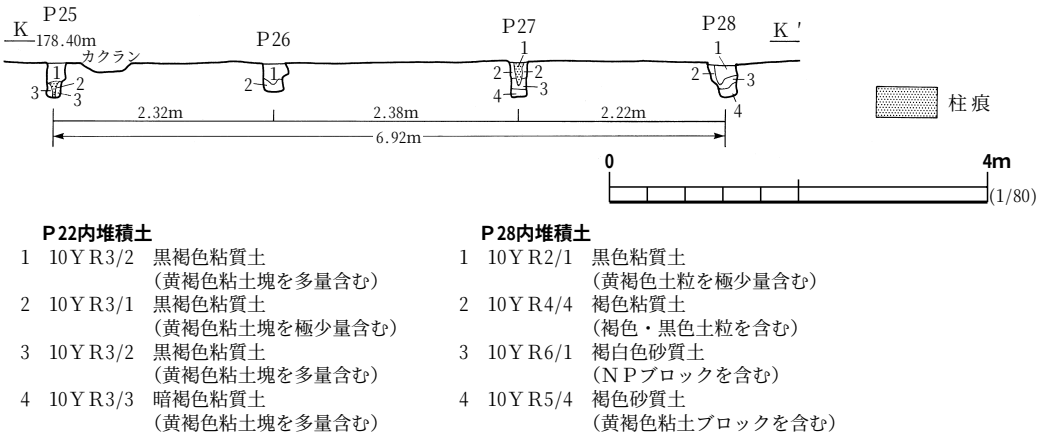


図10　８号掘立柱建物跡（３）

いない。

ま と め　本建物跡は南北２間，東西３間の身舎で，その四辺に約半間幅の庇が取り付く。身舎部分は総柱になるが，Ｐ11の掘形は他の柱穴に比べて浅く，束柱になると推定される。このことから身舎の間取りは，東側２間が主室，西側１間が控えの間になり，建物は南側を正面としていた可能性が高い。柱穴の観察では，柱材には直径６～10㎝の細い丸木が用いられている。さらに柱の抜き取り痕も確認できることから，建物が他の場所に移築されていると判断している。

本遺構からは年代を把握できる出土遺物がなく，明確な所属時期は特定できない。建物跡群を区画する53・54号溝跡や10～12号建物跡，78～82号土坑との関連性も考慮すると，中世～近世頃の所産と考えている。　（福　田）

９号建物跡　ＳＢ09（図11，写真７）

遺　　構　本建物跡は調査区南東端のＤ・Ｅ－54・55グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は標高178.20m程の比較的平坦な地形に位置し，規則的な配列構成が認められた６個の柱穴跡を本建物跡と認定した。検出面は，ＬＩ直下の基盤層であるＬＶ上面である。重複する遺構はないが，12号建物跡や83号土坑，56号溝跡等と近接している。なお，柱間距離は柱痕遺存の場合は芯々間，その他は掘形中央間を計測値とした。

本建物跡は南北１間，東西２間の側柱建物跡で，平面形はやや正方形に近い形状を呈する。主軸方向は，南北側柱列を基本軸とした場合N11°Wである。各柱列の全長は，南北軸のＰ１－Ｐ２（東側柱列）及びＰ４－Ｐ５（西側柱列）が約2.6m，東西軸のＰ５－Ｐ６（北側柱列）及びＰ３－Ｐ４（南側柱列）が共に2.1m，Ｐ１－Ｐ６（北側柱列）及びＰ２－Ｐ３（南側柱列）が１mを測る。南北柱列の１間は約8.6尺，東西柱列はほぼ７尺－３尺を測り，規則的な配置構成である。四隅の柱穴に囲まれた範囲の面積は8.1㎡である。

建物跡を構成する個々の柱穴の平面形は，ほぼ円形を呈し，径16～22㎝程の均一の規模である。検出面からの深さは平均して約24㎝を測り，隅柱のＰ２・Ｐ５が36㎝程で深い。掘形内堆積土は，

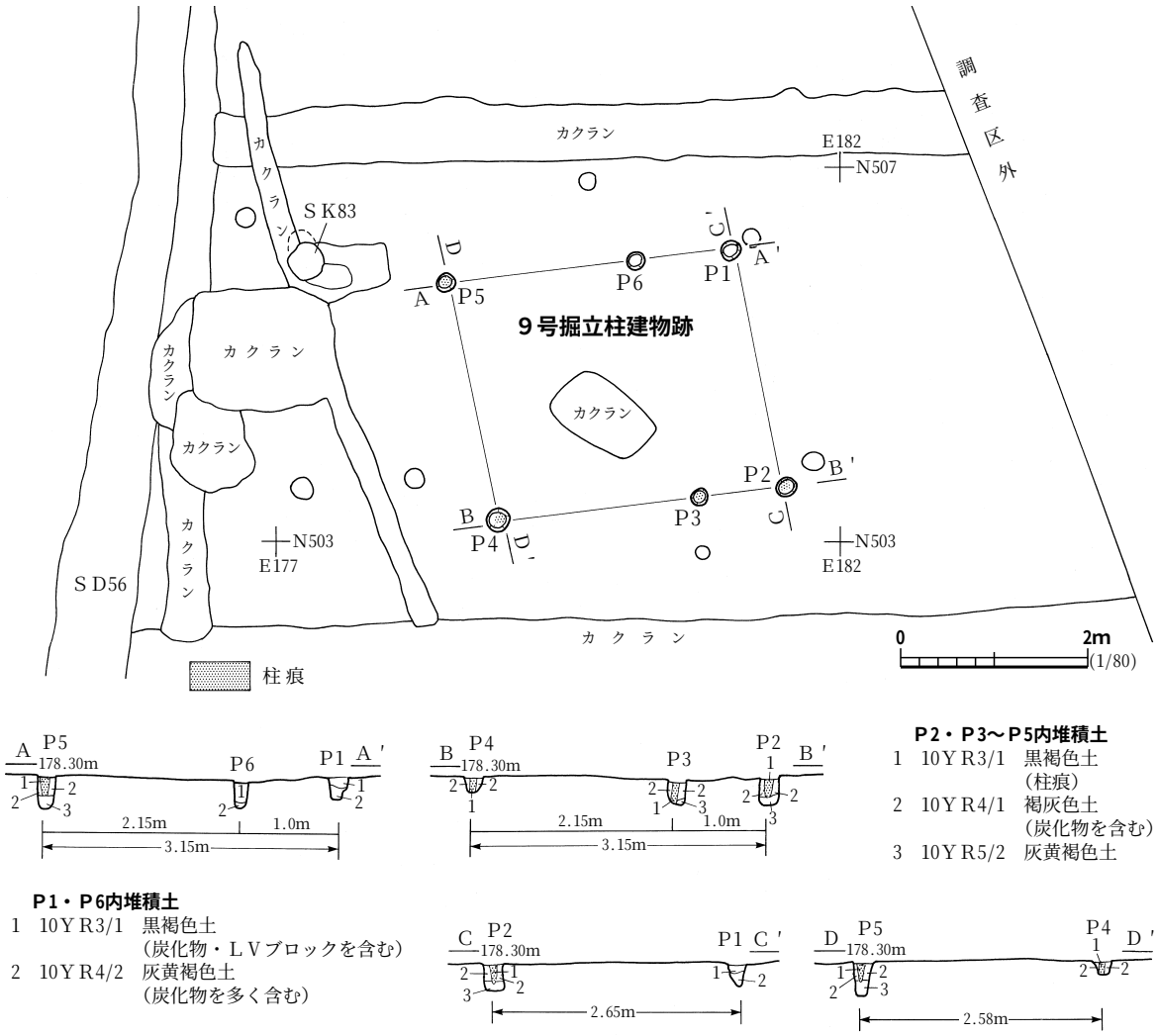


図11　９号掘立柱建物跡

大きくは柱痕と埋土に分層される。埋土は炭化物を含む褐色系を呈し，いずれも粘性・締まりがある。Ｐ２～Ｐ５からは径12㎝程の柱痕が検出され，丸木が用いられたものと考えられる。柱の抜き取り痕や根石等は確認されなかった。また，本建物跡からは遺物は出土していない。

ま と め　本遺構は桁行き２間，梁行き１間の東西棟を呈する側柱建物跡である。柱の抜き取り痕や根石等は認められなかった。本遺構の機能時期については出土遺物がなく，明確な時期比定は判断し得ないが，53・54号溝跡に区画された建物跡群と関連性が高いと考えられる。　（井）

10号建物跡　ＳＢ10（図12，写真８・９）

遺　　構　本遺構は調査区南側のＡ・Ｂ－56・57グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は標高178.20m程の平坦な地形を呈し，比較的遺構が密集する地域である。本建物跡は規則的な配列構成が認められた８個の柱穴からなる。検出面はＬＩ直下のＬＶ上面であるが，ＬＶ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。直接重複する遺構はないが，82号土坑や57号溝跡と同一地点での新旧関係にある。また，８・11号建物跡等と軸線をほぼ同一に

して隣接している。

本建物跡は南北桁行き３間，東西梁行き１間の側柱建物跡で，平面形は長方形を呈する。主軸方向は南北側柱列を基本軸とした場合，ほぼ真北を呈する。各柱列の全長は，南北軸のＰ１－Ｐ４（東側柱列）とＰ５－Ｐ８（西側柱列）が約5.9m，東西軸のＰ１－Ｐ８（北側柱列）及びＰ４－Ｐ５（南側柱列）が3.90m・3.54mを測る。南北柱列の１間は約７尺－６尺－６尺，東西柱列は約12尺を測る。四隅の柱穴に囲まれた範囲の面積は22㎡である。

建物跡を構成する個々の柱穴の平面形は円形を呈し，径15～20㎝程の均一した規模である。検出面からの深さは削平により平均して約10㎝と浅く，Ｐ３・８が24㎝前後で比較的深い。掘形内堆積土は，大きくは柱痕と埋土に分層される。埋土は炭化物を含む褐色系を呈し，いずれも粘性・締ま

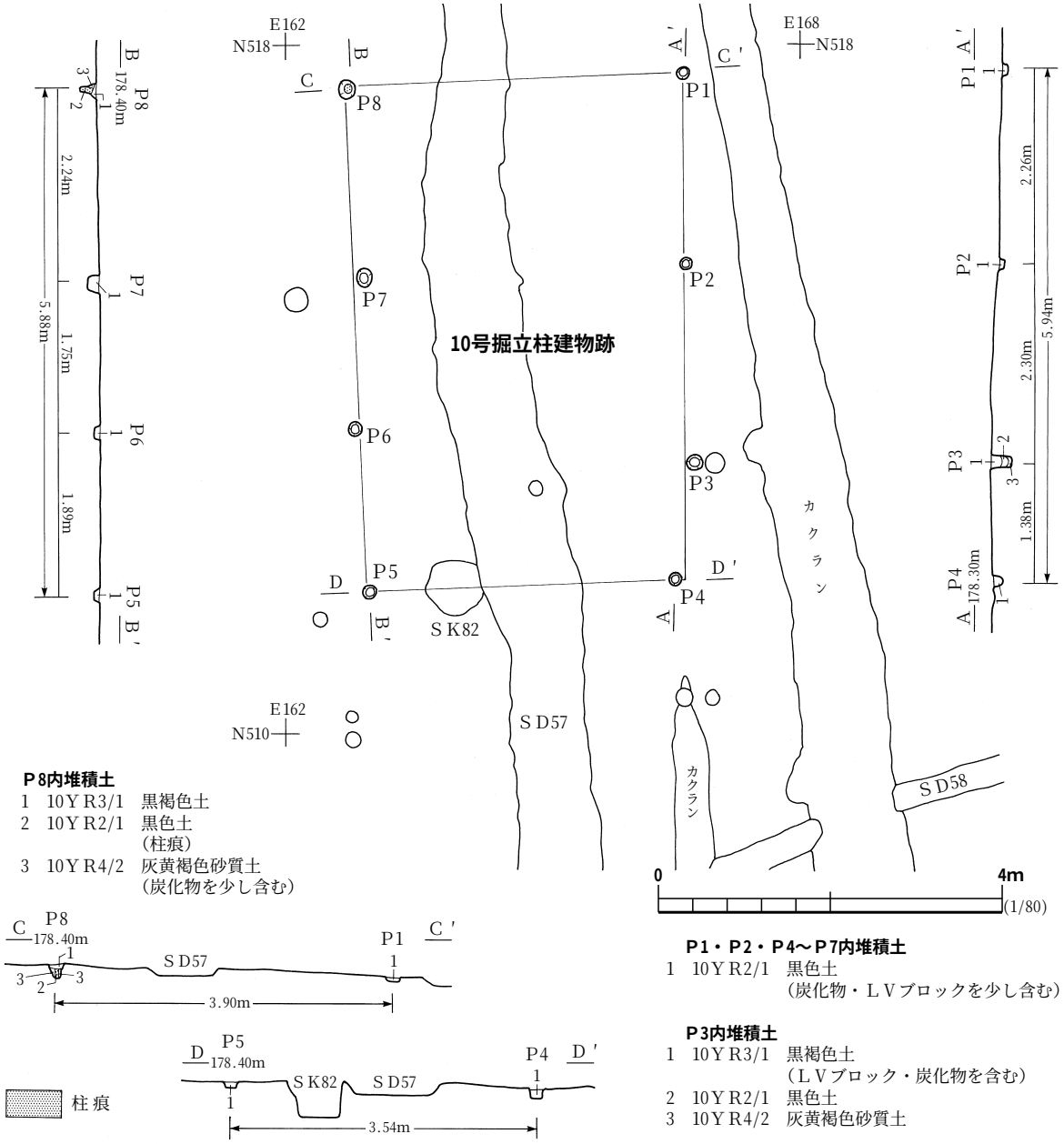


図12　10号掘立柱建物跡

りがある。Ｐ８からは径10㎝程の柱痕が検出されたが，柱の抜き取り痕や根石等は確認されなかった。また，本建物跡からは遺物は出土していない。

ま と め　本建物跡は桁行き３間，梁行き１間の東西棟を呈する側柱建物跡であるが，ほぼ中央に57号溝跡が存在するため，東西梁行きが２間になる可能性がある。本遺構の機能時期については出土遺物がなく，明確な時期比定には至らないが，建物跡の配置構成や主軸の一致等から53・54号溝跡に区画された８・11号建物跡群と関連性が高く，屋敷跡を構成する建物跡の一つと考えられる。

（井）

11号建物跡　ＳＢ11（図13，写真８・10）

遺　　構　本建物跡は調査区南境の中央付近のＡ－54グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は標高178.20m程の比較的平坦な地形を呈し，遺構が集中する地域である。本建物跡は規則的な配列構成が認められた６個の柱穴からなるが，南側の調査区外へさらに延びる可能性もある。検出面はＬＩ直下のＬＶ上面である。直接的に重複する遺構はないが，12号建物跡と同一地点での新旧関係が認められ，８・10号建物跡と軸線をほぼ同一にして隣接している。

本建物跡は南北１間，東西２間の側柱建物跡で，平面形は整った長方形を呈する。主軸方向は南

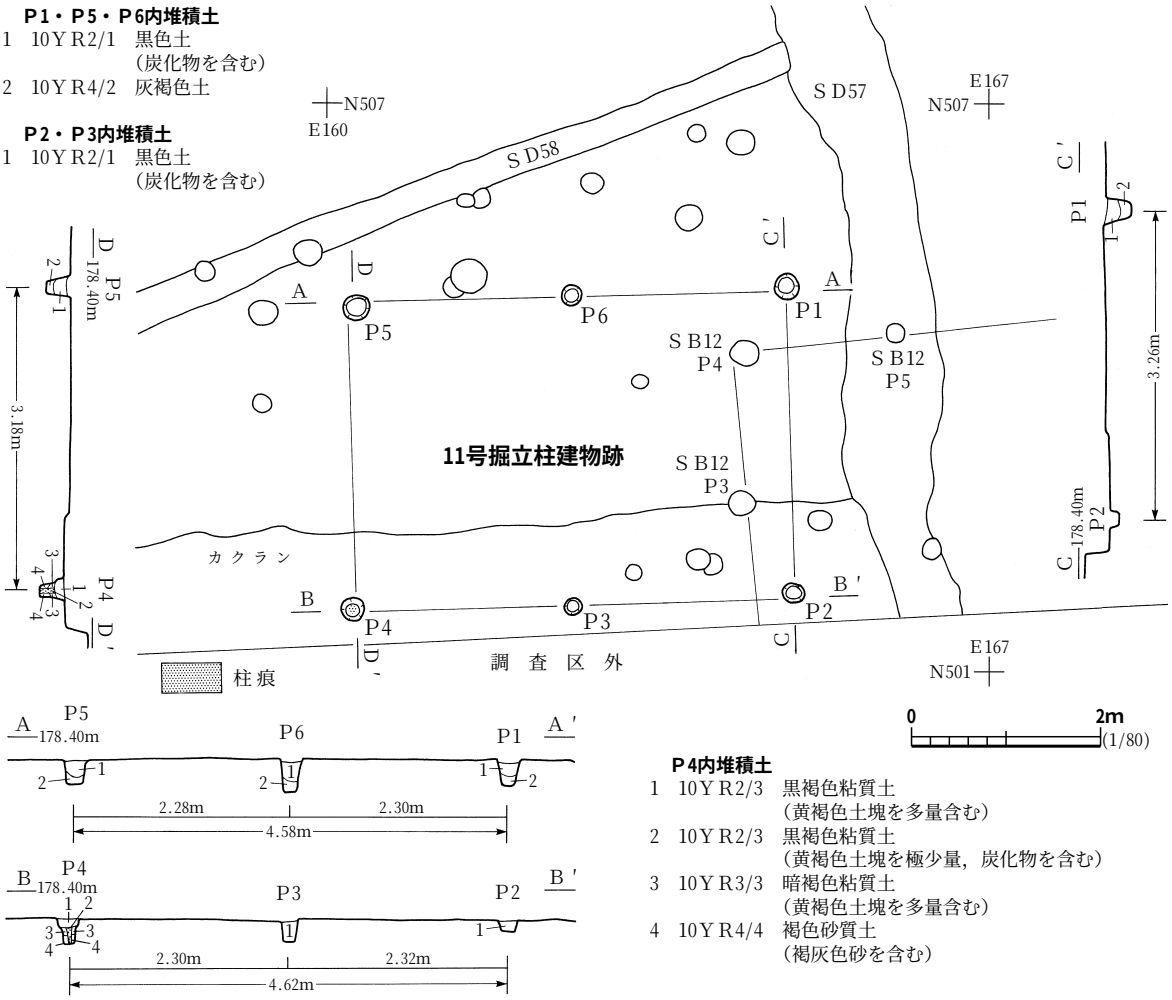


図13　11号掘立柱建物跡

北側柱列を基本軸とした場合，ほぼ真北を示す。各柱列の全長は，南北軸のＰ１－Ｐ２（東側柱列）とＰ４－Ｐ５（西側柱列）が約3.2m，東西軸のＰ１－Ｐ５（北側柱列）及びＰ２－Ｐ４（南側柱列）が約4.6mを測る。南北柱列の１間は約10.6尺，東西柱列は約7.6尺を測り，規則的な配置構成である。四隅の柱穴に囲まれた範囲の面積は14.7㎡である。

建物跡を構成する個々の柱穴の平面形は円形を呈し，径22～30㎝程の均一した規模である。検出面からの深さは平均して約20㎝であるが，北側東西列のＰ１－Ｐ５は28～38㎝前後で比較的深い。掘形内堆積土は，大きくは柱痕と埋土に分層される。埋土は炭化物を含む暗褐色系を呈し，いずれも粘性・締まりがある。柱痕の観察では，Ｐ４からは径８㎝程の柱痕が検出され，丸木が用いられたものと考えられる。他の柱穴からの柱の抜き取り痕や根石等は確認されなかった。また，本建物跡からは遺物は出土していない。

ま と め　本建物跡は南側調査区外へ延びる可能性もあるが，１間×２間の東西棟を呈する側柱建物跡として判断した。本遺構の機能時期については出土遺物がなく，明確な時期比定には至らないが，建物跡の配置構成や主軸の一致等から53・54号溝跡に区画された８・10号建物跡等と関連性が高く，屋敷跡を構成する建物跡の一つと考えている。（井）

12号建物跡　ＳＢ12（図14，写真８・10）

遺　　構　本建物跡は調査区南境の中央付近のＡ・Ｂ－54グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は標高178.20m程の平坦な地形を呈し，比較的遺構が集中する地域である。本建物跡は規則的な配列構成が認められた６個の柱穴からなるが，さらに南側調査区外へ延びる。検出面はＬＩ直下のＬＶ上面である。直接的に重複する遺構はないが，11号建物跡と同一地点での新旧関係が認められ，８・10・11号建物跡や81号土坑，58号溝跡等と隣接している。

本遺構は検出できた範囲において，東西３間，南北２間以上の建物跡と考えられる。平面形は比較的整った長方形を呈する。主軸方向は南北側柱列を基本軸とした場合，Ｎ３°Ｗである。各柱列の全長は，南北軸のＰ１－Ｐ２（東側柱列）が約2.1m，Ｐ３－Ｐ４（西側柱列）が約1.6m，東西軸のＰ１－Ｐ４（北側柱列）が6.2m程を測る。南北柱列の１間は約７尺，東西柱列は６尺～７尺を測る。建物跡を構成する個々の柱穴の平面形は円形を呈し，径20～30㎝程の規模である。検出面からの深さは平均して約20㎝を測り，底面標高がほぼ統一している。掘形内堆積土は，大きくは柱痕と埋土に分層される。埋土は炭化物を含む褐色系を呈し，いずれも粘性・締まりがある。柱痕の観察では，Ｐ１からは径10㎝程の柱痕が検出され，丸木が用いられたものと考えられる。他の柱穴からの柱の抜き取り痕や根石等は確認されなかった。また，本建物跡からは遺物は出土していない。

ま と め　本建物跡は南側調査区外へ延びるため明確な規模は不明であるが，３間×２間以上の側柱建物跡として判断した。本遺構の機能時期については出土遺物がなく，明確な時期比定には至らないが，11号建物跡との前後関係や建物跡の配置構成等から，隣接する53・54号溝跡に区画された８・10号建物跡等と関連性が高く，屋敷跡を構成する建物跡の一つと考えている。（井）

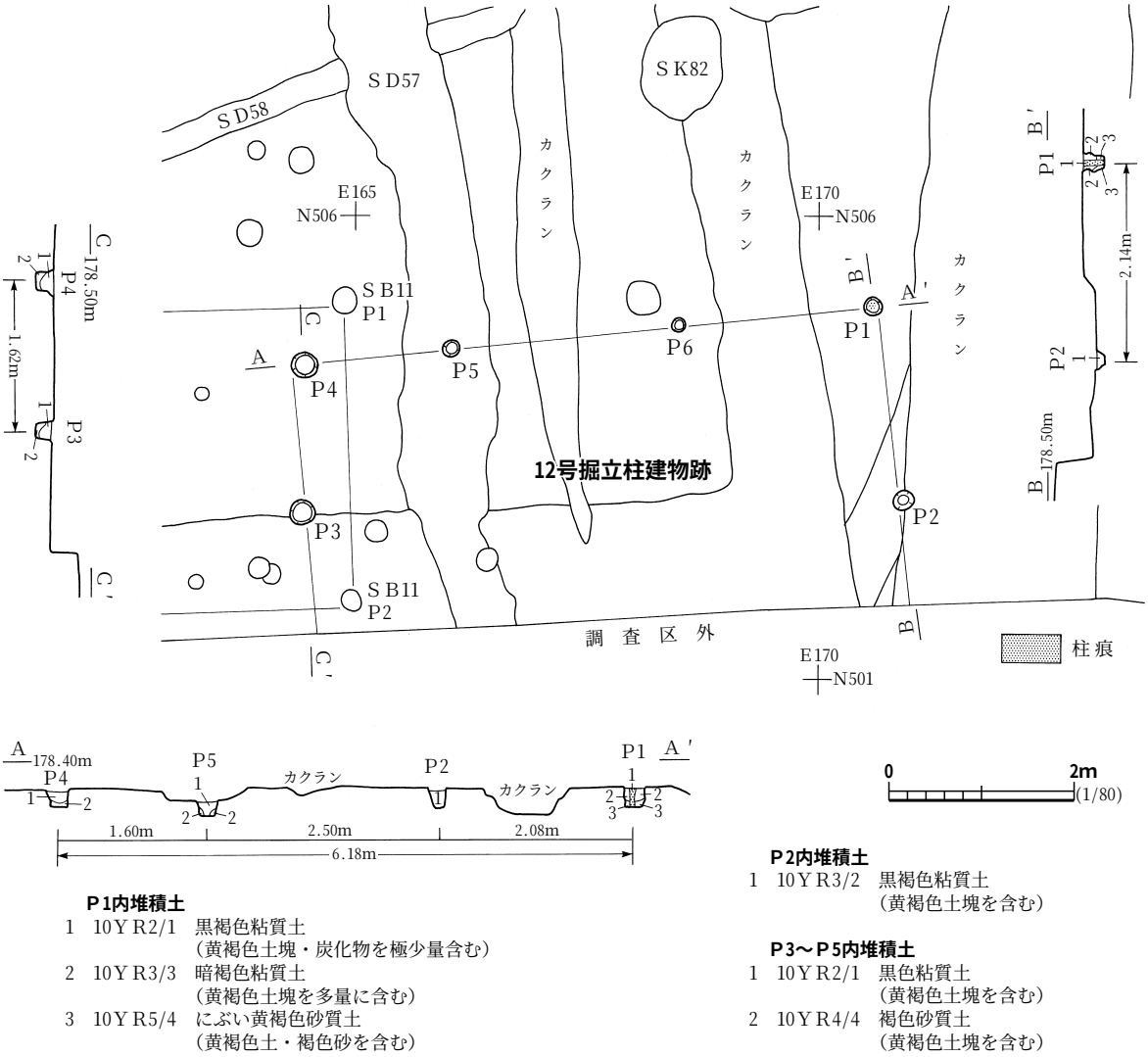


図14　12号掘立柱建物跡

第３節　土　　坑

今回の３次調査で検出された土坑は６基である。１次調査分60基と２次調査検出の18基，それに塩川町調査検出の18基を加えると総計102基となる。これらの土坑群は,散在して認められ重複するものは殆どなかったが，今回の調査区で検出できた土坑群は53・54号溝跡内に建物跡等と隣接して存在するものが多く，屋敷跡を構成する一連の遺構群と考えられる。詳細な時期・性格等については，出土遺物が僅かなため不明なものが多いが，規模・形態・土層の堆積状況が類似するものが多く，大半は中世頃に帰属するものと判断される。なお，今回の調査で使用した遺構番号は,1次・２次調査からの継続番号である。

また79号土坑については，土壌分析用のサンプルを採取し，トイレ遺構分析（寄生虫卵分析・花粉分析・種実同定）を行っている。その結果についての詳細は付章１を参照願いたい。

78号土坑　ＳＫ78（図15・16，写真11）

本土坑は調査区南側中央付近のＡ－56グリッドに位置する。周囲は標高178.20m程の平坦な地形で，重複する遺構はないが，８・10号建物跡等と隣接している。検出面はＬＩ直下のＬＶ上面であるが，ＬＶ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。遺構内堆積土は，色調及び混入物から５層に分層できた。上層のℓ１～３及び下層のℓ５はＬＶ・Ⅵブロックを含む黒褐色系粘質土で人為的埋土と判断され，間層の水性堆積するℓ４は基本的には自然流入土と考えられる。本土坑の機能時期にℓ５が埋没し，ℓ４が自然堆積した後に開口部分を人為的に埋め戻した（ℓ１～３）ものと考えられる。

遺構の平面形は円形を呈し，規模は開口部長径98㎝，短径88㎝，底面径35㎝を測る。周壁は開口部付近がやや開くが下位は比較的急角度で立ち上がる。底面はＬⅧまで掘り込んで構築されており，やや凹凸があるがほぼ平坦である。検出面から最深部までの深さは80㎝である。

遺物は土師器・かわらけ片が５点，木炭１点が出土している。いずれも上層（ℓ１～３）からの出土で，遺存状態が良かった１点について図示した。図16－１はかわらけ杯の口縁部片で，水挽きによる器面調整が顕著である。推定口径14.2㎝を測る。

本遺構と重複する遺構や伴出する遺物がないため，明確な所属時期・性格等は不明である。しかし，隣接する８・10～12号建物跡及び53・54号溝跡等との関連性が窺えることから，それらの遺構群と同様な年代観を想定している。また，79・80号土坑と規模・形態・土層の堆積状況等が類似している点は特徴的といえる。

79号土坑　ＳＫ79（図15，写真11）

本遺構は平成14年度の試掘調査で検出された土坑（20Ｔ）である。調査区南側中央付近のＡＡ－56グリッドに位置し，周囲は標高178.20m程の平坦な地形である。検出面はＬＩ直下のＬＶ上面であるが，ＬＶ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はないが，近接して78・80号土坑や８・10号建物跡等が存在する。遺構内堆積土は色調及び混入物から６層に分層できた。いずれも黒褐色系を基調とする粘質土で，上層のℓ１～３はＬＶ・Ⅵブロック，下層のℓ４～６には灰白砂が多く含まれている。基本的には人為的堆積土と判断され，本土坑の機能時期に下層のℓ４～６が埋没し，その後上層部の開口部分を人為的に埋め戻した（ℓ１～３）ものと考えられる。

遺構の平面形は円形を呈し，規模は開口部長径98㎝，底面径45㎝を測る。周壁は開口部付近がやや開くが下位は垂直気味に立ち上がる。底面はやや凹凸はあるがほぼ平坦で，検出面から最深部までの深さは96㎝である。

遺物は土師器・かわらけ片が５点，木炭１点が出土しているが，いずれも上層のℓ１～３の出土である。細片で摩滅が著しいため図示できたものはなく，土器の特徴や時期比定には至らない資料

であった。

本遺構と重複する遺構や伴出する遺物がないため，明確な所属時期は不明である。しかし，隣接する８・10～12号建物跡及び53・54号溝跡等との関連性が窺えることから，それらの遺構群と同様な年代観を想定している。また，78・80号土坑と規模・形態・土層の堆積状況等が類似しており，「井戸」・「ゴミ穴」等の性格が考えられる。

80号土坑　ＳＫ80（図15，写真11）

本遺構は79号土坑と共に平成14年度の試掘調査で検出された土坑（20Ｔ）である。調査区南側中央付近のＡＡ－57グリッドに位置し，周囲は標高178.20m程の平坦な地形である。検出面はＬＩ直下のＬＶ上面であるが，ＬＶ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。重複する遺構はないが，近接して78・79号土坑や８・10号建物跡，55号溝跡等が存在する。遺構内堆積土は５層に分層できた。上層のℓ１～３はＬＶ～Ⅶブロック・炭化物を含む黒褐色系の人為的堆積土と判断され，最下層のℓ５は壁側からの自然流入土と考えられる。褐灰色砂質土のℓ４直上には25～30㎝程の礫が５個認められた。本土坑の機能時期に下層のℓ４・５が埋没し礫が投棄され，その後上層部の開口部分を人為的に埋め戻したものと考えられる。

遺構の平面形は円形を呈し，規模は開口部長径108㎝，底面径38㎝を測る。周壁は開口部付近がやや開くが下位は垂直気味に立ち上がる。底面は中央付近がやや窪むがほぼ平坦である。検出面からの深さは100㎝を測る。

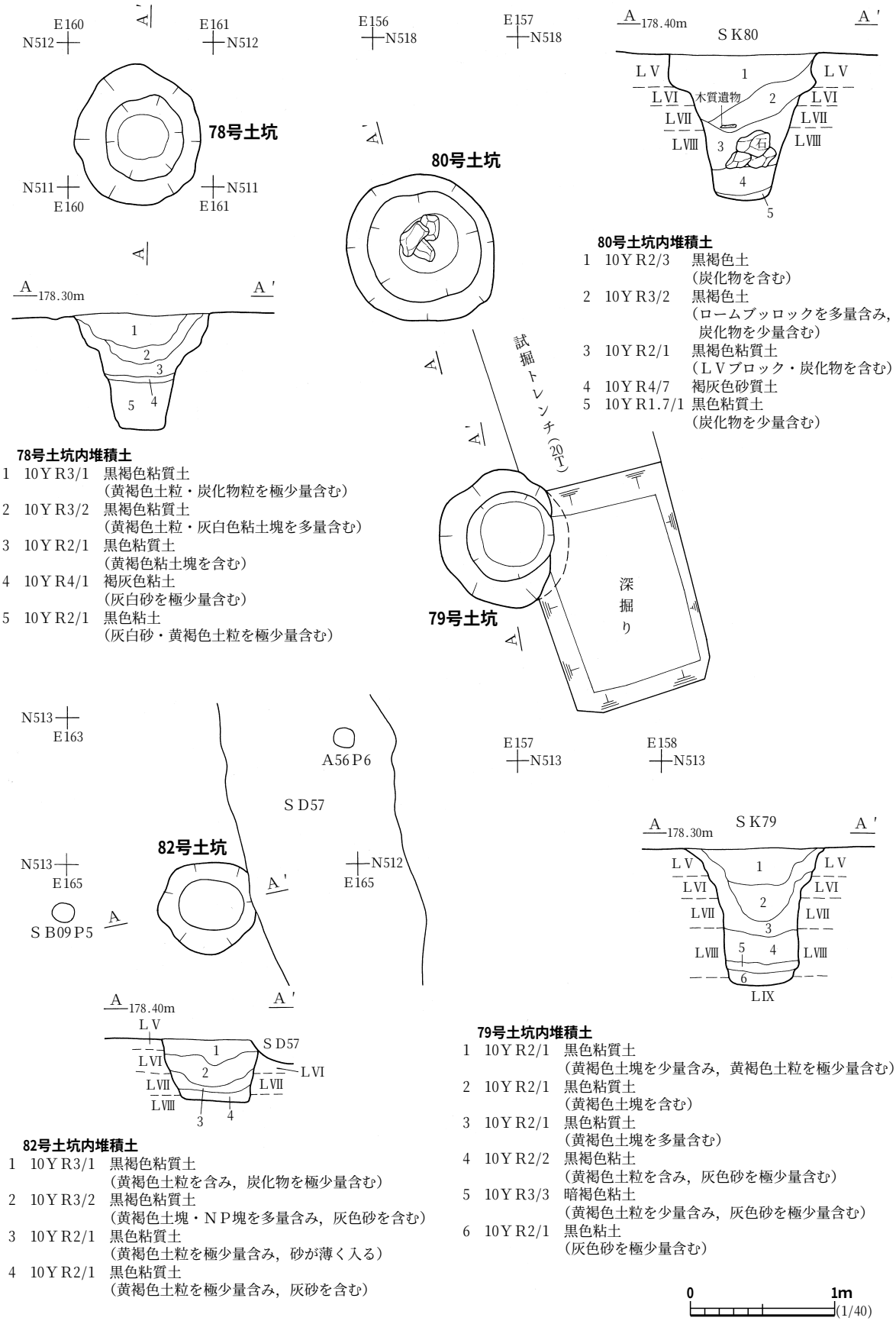
遺物は土師器・かわらけ片が７点出土している。いずれも上層（ℓ１～３）からの出土で，細片で摩滅が著しいため図示できたものはなく，土器の特徴や時期比定には至らない資料であった。

本遺構と重複する遺構や伴出する遺物がないため，明確な所属時期は不明である。しかし，隣接する８・10～12号建物跡及び53・54号溝跡等との関連性が窺えることから，それらの遺構群と同様な年代観と考えている。また，78・79号土坑と規模・形態・土層の堆積状況等が類似しており，性格的には「井戸」・「ゴミ穴」等の可能性が高いと考えている。

81号土坑　ＳＫ81（図16，写真11）

本土坑は調査区南側のＢ－55グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，標高178.20m程の平坦な地形を呈し，比較的遺構の密度が多い区域である。重複する遺構はないが，11・12号建物跡，57・58号溝跡等と隣接している。検出面はＬＩ直下のＬＶ上面であるが，ＬＶ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。遺構内堆積土は単一層で，締まりが強く，人為的に一気に埋め戻された様相を呈する。

遺構の平面形は楕円形を呈し，規模は開口部長軸110㎝，短軸85㎝，底面長軸85㎝を測る。周壁は上部開口部付近がやや開くが下位は垂直気味に立ち上がる。底面はＬⅦまで掘り込んで構築されており，やや凹凸はあるがほぼ平坦である。検出面から最深部までの深さは38㎝である。



78号土坑内堆積土

1　10ＹＲ3/1　黒褐色粘質土
（黄褐色土粒・炭化物粒を極少量含む）
2　10ＹＲ3/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土粒・灰白色粘土塊を多量含む）
3　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（黄褐色粘土塊を含む）
4　10ＹＲ4/1　褐灰色粘土
（灰白砂を極少量含む）
5　10ＹＲ2/1　黒色粘土
（灰白砂・黄褐色土粒を極少量含む）

80号土坑内堆積土

1　10ＹＲ2/3　黒褐色土
（炭化物を含む）
2　10ＹＲ3/2　黒褐色土
（ロームブッロックを多量含み，炭化物を少量含む）
3　10ＹＲ2/1　黒褐色粘質土
（ＬＶブロック・炭化物を含む）
4　10ＹＲ4/7　褐灰色砂質土
5　10ＹＲ1.7/1　黒色粘質土
（炭化物を少量含む）

79号土坑内堆積土

1　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（黄褐色土塊を少量含み，黄褐色土粒を極少量含む）
2　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（黄褐色土塊を含む）
3　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（黄褐色土塊を多量含む）
4　10ＹＲ2/2　黒褐色粘土
（黄褐色土粒を含み，灰色砂を極少量含む）
5　10ＹＲ3/3　暗褐色粘土
（黄褐色土粒を少量含み，灰色砂を極少量含む）
6　10ＹＲ2/1　黒色粘土
（灰色砂を極少量含む）

82号土坑内堆積土

1　10ＹＲ3/1　黒褐色粘質土
（黄褐色土粒を含み，炭化物を極少量含む）
2　10ＹＲ3/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土塊・ＮＰ塊を多量含み，灰色砂を含む）
3　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（黄褐色土粒を極少量含み，砂が薄く入る）
4　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（黄褐色土粒を極少量含み，灰砂を含む）

0　1m
(1/40)

図15　78～80・82号土坑

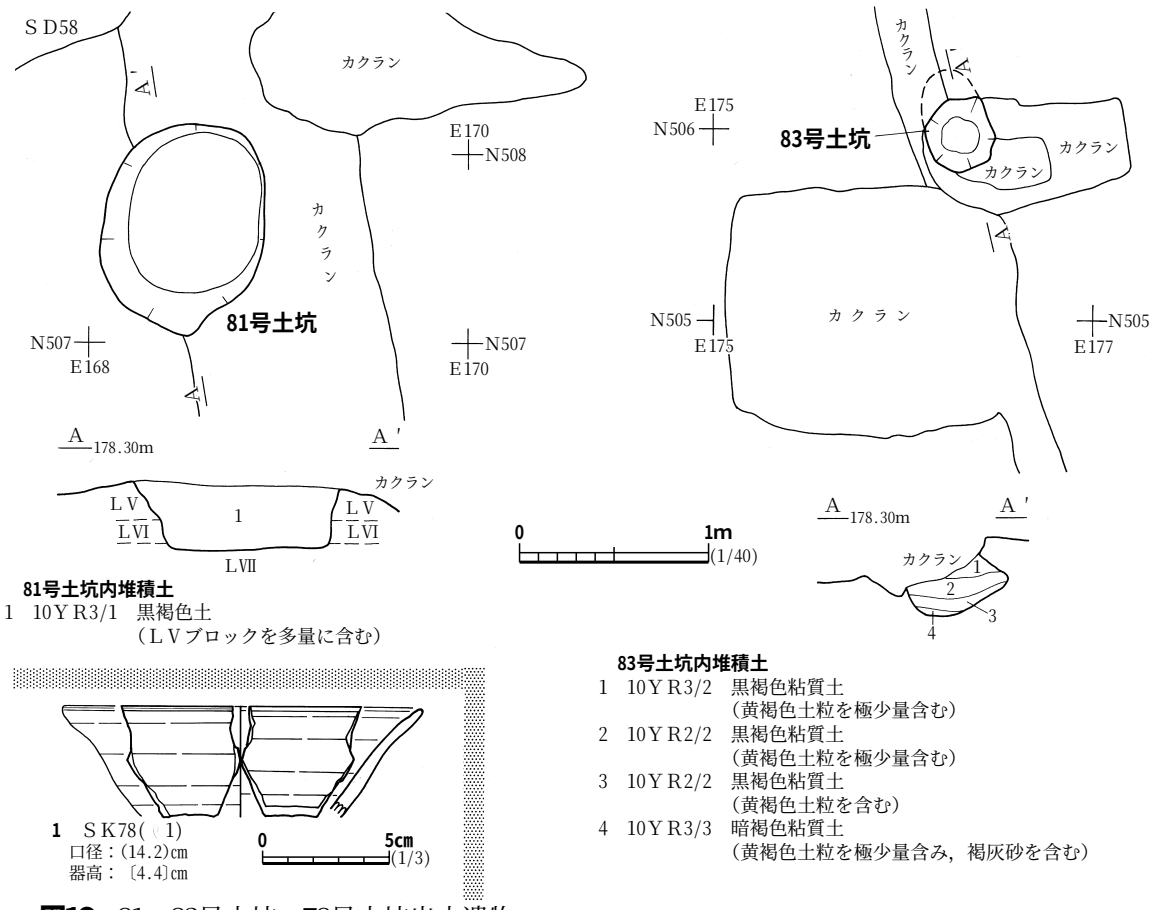
本遺構内からは出土遺物がなく，他遺構との重複も認められないため，明確な所属時期・性格等は不明である。

82号土坑　ＳＫ82（図15，写真12）

本土坑は調査区南側中央付近のＡ－56グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，標高178.20m程の平坦な地形を呈し，比較的遺構の密度が多い区域である。検出面はＬＩ直下のＬＶ上面であるが，ＬＶ自体が削平を受けているため，本来の掘り込み面はやや上位であったと考えられる。57号溝跡と重複しており，本遺構の方が古い。遺構内堆積土は４層に分層され，いずれもＬＶ・VIブロックを含む黒褐色系の粘質土で，下層のℓ３・４には灰白砂が比較的多く含まれる。本土坑の機能時期に下層のℓ３・４が埋没し，その後上層部の開口部分を人為的に埋め戻した（ℓ１・２）ものと考えられる。

遺構の平面形は楕円形を呈し，規模は開口部径70㎝，底面長軸45㎝を測る。周壁は西側がやや緩やかな立ち上がりとなるが，他は床面から急に立ち上がる。床面はＬⅦまで掘り込んで造られており，検出面から底面までの深さは42㎝を測る。

本遺構は今回検出された土坑の中では小型に属する。所属時期・性格等については，出土遺物がないため判断し得ないが，78～80号土坑と類似する堆積状況が確認されている。



81号土坑内堆積土
1　10ＹＲ3/1　黒褐色土
（ＬＶブロックを多量に含む）

83号土坑内堆積土
1　10ＹＲ3/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土粒を極少量含む）
2　10ＹＲ2/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土粒を極少量含む）
3　10ＹＲ2/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土粒を含む）
4　10ＹＲ3/3　暗褐色粘質土
（黄褐色土粒を極少量含み，褐灰砂を含む）

図16　81・83号土坑，78号土坑出土遺物

83号土坑　ＳＫ83（図16，写真12）

本土坑は調査区南東側のＤ－55グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，比較的平坦な立地を呈し，旧宅地跡が所在していた場所である。検出面はＬＩ直下のＬＶ上面で，遺構の大半は削平を受けており，遺存状態は極めて悪い。重複する遺構はなく，隣接して９号建物跡や56号溝跡等がある。遺構内堆積土は４層に分層され，いずれもＬＶ・VIブロック・炭化物を混入する黒褐色系の粘質土である。壁際からの流れ込みによるレンズ状の堆積状況が認められ，自然堆積の様相を呈している。

平面形は削平を受けているが，ほぼ楕円形を呈するものと思われる。規模は開口部径35㎝，底面径20㎝を測り，検出土坑の中では小さい。周壁は中位がオーバーハングしており，フラスコ状を呈するものと考えられる。床面はＬVIまで掘り込んで造られ，やや凹凸がある。検出面からの深さは44㎝である。

本遺構の所属時期・性格については出土遺物がなく不明である。（井）

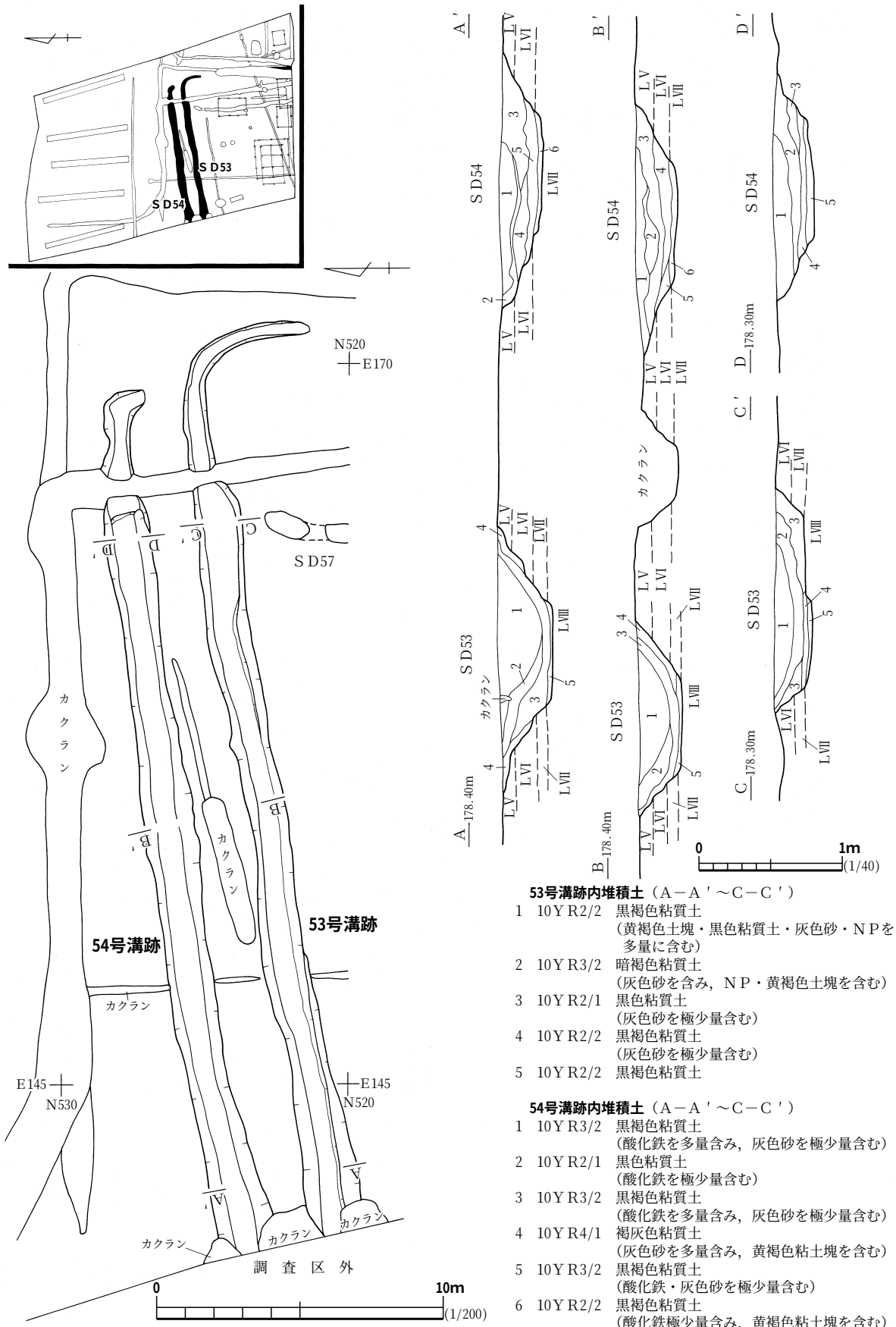
第４節　溝　　跡

今回の３次調査で検出された溝跡は６条である。１次調査分の35条と２次調査分の24条，それに塩川町（１・２次）調査部分の18条を含めると総計83条となる。これらの溝跡は，１次・２次調査報告（『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告２・３』）や前章等で述べたように，連続する同一の遺構でありながら別番号を付したものや，削平の影響や調査区外に延びるものなど，全体の形状や規模が明確に把握できないものが多かった。そのため，本来は60条程の検出数と考えられるが，遺物を多く含む自然流路跡もしくは旧河川跡として取り扱ったものを除くと，人工的な区画溝等とする遺構は40条程と考えられる。なお，今回の調査では屋敷跡（ＳＢ８・10～12）を区画する堀跡などが検出されている。

報告にあたっては，遺構番号は継続番号であり，隣接する溝跡や関連性が窺える溝跡はまとめて掲載した。また，溝跡の性格上，平面図と土層断面図の縮尺率を変えて便宜的に掲載している。

53号溝跡　ＳＤ53（図17・19，写真14）

本遺構は調査区中央付近のＡＤ～Ｃ－58・59グリッドに位置し，周辺は標高178.20m程の平坦な地形である。検出面はＬＩ直下のＬＶ上面であるが，南東側ではＬＶが削平を受けＬVIまで露呈していたことや調査区外の西側へ更に延伸するため，遺構全体の正確な規模・形状等は不明である。直接的な重複関係はないが，54・55号溝跡が並列して存在し，南側には８・10～12号建物跡や土坑など遺構群が近接している。遺構内堆積土は大きく５層に分層される。いずれも黒褐色系の粘質土であるが，上層のℓ１・２にはＬＶ・VIブロックが多く混入し，下層には炭化物や灰白砂が多く含



53号溝跡内堆積土（Ａ－Ａ′～Ｃ－Ｃ′）

1　10ＹＲ2/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土塊・黒色粘質土・灰色砂・ＮＰを多量に含む）

2　10ＹＲ3/2　暗褐色粘質土
（灰色砂を含み，ＮＰ・黄褐色土塊を含む）

3　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（灰色砂を極少量含む）

4　10ＹＲ2/2　黒褐色粘質土
（灰色砂を極少量含む）

5　10ＹＲ2/2　黒褐色粘質土

54号溝跡内堆積土（Ａ－Ａ′～Ｃ－Ｃ′）

1　10ＹＲ3/2　黒褐色粘質土
（酸化鉄を多量含み，灰色砂を極少量含む）

2　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（酸化鉄を極少量含む）

3　10ＹＲ3/2　黒褐色粘質土
（酸化鉄を多量含み，灰色砂を極少量含む）

4　10ＹＲ4/1　褐灰色粘質土
（灰色砂を多量含み，黄褐色粘土塊を含む）

5　10ＹＲ3/2　黒褐色粘質土
（酸化鉄・灰色砂を極少量含む）

6　10ＹＲ2/2　黒褐色粘質土
（酸化鉄極少量含み，黄褐色粘土塊を含む）

図17　53・54号溝跡

まれる。下層のℓ３～５は壁側からのレンズ状堆積が認められ，機能時に近い時期の自然流入土と判断されるが，上層のℓ１・２は人為的埋土と考えられる。北側に並列する54号溝跡の構築時排土に起因する可能性が高い。

調査区内で検出できた規模は東西約30m，南北約４mを測り，Ｌ字状の平面形を呈する。溝幅は西側調査区境（Ａ－Ａ′）の開口部約1.9m，底面幅0.7m，中央付近（Ｂ－Ｂ′）の開口部約1.4m，底面幅0.65m，東側（Ｃ－Ｃ′）の開口部約1.6m，底面幅1.2mを測る。東側ほど底面幅が広く，段差がある。周壁は35°～40°前後の角度で緩やかに立ち上がる。断面形は鍋底状を呈する。底面標高は西側が若干低く，東側から西へ向かって緩やかに傾斜している。検出面からの深さは，西側調査区境が38㎝，中央付近が約30㎝，東側が25㎝前後を測り，高低差は15㎝程である。底面は部分的に片側が窪んでおり，溝幅内での数度の流水経路の変化が窺える。溝跡底面及び周囲からピット等は検出されなかった。

遺物は土師器・かわらけ・須恵器・陶磁器類など計11点が出土した。このうち，比較的遺存状態が良いかわらけ１点，須恵器２点，中世陶器１点，石器１点について図19下に掲載した。１はℓ３から出土したロクロ成形による底部回転糸切りのかわらけ皿あるいは杯の底部資料と思われる。２・３は須恵器甕の破片資料で，２が頸部片，３は甕の底部資料である。２の外面にはタタキ痕，内面に指頭状のナデ調整が施されている。４は中世陶器の胴部片で，器厚が1.9㎝と厚く，大甕と思われる。５は基部から刃部にかけて約1/2を欠損する磨製石斧である。形状は長方形，横断面形は楕円形を呈する。器体には敲打による加工調整痕が認められ，両刃は比較的丁寧に研磨されている。

本溝跡は全体の規模・形状等は不明であるが，緩やかに蛇行しながら東側でＬ字状に屈曲する。性格的には南側に隣接する８・10～12号建物跡と軸線がほぼ一致する配置構成等から，これらの屋敷地等を区画する堀跡と判断される。また，直接的な重複関係はないが埋土状況等から，並列する54号溝跡の構築により，本遺構が廃絶されたものと考えられる。所属時期については，本遺構と明確に伴出する遺物がなく判断し得ないが，建物跡群と同様の中世～近世頃の所産と考えている。

54号溝跡　ＳＤ54（図17，写真14）

本遺構は塩川町２次調査時の第17号溝跡に相当する。調査区中央付近のＡＤ～Ｂ－58・59グリッドに位置し，周辺は標高178.20m程の平坦な地形である。検出面は南東側でＬⅤが削平を受けＬⅥまで露呈しているが，西側ではＬⅠ直下のＬⅤ上面である。調査区外の西側へ更に延伸することや南側へ屈曲する部分が削平を受けているため，遺構全体の正確な規模・形状等は不明である。重複関係はないが，53・55号溝跡が並列して存在し，南側には８・10～12号建物跡や土坑など遺構群が近接している。堆積土は６層に分層される。いずれも黒褐色系の粘質土で，炭化物や灰白砂等を含む自然流入土と判断される。

調査区内で検出できた規模は東西約30m，南北約1.5mを測り，Ｌ字状の平面形を呈する。溝幅は西側調査区境（Ａ－Ａ′）の開口部約1.8m，底面幅0.8m，中央付近（Ｂ－Ｂ′）の開口部約1.75m，

底面幅0.8m，東側（Ｄ－Ｄ゛）の開口部約1.6m，底面幅0.8mを測る。東西の底面幅はほぼ均一であるが，東側屈曲部付近は比較的狭い。周壁は緩やかに立ち上がり，断面形は鍋底状を呈する。底面標高及び検出面からの深さは東西でほぼ同一であるが，南北へ屈曲する部分は一段高くなる。従って流水等は東西部分（北側）に貯水されるかたちとなる。検出面からの深さは平均して東西側が30㎝，南北屈曲部分で10㎝程を測る。底面は部分的に片側が窪んでおり，溝幅内での数度の流水経路の変化が窺える。溝跡底面及び周辺からはピット等は検出されなかった。

遺物は溝跡内堆積土のℓ１から須恵器片１点が出土しているが，細片で摩滅が著しいため図示できなかった。

本遺構は西側調査区外に延伸するため，全体の規模・形状等は不明であるが，直線的に東側でＬ字状に屈曲する溝跡と考えられる。性格的には南側に隣接する８・10～12号建物跡と軸線がほぼ一致する配置構成等から，これらの屋敷地等を区画する堀跡と判断される。また，直接的な重複関係はないが埋土状況等から判断して，並列する53号溝跡の造り替え（拡張）によるものと考えられる。所属時期については，本遺構と明確に伴出する遺物がなく判断し得ないが，建物跡群と同様の中世～近世頃の所産と考えている。

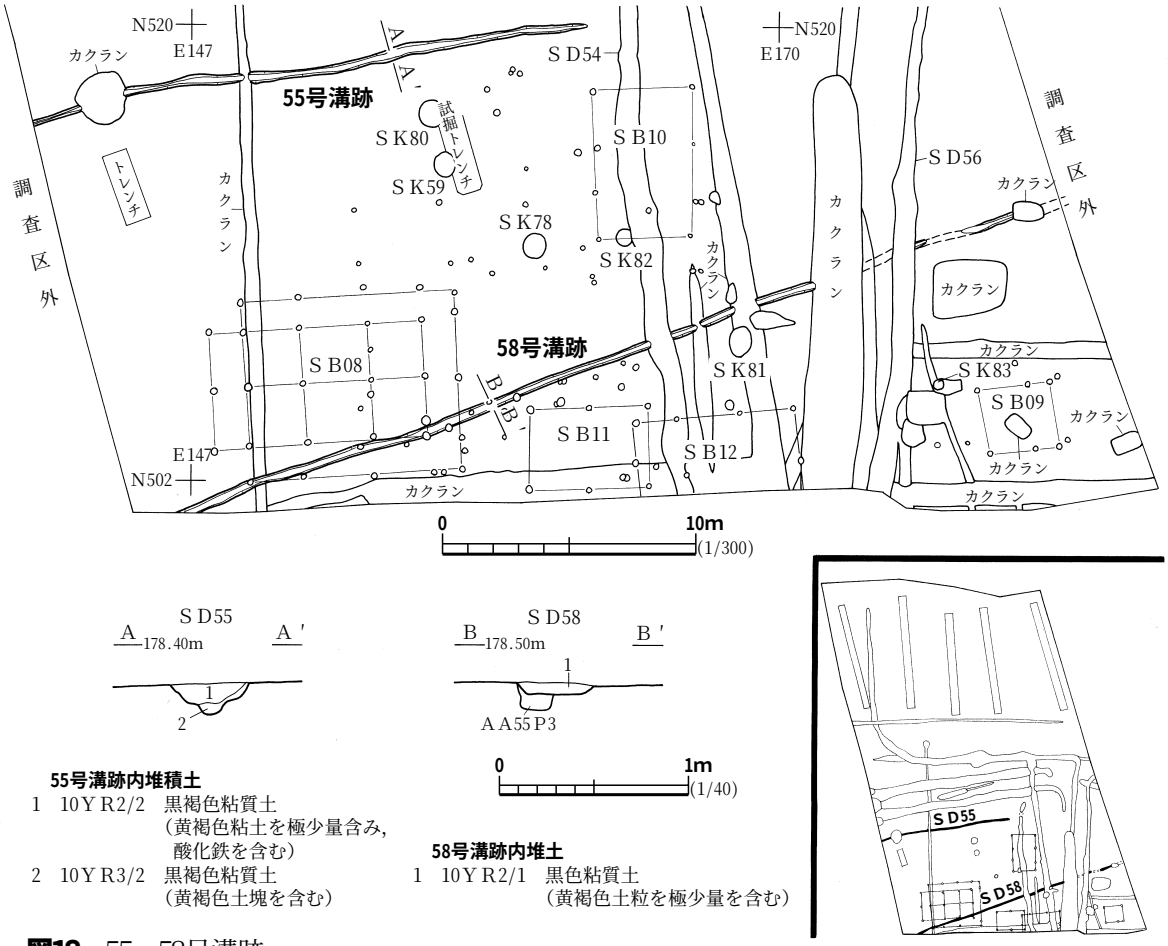
55号溝跡　ＳＤ55（図18，写真15）

本遺構は調査区中央やや西寄りのＡＤ～Ａ－57グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は標高178.20m程の平坦な地形であり，検出面はＬＩ直下のＬＶ上面である。調査区外の西側へ更に延伸するため，遺構全体の正確な規模等は不明である。他遺構との重複関係は認められなかったが，53・54号溝跡が並列して存在しており，南側には８・10～12号建物跡や土坑群が近接している。堆積土は２層に分層される。いずれも黒褐色の粘質土で，炭化物やＬＶブロック等を含む自然流入土と判断される。

調査区内で検出できた規模は東西約23mを測り，緩やかに蛇行する。溝幅は開口部で25～40㎝前後を測り，底面幅は14～20㎝程である。周壁は緩やかに立ち上がり，断面形は中央がやや窪む形状となる。底面は部分的に中央付近が窪んでいるが，東西での標高差は殆どなく，検出面からの深さは15㎝前後でほぼ均一である。溝跡底面及び周辺からはピット等は検出されなかった。

遺物は溝跡内堆積土のℓ１から土器片３点が出土している。いずれも小片で摩滅が著しいため図示できなかった。

本遺構は西側調査区外まで延伸するため，全体の規模等は不明であるが，東西方向に23m程が検出された。性格的には東西底面の高低差が殆どなく幅が狭いことや中央付近が窪むことから，排水・区画溝的な機能とは考え難い。53・54号溝跡や８・10～12号建物跡との配置関係や軸線等を考慮すれば，これらの屋敷跡を構成する一連の施設と判断され，簡易的な板塀・垣根等の可能性が想定される。所属時期については，本遺構と明確に伴出する遺物がなく判断し得ないが，建物跡群と同様の中世～近世頃の所産と考えている。



55号溝跡内堆積土
1　10ＹＲ2/2　黒褐色粘質土
（黄褐色粘土を極少量含み，酸化鉄を含む）
2　10ＹＲ3/2　黒褐色粘質土
（黄褐色土塊を含む）

58号溝跡内堆土
1　10ＹＲ2/1　黒色粘質土
（黄褐色土粒を極少量を含む）

図18　55・58号溝跡

56号溝跡　ＳＤ56（図19，写真15）

本遺構は調査区南東寄りのＣ・Ｄ－54～59グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は標高178.20m程の平坦な地形であり，検出面はＬＩｂ直下のＬＶ上面である。調査区外の東側及び南側へ延伸するため，遺構全体の規模・形状等は不明である。重複関係は58号溝跡より新しく，９号建物跡や83号土坑が近接している。堆積土は２層に分層される。いずれも黒褐色の粘質土で，炭化物やＬＶブロック等を含む自然流入土と判断される。

調査区内で検出できた規模は南北約26mを測り，北端が屈曲してＬ字を呈する。溝幅は開口部で65～84cm前後を測り，底面幅は40～58cm程である。周壁は遺存状態が良い部分では比較的急に立ち上がり，断面形は鍋底状を呈する。底面は部分的に凹凸はあるがほぼ平坦である。南北の標高差は北側ほど低く，緩やかに傾斜している。検出面からの深さは10～20cm前後を測る。溝跡底面及び周辺からはピット等は検出されなかった。

遺物は土器片２点が出土しており，うち遺存状態の良いかわらけ１点を掲載した。図19－６はロクロ成形による底部回転糸切りのかわらけ小皿である。内外面調整は摩滅により判然としないが，内面底部中央には指頭状のナデ調整，外面体部下半には手持ちヘラケズリが施されている。底部は

厚手で，胎土には粗砂粒を含む。底径／口径比は0.52，器高／口径比が0.26である。

本遺構は東及び南側が調査区外まで延伸するため，全体の規模等は不明である。遺構の所属時期・性格等については，排水・区画溝的な機能が推察され，中世以降の所産の可能性が高い。

57号溝跡　ＳＤ57（図19，写真15）

本遺構は調査区南中央寄りのＡ・Ｂ－54～58グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は標高178.20m程の平坦な地形であり，検出面はＬＩ直下のＬＶ上面である。調査区外の南側へ更に延伸するため，遺構全体の正確な規模・形状等は不明である。82号土坑・58号溝跡と重複関係にあり，いずれの遺構よりも新しい。また，10・12号建物跡と同一地点での新旧関係が認められる。堆積土は２層に分層される。下層のℓ２は炭化物を含む灰褐色砂層で，流水による自然堆積と判断される。上層に厚く堆積する黒色粘質土のℓ１は人為堆積の様相を呈する。

調査区内で検出できた規模は南北約22m，溝幅60～94㎝を測る。周壁は緩やかに立ち上がり，断面形は浅い皿状を呈する。底面標高及び検出面からの深さは南側ほどやや低くなる。南北端での高底差は15㎝前後である。南側には幅約10㎝，底面からの高さ10㎝程の簡易な土橋状の堰が造られており，構造的に一定量の吸水と水量調整が可能となっている。検出面からの深さは平均して14㎝前後を測り，底面は中央付近が窪んでいるがほぼ平坦である。

遺物はℓ１から須恵器片１点，土製品１点が出土している。図19－７は須恵器甕の胴部片で外面タタキ痕，内面には煤状の付着物が認められる。８は用途不明の土製品である。径3.2㎝の棒状を呈し，器表面には縦位方向へのヘラケズリ調整と粘土剥落痕が観察される。

本遺構は南側が調査区外まで延伸するため，全体の規模は不明である。構造的には南側への吸排水機能が認められ，南側に隣接する宅地を囲む堀へと繋がる。所属時期については明確には判断し得ないが，重複関係や検出面，及び土層の堆積状況等から，近世以降の所産の可能性が高い。

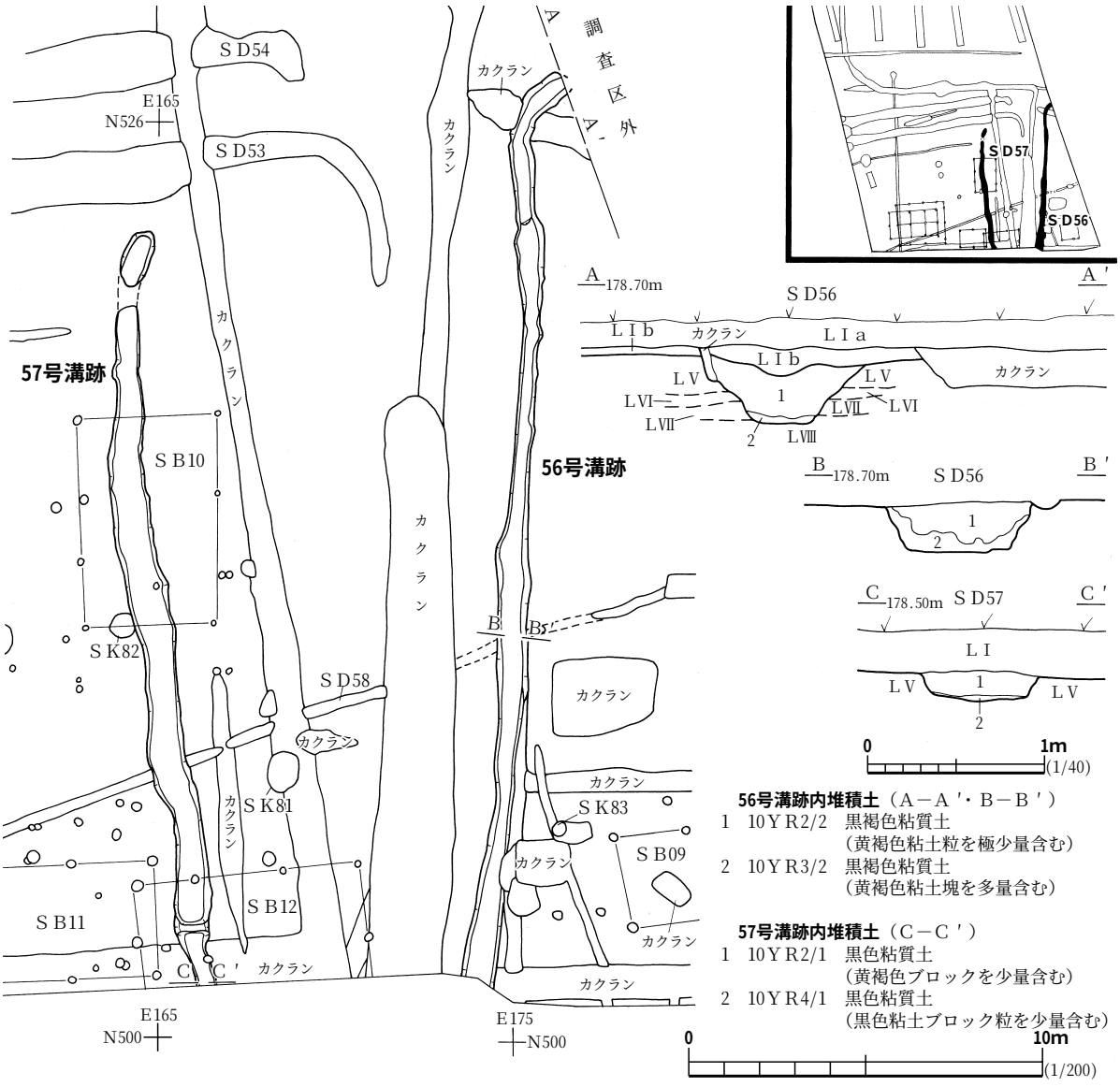
58号溝跡　ＳＤ58（図18，写真15）

本遺構は調査区南側のＡＣ～Ｄ－54～56グリッドに位置し，周辺は標高178.20m程の平坦な地形である。検出面はＬＩ直下のＬＶ上面である。調査区外南西側へ延伸するため，遺構全体の正確な規模・形状等は不明である。８号建物跡Ｐ３・４・21や56・57号溝跡と重複関係にあり，56・57号溝跡より古く，８号建物跡よりも新しい。堆積土は黒色粘質土の単一層で，人為堆積の様相を呈する。

調査区内で検出できた規模は東西約35m，溝幅30～40㎝を測る。周壁は緩やかに立ち上がり，断面形は浅い皿状を呈する。底面標高及び検出面からの深さは約７㎝を測り，ほぼ均一である。東西端での高底差は最大で５㎝前後である。底面は中央付近が窪んでいるがほぼ平坦である。

遺物は溝跡内堆積土のℓ１から土器片11点が出土しているが，いずれも小片で摩滅が著しいため図示できなかった。

本遺構の明確な所属時期及び性格等は不明である。（井）



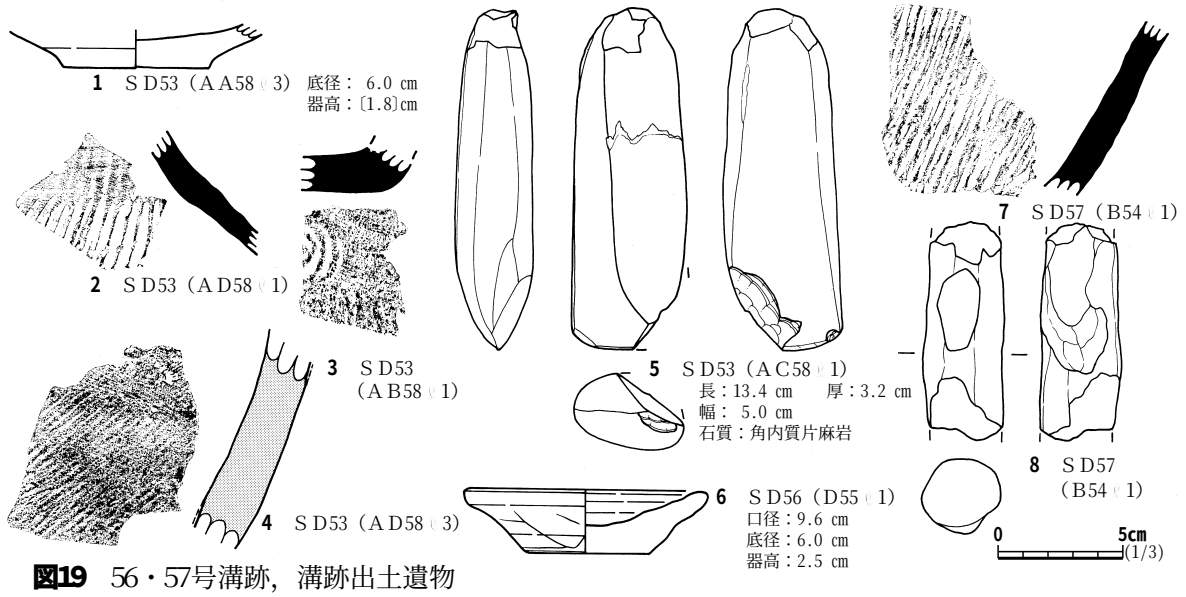


図19　56・57号溝跡，溝跡出土遺物

第５節　その他の遺構と遺物

今回の調査では前節までの遺構の他に，建物跡や柱列跡と認識できなかったピット群がある。ここでは，これらの各グリッドから検出されたピット群と遺構外出土遺物について報告する。

１．ピット群（図20～22）

ピット群は，調査区南側の遺構が集中する標高178.20m程の平坦地から多く確認されている。東西に走る55号溝跡を境とし，これより北側では検出されていない。屋敷跡の区画溝と考えられる53・54号溝跡東側推定地のＣグリッド範囲までは計51個，Ｄ・Ｅグリッドでは僅か７個の検出である。検出面はいずれもＬＩ直下のＬＶ上面である。重複関係はＡＡ54Ｐ２・４・5，ＡＡ55Ｐ３・4，ＡＢ54Ｐ２が58号溝跡と，A56Ｐ６，Ｂ54Ｐ２が57号溝跡と新旧関係にあり，いずれもピットの方が古い。また，ＡＡ57Ｐ１＞Ｐ２，A54Ｐ１＞Ｐ３，A55Ｐ７＞Ｐ８，A55Ｐ９＞Ｐ10でピット同士の重複が認められる。ピット内堆積土は柱痕と掘形埋土に大別され，掘形埋土は褐色粘質土を基調とするものが多い。

平面形は円形または楕円形を呈し，規模は径14～38㎝前後の範疇に収まり，20㎝前後のものが多い。また，柱痕が認められた柱穴の平面規模は相対的に大きい傾向がある。検出面からの深さは，概ね10㎝～25㎝前後を測るが，ＡＡ54Ｐ２・Ｐ７やＡＡ56Ｐ４，A55Ｐ３，D54Ｐ１・Ｐ２，D55Ｐ１，Ｅ54Ｐ１のように30㎝以上と深いものもある。柱穴の規模・深浅についての位置的な関連性は看取できない。柱痕は径12㎝程のものが多く，ＡＢ56Ｐ２，ＡＡ54Ｐ２，ＡＡ56Ｐ４，Ｂ56Ｐ１，D54Ｐ１，D55Ｐ１，Ｅ54Ｐ１から確認できた。また，Ｂ55Ｐ１から石器類が出土している。

遺物はＢ55Ｐ１から石器類１点のみが出土している。図22－１は径８㎝程の楕円形を呈する擦石で，器表面には擦痕や被熱を受けた痕跡が認められる。

今回の調査で検出されたピット群の中には，建物跡や柵列跡等を構成するものもあると考えられるが，配列等を明らかにすることはできなかった。ピットの明確な所属時期を判断することはできないが，２小期以上にわたる変遷が想定され，建物群と同様に中世～近世頃の所産と考えている。

２．遺構外出土遺物（図22，写真16）

今回の３次調査では遺構外から総数37点の遺物が出土した。内訳は縄文土器が１点，土師器，かわらけ，須恵器，陶磁器類が各12点である。これらのうち，遺存状態の比較的良い５点について図22に掲載した。遺物はＬＩ及び撹乱からの出土であり，相対的に調査区南半からの出土量が多い。

須恵器　２～５は須恵器の破片資料で２・３が甕の胴部片，４・５は瓶類と思われる。２・３の外面には平行タタキメ，３の内面には押圧具によるアテ具痕が認められる。４の胎土・焼成は共に良好である。５は胴部下半から底部にかけての資料で，器形的には長頸瓶であろうか。いずれの資料も概ね平安時代，９世紀(後半)頃に位置付けられる資料であろう。

砥　石　６は砥石の欠損品である。縁辺部には剥離調整が加えられ，比較的丁寧な面取りと研磨痕が認められる。両側面が頻度の使用により，撥状の器形を呈する。石質は流紋岩である。（井）

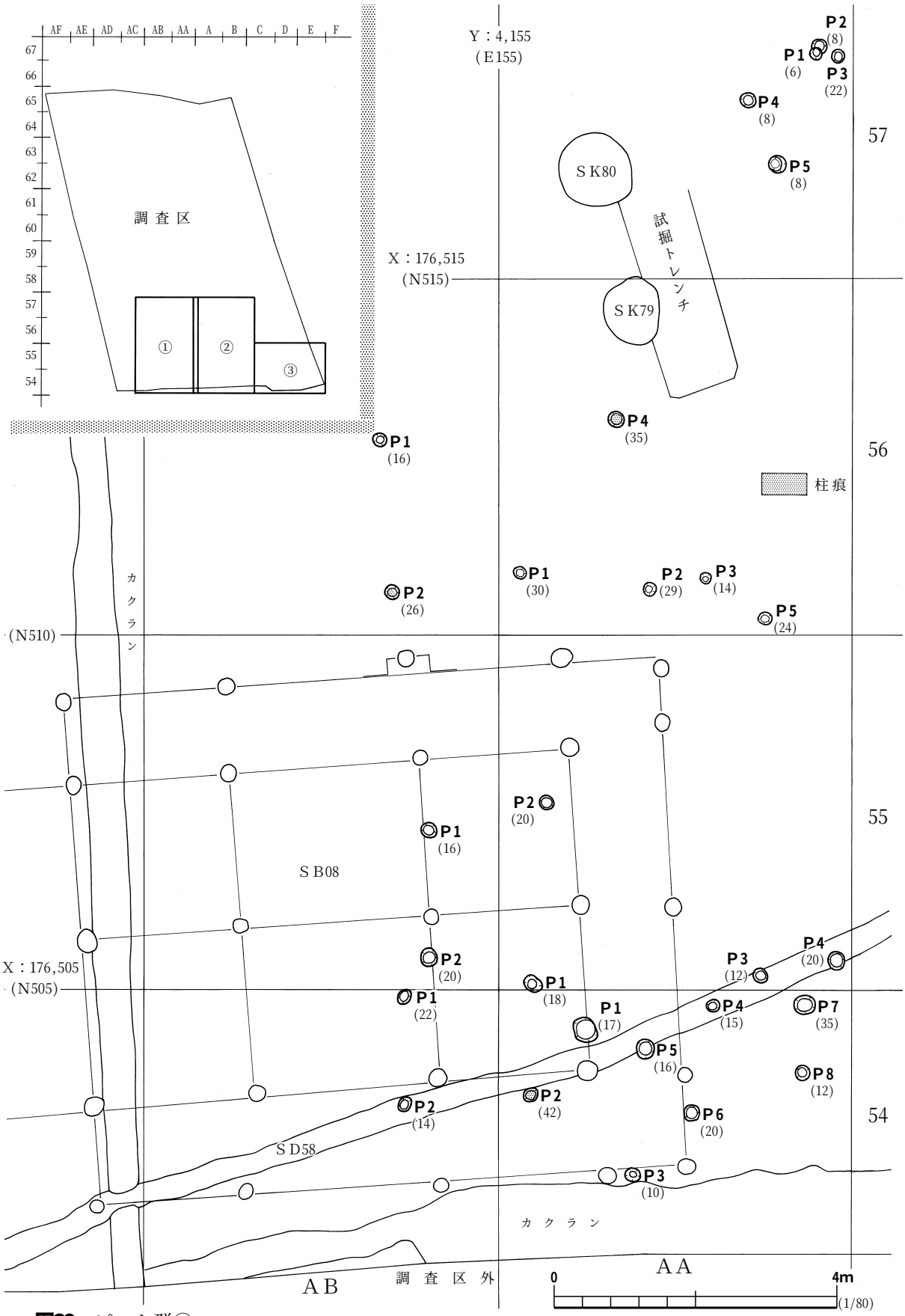

AF AE AD AC AB AA A B C D E F
67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54
調 査 区
①
②
③
Y：4,155
(E155)
X：176,515
(N515)
X：176,505
(N505)
(N510)
SK80
SK79
試掘トレンチ
P1 (6)
P2 (8)
P3 (22)
P4 (8)
P5 (8)
P4 (35)
P1 (16)
柱痕
P1 (30)
P2 (29)
P3 (14)
P5 (24)
P2 (26)
カクラン
P2 (20)
P1 (16)
SB08
P2 (20)
P1 (22)
P1 (18)
P1 (17)
P3 (12)
P4 (20)
P4 (15)
P7 (35)
P5 (16)
P8 (12)
P2 (14)
P2 (42)
P6 (20)
SD58
P3 (10)
カクラン
AB
調査区外
AA
57
56
55
54
0
4m
(1/80)

図20　ピット群①

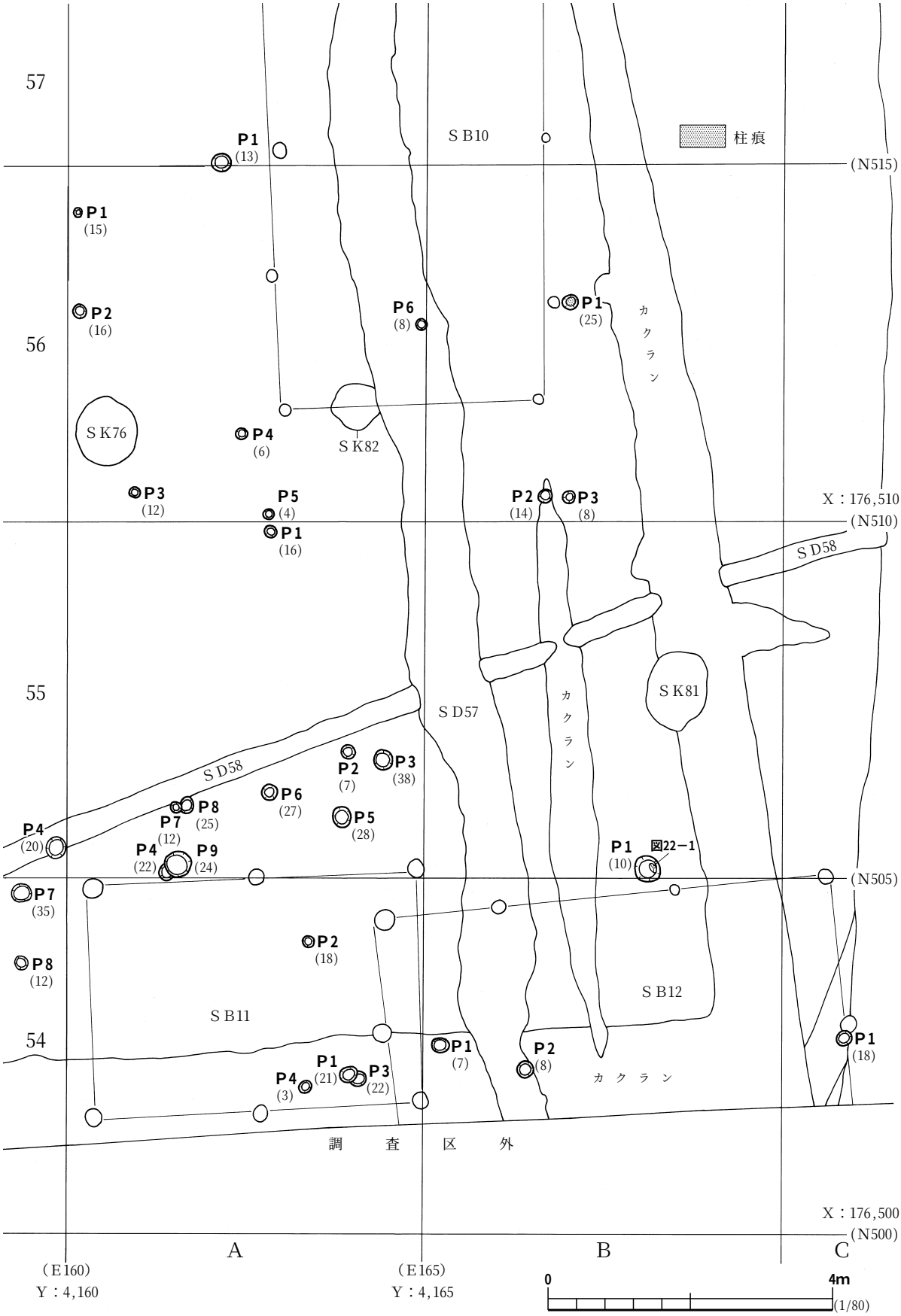

57
56
55
54
P1 (13)
S B10
柱痕
(N515)
P1 (15)
P2 (16)
P6 (8)
P1 (25)
カクラン
S K76
P4 (6)
S K82
P3 (12)
P5 (4)
P1 (16)
P2 (14)
P3 (8)
X：176,510
(N510)
S D58
S K81
S D57
カクラン
S D58
P2 (7)
P3 (38)
P6 (27)
P8 (25)
P7 (12)
P5 (28)
P4 (20)
P4 (22)
P9 (24)
P1 (10)
図22−1
(N505)
P7 (35)
P2 (18)
P8 (12)
S B12
S B11
P1 (7)
P2 (8)
P1 (18)
P1 (21)
P3 (22)
P4 (3)
カクラン
調　査　区　外
X：176,500
(N500)
A
B
C
(E160)
Y：4,160
(E165)
Y：4,165
0
4m
(1/80)

図21　ピット群②

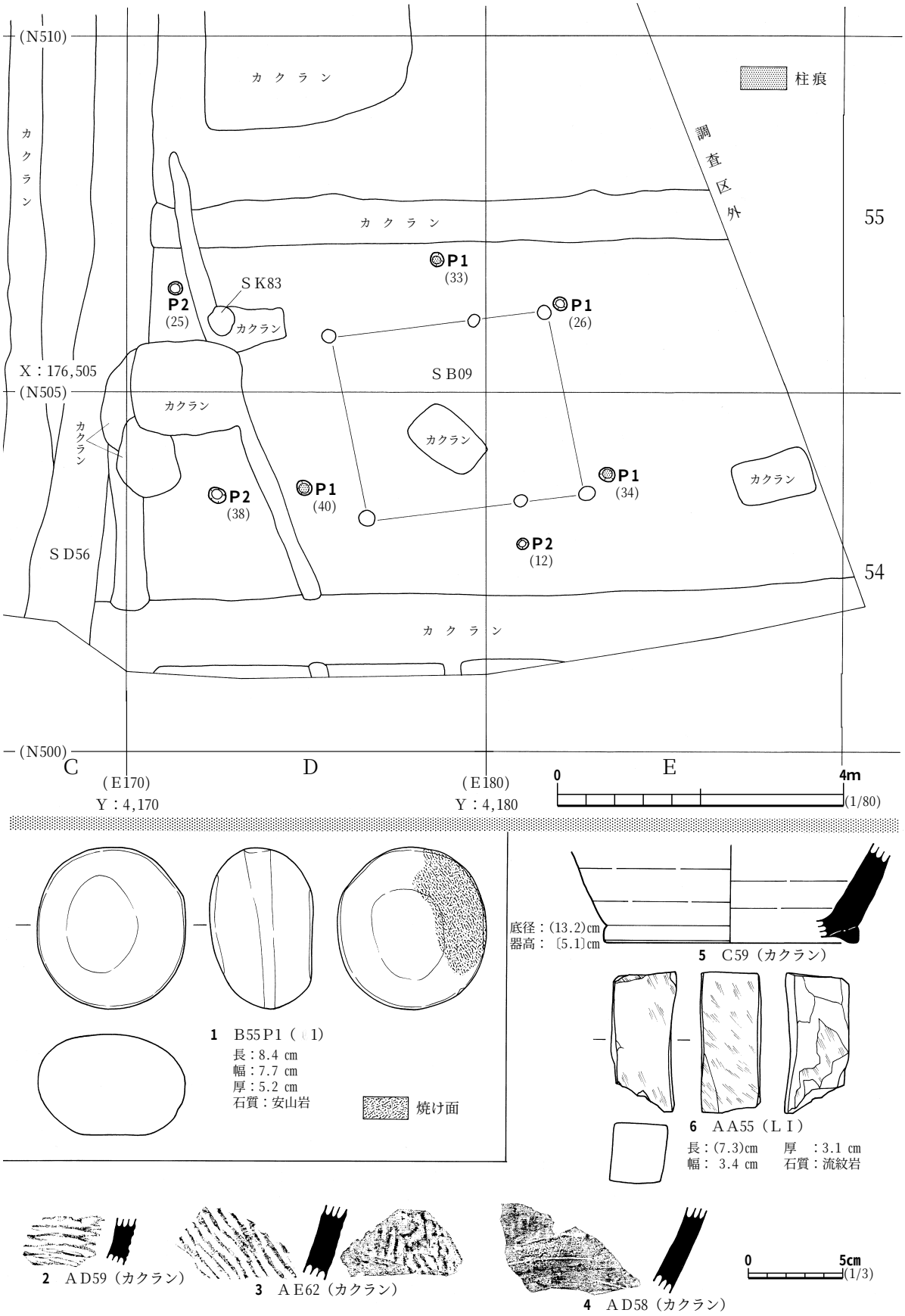


図22　ピット群③，ピット・遺構外出土遺物

第３章　ま　と　め

今回の調査で検出された遺構と遺物は，前章で述べたとおり平安時代から中近世を主体としている。遺物は１次・２次調査とは異なり，12世紀～13世紀の陶磁器類は殆どなく，在地系かわらけの他，土師器・須恵器類が極僅か出土しただけである。遺構群の構成は建物跡や土坑を主体に，これらを区画する堀跡などからなる。従って，ここでは遺構群を中心にまとめて行くこととする。

第１節　遺構について

今回の３次調査で検出された遺構は第２章で述べたとおり，掘立柱建物跡５棟，土坑６基，溝跡６条，それにピット群等である。前回までの１次・２次調査分と塩川町１次～３次調査で検出された遺構数を合わせると，竪穴状遺構３軒，掘立柱建物跡14棟，柱列跡２基，土坑112基，溝跡96条，性格不明遺構２基，ピット多数となる。ただ，溝跡については前述したように，連続する同一遺構や自然河川等も存在するため，人為的な遺構と認識できるものは40条程と考えられる。なお，今回の調査区で検出された遺構群と，南側日橋川沿いの自然堤防上に立地する遺構群（１次・２次調査区）とでは，遺構群の配置構成や性格，所属時期等で隔たりがある。そのため，総合的な見解は今後の調査成果（西側部分：４次調査）を踏まえた上で行うこととし，遺跡北端に位置する今年度検出の遺構群についてまとめておく。

１．遺構群の構成

今回の調査で検出された遺構群は，標高178.20m程の平坦地に構築されており，遺跡全体から見れば北側端に位置する。調査区内ではほぼ中央を東西に走る53・54号溝跡を境として，南半に遺構密度が高く，北半では遺構・遺物が殆ど検出されていない。南側調査区境からは整った配置構成の建物群や土坑等が検出されているが，遺構の重複関係や伴出遺物が殆どなく，直接的な関連性を把握できたものはない。また，溝跡は調査区外へ延伸するものが多いため，厳密な形状や規模，配置構成についての全体像は不明な部分も残るが，館跡・屋敷跡を構成する遺構群と考え，以下ではその性格等について推測しておく。

（1）溝　跡　今回の調査で溝跡は６条確認できた。前章で述べた通り，この中で館跡・屋敷跡の区画溝・堀跡として機能していたものに53・54号溝跡が挙げられる。いずれも断面形が逆台形の「箱掘り」を呈し，幅1.5～1.9m前後，検出面からの深さ30㎝前後を測る。調査区内では東西辺と南北辺の一部が確認され，方形状に囲郭するものと判断できる。検出できた範囲は東西辺約30m，南北1.5m程で，概ね旧地割（明治23年：図24）に合致する。また，53号溝跡は人為的に埋め戻された状況が観察され，54号溝跡構築時の埋土と判断される。なお，この北辺を拡張する際，西側へ流

れる構造（ＳＤ53）から底面標高をほぼ同じ高さで構築（ＳＤ54）し，水利施設の機能を兼ねた構造に改変したと判断される。この他，この堀跡と並列して存在する55号溝跡は，構造上の特徴から簡易的な板塀・垣根と推測できる。堀底及びその周囲からは，柱穴や橋（出入口），土塁等の関連施設の痕跡は認められておらず，他の溝跡については館跡との関連性は判然としない。

（２）掘立柱建物跡　掘立柱建物跡は調査区南境付近に５棟と少ないながら認められている。標高178.20m程の平坦地に比較的整った配置構成が認められる。建物跡を構成する柱穴は，径25㎝前後の円形のものが多く，柱材や根石等は確認できなかった。建物跡の中では，南北２間，東西３間の身舎に四面庇が付く８号建物跡が他と比較して規模や柱配置の高い規格性など，構造的に内容が際立っている。庇（縁）を含めた全体の平面形が方形に近い形状を示し，複雑な柱穴配置や間取りの多様性が窺われる。位置的にも中心的な施設であったと考えられ，「主屋」と推察される。

主屋と考えた８号建物跡と隣接して，東側に11・12号建物跡が位置する。両者は同一地点での新旧関係にある側柱建物跡で，12号建物跡は８号建物跡と同様に南北軸が３°程西に傾く。また，規模的には11号建物跡は南北１間，東西２間のやや小型，12号建物跡は調査区外まで延びるため全体の規模は不明であるが，東西３間，南北２間以上の中型の建物跡と判断される。８号建物跡と比して規模・規格性に劣り，主屋に対する「付属屋」的な性格と判断したい。

10号建物跡は，８・11・12号建物跡の北側に位置し，これらの建物と直交するように配置された中型の建物跡である。南北１間，東西３間の側柱建物跡で，南北主軸は若干西側に傾く。西側に井戸跡・ゴミ穴と考えられる78～80号土坑が存在し，配置的に「厨」と推測される。

この他，堀跡外に位置する９号建物跡は，規模・規格性に乏しい小型の建物跡であり，住居とは考え難い。堀跡内側に対応する機能の分散化と考えれば，塩川町３次調査１号建物跡（１間×２間）も含め「倉庫」や「馬小屋」と考えておきたい。

（３）土　坑　土坑は６基確認されている。いずれも年代指標の根拠となる遺物がなく，所属時期については判然としないが，屋敷堀跡内として78～82号土坑，堀跡外に83号土坑が所在する。このうち，78～80号土坑は規模・形態・土層の堆積状況が酷似し，「主屋」・「付属屋」・「厨」と考えた建物に囲まれて配置されている。いずれも円形を呈し，開口部径１m前後，検出面からの深さ１m程を測る。堆積土は機能時の堆積土上位に人為的埋め戻しが施されており，79・80号土坑は配置構成からも強い看取が窺われる。性格的には「井戸」や「ゴミ穴」，「トイレ」，「貯蔵穴」等が推察されるが，水抜けが悪い点や付随するピット等が認められないこと，土壌分析の結果（付章１）等を勘案すると，前者の可能性が高いと考えられる。

２．遺構群の変遷と性格（図23）

検出された遺構群の大半は，直接的な切り合い関係はなく，いずれも明確に先後関係を認識できたものではない。但し，建物跡の配置構成や同一地点に於ける新旧関係（11・12号建物跡），53・54号溝跡の造り替えを考慮すると，少なくとも２小期に分かれるものと判断できる。従って，ここでは間接的ではあるが，これらの遺構群を基に変遷を推定してみる。

先述べたとおり，主屋である８号建物跡の付属屋的な性格が想定される11号建物跡と12号建物跡は，同一地点に於ける新旧関係が認められる。また，それに伴う区画溝の53号溝跡から54号溝跡への造り替え（人為的埋め戻し）と考えれば，①12号建物跡及び９号建物跡は８号建物跡と同様に南北軸が若干西側に傾いていること，②54号溝跡は北側に拡張されるが，東側南北堀の延長部分が内側に入り，12号建物跡と接する配置関係になることなどが挙げられる。

この①・②の理解を基に堀跡と付属屋の同時並存を勘案すると，以下の変遷観が考えられる。

	区画溝（堀）		付属屋
Ⅰ　期	ＳＤ53	＝	ＳＢ12
	↓		↓
Ⅱ　期	ＳＤ54	＝	ＳＢ11

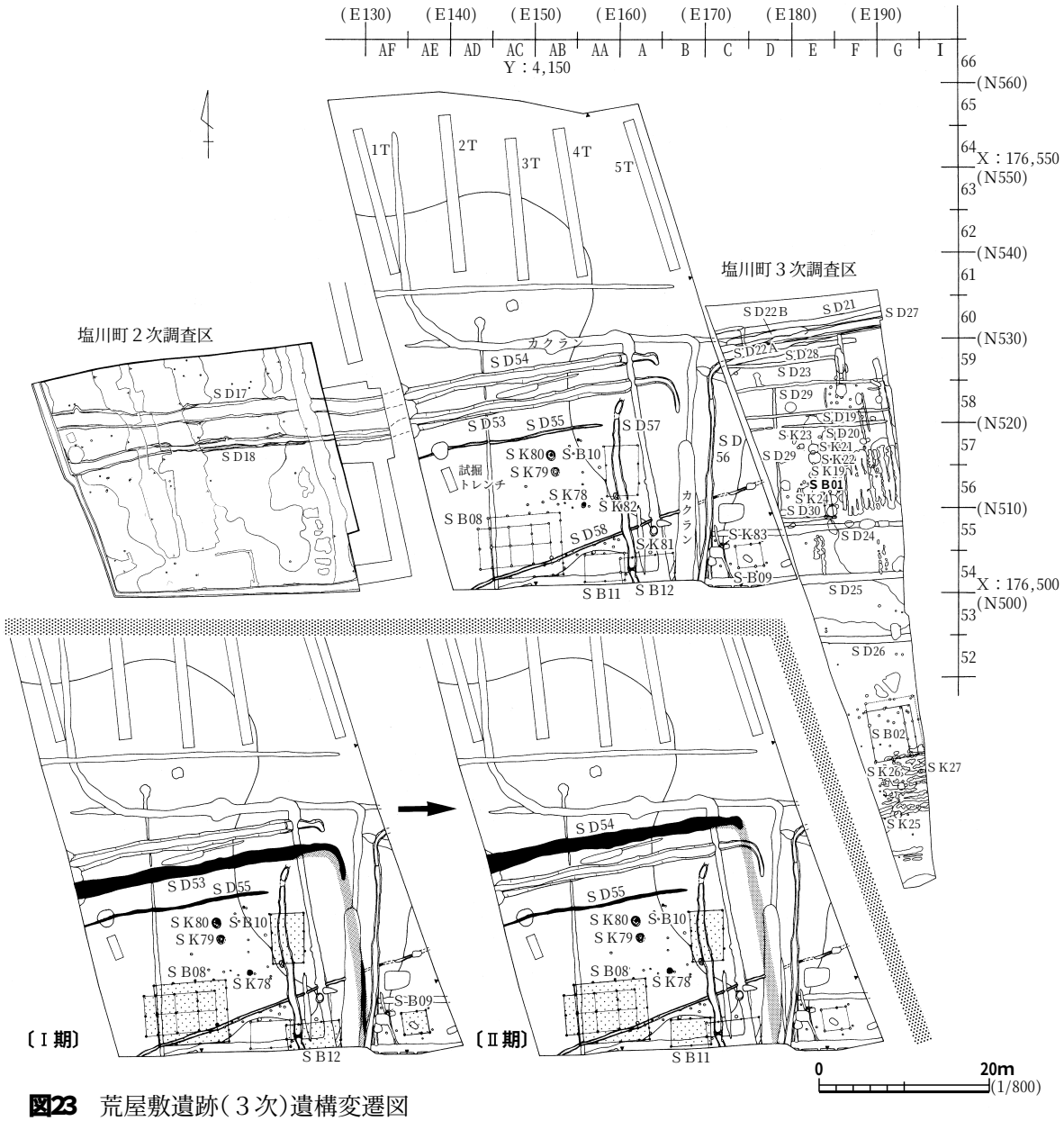


図23　荒屋敷遺跡（３次）遺構変遷図

上記以外の主屋（ＳＢ８）・厨（ＳB10）については，変遷を捉えることはできない。また，この建物跡群と簡易的な垣根・板塀（ＳD55）の空間には，該期の遺構として２分できる井戸跡あるいはゴミ穴（ＳK78～80）が存在したと認識しているが，明確な時期区分については判断し得ない。

以上の点を踏まえ，遺構群を連続する２小期として理解した場合，図23の変遷となる。但し，変遷を捉えられないピット群の散布状況を見る限り，堀跡外の北側への建物群の広がりは認められず，調査区南側へ展開する可能性は充分に考慮される。掲載した遺構の変遷からは，付属屋は規格性の乏しい小型の建物跡となり，堀跡も東側（南北辺）が内側に縮小化し，全体的に細長い形状となる。この際，西側への排水機能（ＳD53）から拡張した北側東西辺の水利用（貯水）が窺われ（ＳD54），堀跡外には田畑が存在し，堀跡には簡単な板橋が設置されていた可能性が示唆される。さらに，主屋においては南半の「ハレの場」（表向き）に対し，北半は「生活の場」（内向き）になるという見解もあり，客は庭を望むように南を向いて正対するとされる（平井：1998）。このことから，道路に面した屋敷跡の出入口は調査区南東付近，庭は南側に存在するものと推察され，今回の調査区は所謂主屋を含む北半の「生活の場」（内向き）部分と理解される。

屋敷跡としての存続期間は，一部の建物跡（付属屋）のみの１度限りの建て替えを考慮すると，短期間の存続と判断され，二代程度と推察される。

３．歴史にみる荒屋敷（図24）

（１）規模・形状の復元　今回の調査で屋敷跡として検出できた範囲は，北東隅部分と考えられる。方形状の堀跡は，西側及び南側へさらに延伸すると判断されるが，その規模・形状等については現況では判断し難い。そのため，著しい改変が行われた基盤整備・ほ場整備以前の地籍図を参考に本遺跡を概観してみる。図24には，明治23年作成の遠田村荒屋敷周辺と路線を含む調査区範囲の概略図(左下)を掲載した。これを見ると，荒屋敷周囲には篭田・舘ノ越・前畑・下前田等の旧地割りが存在し，現行政区としての荒屋敷の範囲とは異なっていることが分かる。荒屋敷は舘ノ越に所在する周知の下遠田館跡に接して東側に位置し，不自然な方形状の溝・用水路に囲まれた範囲として地割りされている。南北約100m（約１町），東西内側約60m（約34間），東西外側約85m（約47間）の規模を持ち，館跡・屋敷跡として大凡の範囲をそのまま掲示しているものと推察される。ただ，今回の調査区西側部分に連続する塩川町２次調査区（図23）では，下遠田館跡北東隅に連続するかたちで堀跡（第17・18号溝跡）が検出されているため（和田：2002），本来の西側形状はさらに延びる可能性が高い。調査で確認できた北側東西辺は約72m（40間）となり，少なくともそれ以上の規模と判断される。現在，当時と同様に荒屋敷の中央と舘ノ越下遠田館跡の南側を県道会津坂下・塩川線が改変し横走するが，この区域に先後する二つの館跡・屋敷跡が存在したものと推察される。

（２）歴史的景観　ここで，発掘調査で得られた年代的指標は皆無であるため，文献史料等から歴史的景観を概観してみたい。19世紀初頭に作成された『新編会津風土記巻之五十四』によれば，遠田村は寛永19（1642）年に上遠田と下遠田に分村されたとし，館跡四の記載が見られる。上遠田に一つ，荒屋敷遺跡が所在する下遠田には三つ存在したことが知られる。

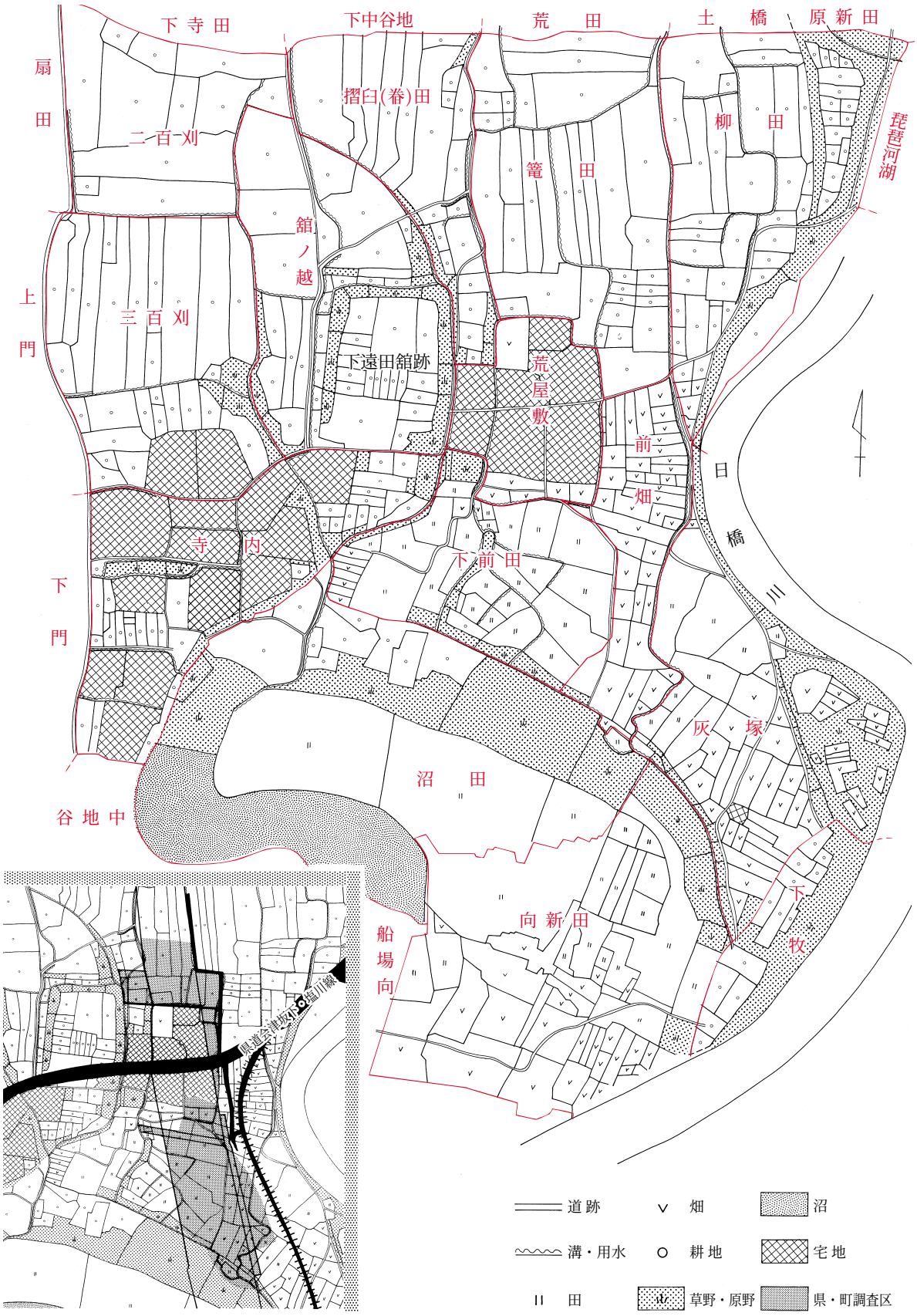


図24　荒屋敷周辺の地籍図（明治23年：下遠田）

「一ハ下遠田村ノ北ニアリ、東西四十二間･南北五十二間、三橋備前定重二男刑部重治住セリト云、今ハ畠トナルトモ土居ノ形存ス、一ハ下遠田ニアリ、一ハ端村新屋敷ニアリ、何レノ頃何人ノ住セシニカ、共ニ今ハ土居隍ノ形モサタカナラス」

この項にある館跡の内容は，現在土塁の存在は認められないものの，舘ノ越下遠田館跡及び本屋敷地推定範囲の規模に概ね合致する。周知の遺跡である下遠田館跡については，「福島県の中世城館跡」の中で，東西約75m，南北約95mの土塁が巡る方形館とし，居住人物は三橋備前定重と二男の刑部重治と推察している（佐々木：1988）。本例が下遠田に所在する二つの館跡の一つ（新屋敷所在館跡を除く）と仮定するならば，年代的にも下遠田館跡と大きく先後しない時期と考えられる。

居住者として推察される三橋氏の出自については，源平合戦の後，源頼朝に会津の地を拝領された佐原十郎左衛門尉義連（三浦大介義明の子）の二代盛連の嫡子（六人）のうち，五男盛時（加納氏）をその祖に持つ系譜と言われている（長男経連：猪苗代氏，二男広盛：北田氏，三男盛義：藤倉氏，四男光盛：芦名氏，五男盛時：加納氏，六男時連：新宮氏）。「富田家年譜」を基幹とする『会津芦名一族』（林：1979）によれば，宝治合戦（1247年）の功により，盛時は本家三浦介の名を賜る。その子二男頼盛の長男時持が常世氏の祖となり，二男時明の長男太郎義通が三橋氏の初祖とされる。判然としないが，初代三橋氏（義通）の祖父頼盛が『吾妻鑑』で初見されるのは康元元(1256)年とされるため，三橋備前定重と二男刑部重治は14世紀以降の人物と考えられる。

会津地域における14～16世紀は，後に戦国大名化する芦名氏と中小在地領主・土豪との抗争が相次いだ時代である。隣国の白河結城氏・米沢伊達氏等の会津領内への介入や，佐原氏重臣間の対立（芦名氏四天王の対立による盛高・盛滋父子の不和：永正二(1505)年）も加わりながら芦名氏の勢力が拡大する天文（1532～1554）年間頃まで謀反・反乱が繰り広げられる。室町期には『吾妻鑑』において遠田合戦（1413年）や，常世氏を始めとする三橋氏，小荒井氏，西勝氏の文亀二（1502）年の反乱（首謀者常世氏は討たれ，他三氏は追放）等の記載が見られ，会津盆地北東部域（喜多方地域）のこれら小領主らに本居住者も従った可能性がある。

（３）遺跡の年代観　今回の調査では直接的な遺構の重複関係や年代指標の根拠となるものはなく，文献史料や歴史的にみても明確に合致するとは現段階では言い難い。従って，所属時期や居住者等につては判然としないが，前述までの検討を踏まえると，上遠田に所在する麻生館遺跡（横須賀：2002）と近接した時代と考えられる。麻生館遺跡は15世紀末～16世紀代の平地単郭式方形館跡と推察されており，屋敷の規模や内容に類似性が窺える。土塁や堀底施設，柵や門等の付随施設が認められず，防御制が非常に弱い構造であることや，一部の建物のみの建て替えで短期間の存続期間であること等が挙げられる。ただ，建物の構造上の特徴や規格性を勘案した場合，本例がやや後出的な様相を示すため，16世紀代頃として捉えて置きたい。

該期頃，各地の分村と共に在地小領主や土豪が増え，その館・屋敷の存在が小字名・部落名として今に語り継がれている。本遺跡や下遠田館跡，麻生館も当時の在地土豪の館・屋敷の一つとして，遠田の地に存在したのであろう。（井）

第２節　調査の成果

最後に本遺跡における変遷についてまとめておく。荒屋敷遺跡は平成13年度から15年度まで延べ６回の発掘調査が実施（県３回：本線，町３回：農道・用水路部分等）されている（高橋・井：2002～2004，和田：2002・2004）。県道会津坂下･塩川線を挟んだ南側の日橋川自然堤防上では，平安時代から中世前半期を主体とする遺構・遺物が多く検出されている（１次・２次調査）。第１の画期である平安時代（９世紀頃～10世紀前半）には，21号溝跡を中心とする流路跡から多量の土器類（土師器杯主体）が確認され，隣接地における遺構群の存在が示唆された。

その後，県内及び会津地域の動向と同様に，10世紀後半から11世紀代の遺構・遺物は認められず，本遺跡では空白期となる。12世紀に至ると，建物跡や区画溝跡，土坑群等の遺構をはじめ，該期の遺物が飛躍的に認められるようになり，第２の画期が訪れる。12世紀後半には最盛期を迎え，13世紀頃まで継続する。この頃，陣が峯城跡などを「核」とする阿賀川（大川）沿いやその支流では，在地有力層の管理下の基「川湊」（船付場）が配置され，日本海を中心とする遠隔地との交易が盛んに行われたと考えられる。13世紀に至り，本遺跡第２の画期の終焉を迎えると，代わって近接する古舘遺跡（13世紀後半～）等が最盛期を迎える。佐原氏の宝治合戦（1247年）及び北条時頼の出家（1256年：佐原三兄弟（光盛・盛時・時連），結城三兄弟，信濃三兄弟も出家）に伴う会津に於ける新たな政治・支配体制の関与と武士層の社会進出の移行が窺われる。

これ以後，遺構・遺物は希薄となり，生活空間としての機能は途絶える。中世末期頃になると，下遠田館跡を含む新たな屋敷が築かれ，三橋氏系譜と推察される土豪が居住する。数十年の居住後，屋敷は廃絶され，周辺は田畑に帰する。

現在，平成６・７年の基盤整備やほ場整備，日橋川堤防築堤等によって遺跡周辺は大きく改変されている。遺跡南側（１次・２次調査区）にあたる日橋川沿岸の前畑・下前田・灰塚・下牧・沼田・向新田等は，旧地形を止めておらず，荒屋敷の字名が今に残る。（井）

引用・参考文献

会津藩編　1809『新編会津風土記　巻之五十四』歴史春秋出版本（第３冊　2001）

飯村　均　1995「各地の土器様相（東北）」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

飯村　均　1996「中世の「宿」「市」「津」－陸奥南部における中世前期の方形竪穴建物－」『中世都市研究３』中世都市研究会編　新人物往来社

石井　進　2002「中世のかたち」『日本の中世１』中央公論新社

石田　明夫　1994「会津大戸窯（遺物編）」『会津若松市文化財調査報告書　第37号』会津若松市教育委員会

井　憲治 他　2003「荒屋敷遺跡」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告２』福島県教育委員会（財）福島県文化振興事業団

井　憲治 他　2004「荒屋敷遺跡（２次）」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告３』福島県教育委員会
(財)福島県文化振興事業団

植村泰徳・和田聡 他　2002「内屋敷遺跡発掘調査概報」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書６』
塩川町教育委員会

大石直正・小林清治　1969「第三編　中世」『福島県史　第一巻　通史編一』福島県

大越　忠士　1982「一般集落内における掘立柱建物跡について」『福島考古第23号』
福島県考古学会

小野正敏・飯村均 他　2001『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会

太田　博太郎　1948『図説　日本住宅史』彰国社

喜多方市史編纂委員会　1995「第二編古代・中世」『喜多方市史４　資料編Ⅰ』

佐々木　修 他　1988「下遠田館跡」『福島県の中世城館跡』福島県教育委員会

塩川町史編纂委員会　1966『塩川町史』塩川町

高橋　信一 他　1987「蛭館跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告23』福島県教育委員会
(財)福島県文化センター

東北中世考古学会　2003『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会編　高志書院

中村　五郎　2000「藍津之城」考　－蜷河荘と城氏－『福島史学研究第71号』

向井　吉重　1672『会津旧事雑考』(「会津資料叢書４・７・８」会津資料保存会　1917)

羽柴　直人　2001「柱間寸法が語るもの」『掘立と竪穴　中世遺構論の課題』東北中世考古学会

林　哲　1979『会津芦名一族』歴史春秋出版株式会社

平井　聖　1998「対話日本人のすまい」市ヶ谷出版

福島県考古学会中近世部会　2000『東北地方南部における中近世集落の諸問題－掘立柱建物跡を中心として－』

藤田　盟児　1999「中世Ⅱ　鎌倉　南北朝　室町　－住宅－」『日本建築様式史』美術出版社

古川利意・和田聡 他　1992「古舘遺跡」『阿賀川第Ⅱ期地区遺跡発掘調査報告書』坂下町教育委員会

文化６年会津藩編　1983『新編会津風土記』雄山閣

三浦謙一・松本建速　1995「柳之御所跡」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

森田勉氏遺稿集　1995『大宰府陶磁器研究』追悼集刊行会

八重樫　忠郎　1994『柳之御所跡発掘調査報告書』平泉教育委員会

八重樫　忠郎　2003「奥羽における輸入陶磁器の受容」『中世奥羽の土器・陶磁器』
東北中世考古学会編　高志書院

山本　信夫 他　1990『貿易陶磁研究№10』日本貿易陶磁研究会

山本　信夫　1995「11．貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　真陽社

湯川村教育委員会　1994「第３章古代，第４章中世」『湯川村史　第三巻通史』湯川村

横須賀　倫達　2002「麻生館遺跡」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告１』福島県教育委員会
(財)福島県文化振興事業団

吉岡　康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

和田　聡 他　2002「荒屋敷遺跡－会津縦貫北道路整備に伴う付属施設建設並び同道路関連工事
遺跡発掘調査報告書－」『塩川町文化財調査報告第10集』

和田　聡　2004「荒屋敷遺跡（３次調査)」『塩川町文化財調査報告第13集』

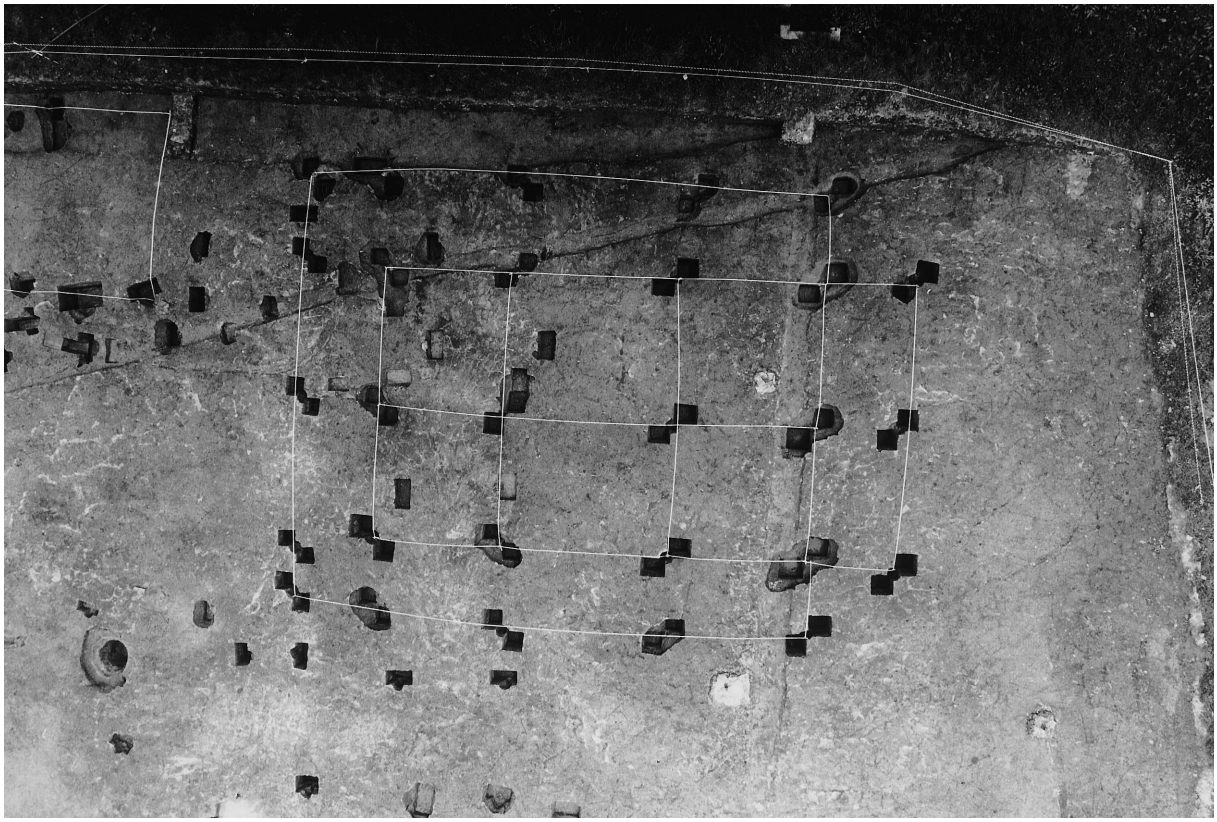
不　詳　『会津鑑巻之三十四』歴史春秋出版本

写　真　図　版

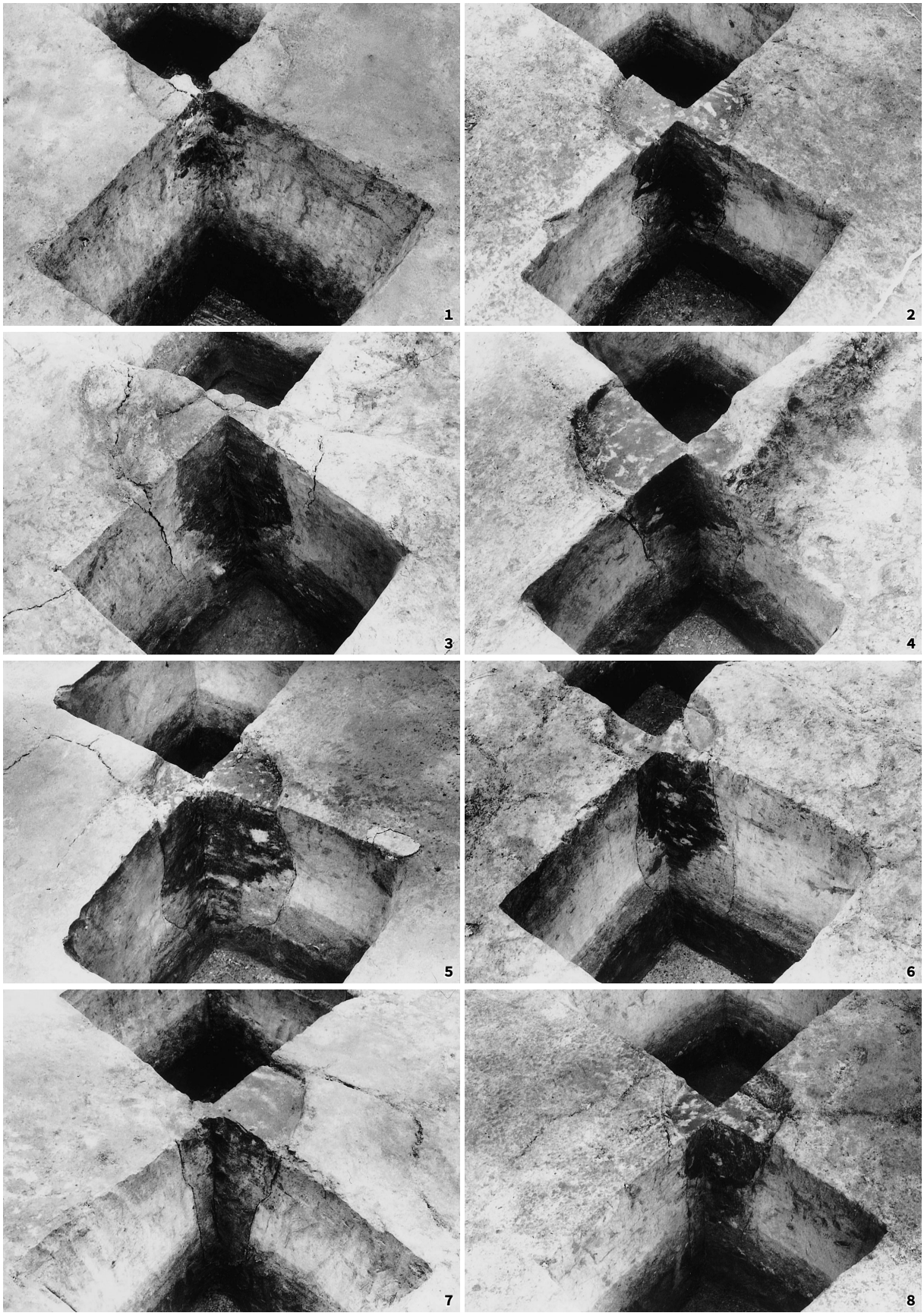
1　遺跡遠景（北から）

2　調査区南半（真上から）

3　８号掘立柱建物跡検出状況（東から）

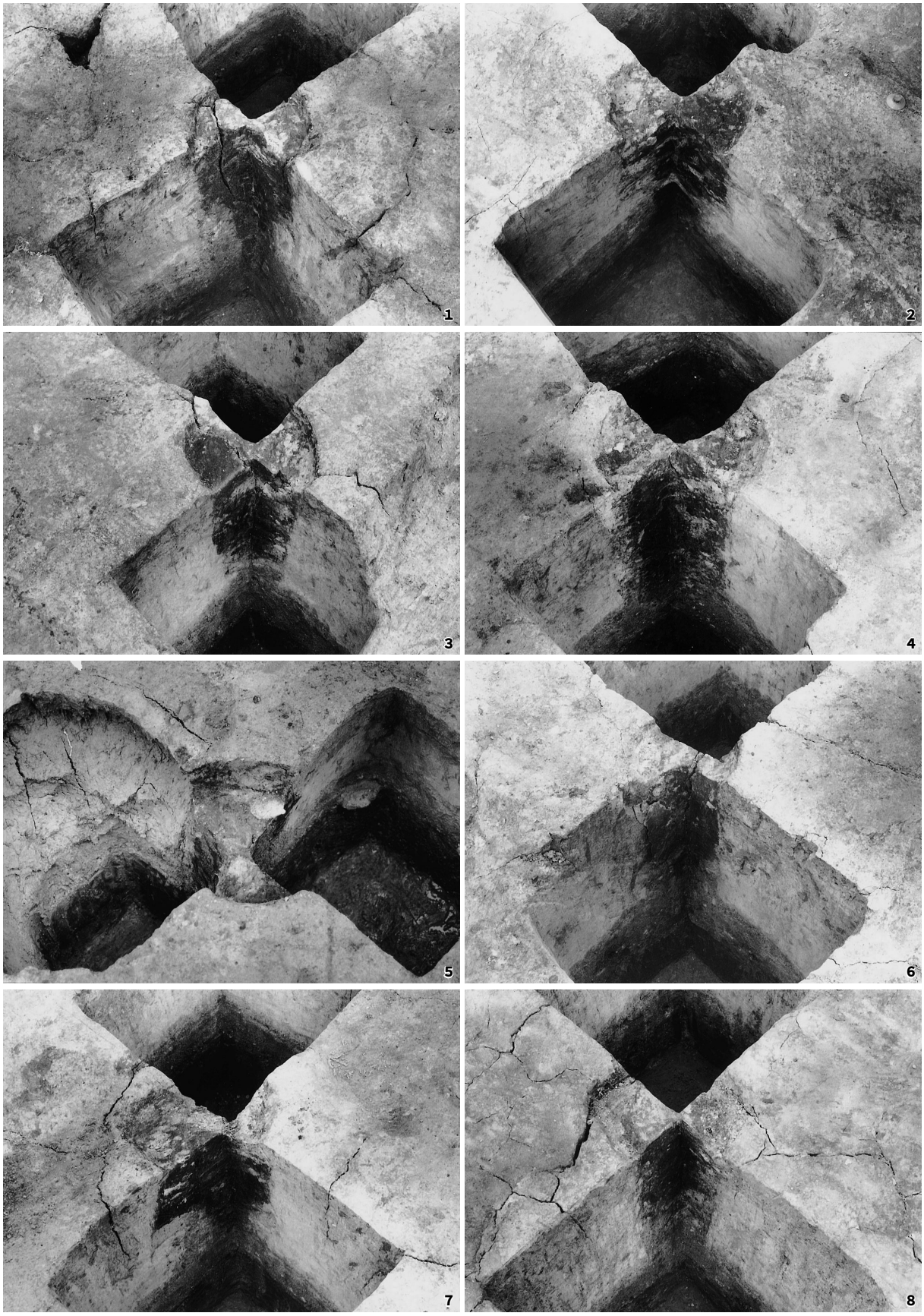


4　８号掘立柱建物跡全景（北から）



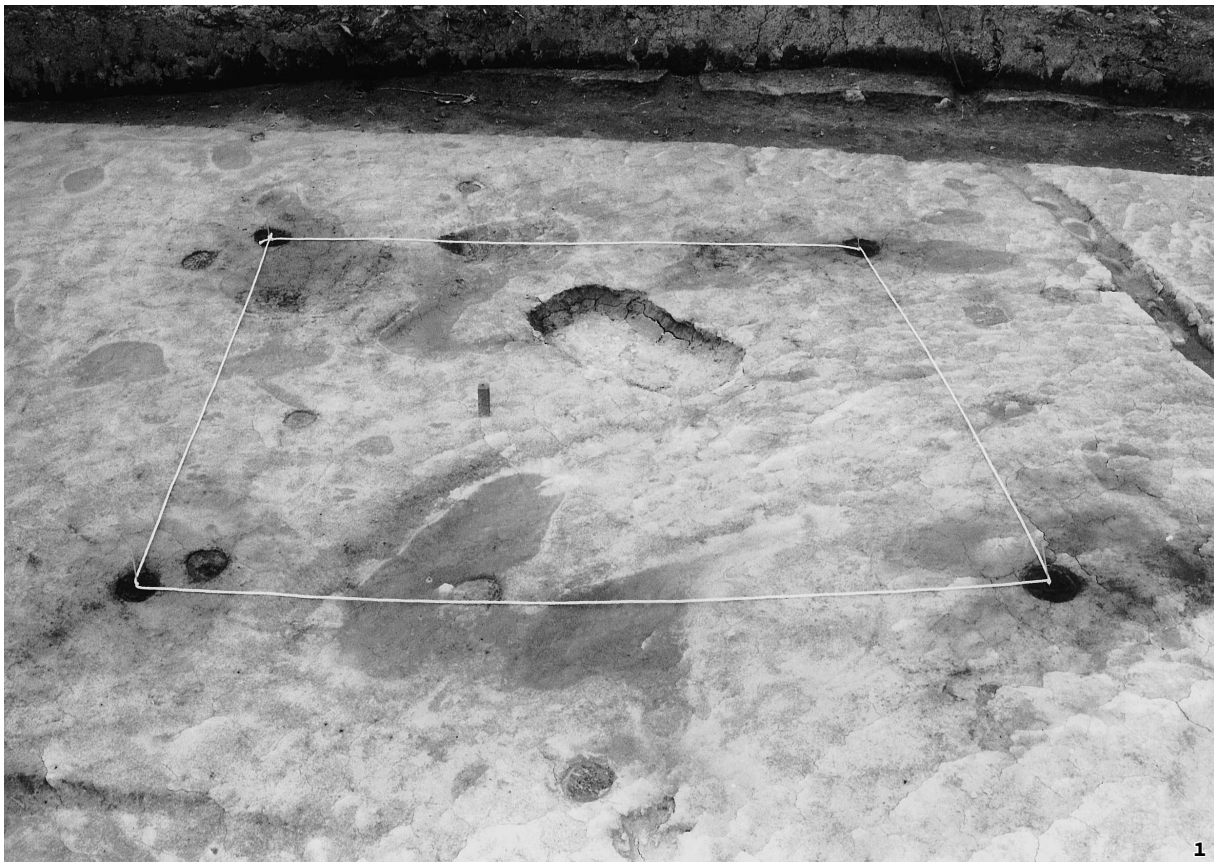
5　８号掘立柱建物跡（１）

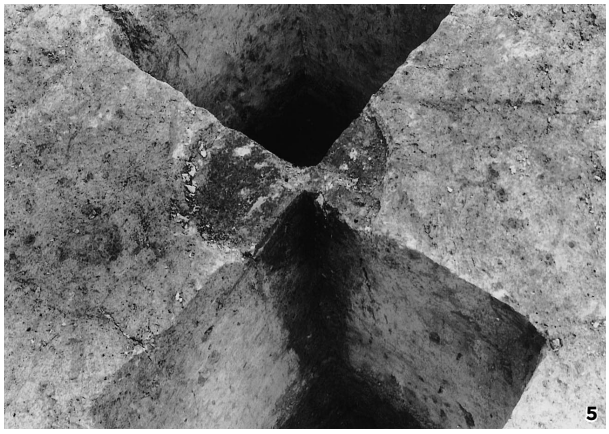
1　Ｐ１（北西から）　**2**　Ｐ２（北西から）
3　Ｐ３（南東から）　**4**　Ｐ４（南西から）
5　Ｐ５（南西から）　**6**　Ｐ６（南西から）
7　Ｐ10（南西から）　**8**　Ｐ12（北東から）



6　８号掘立柱建物跡（２）

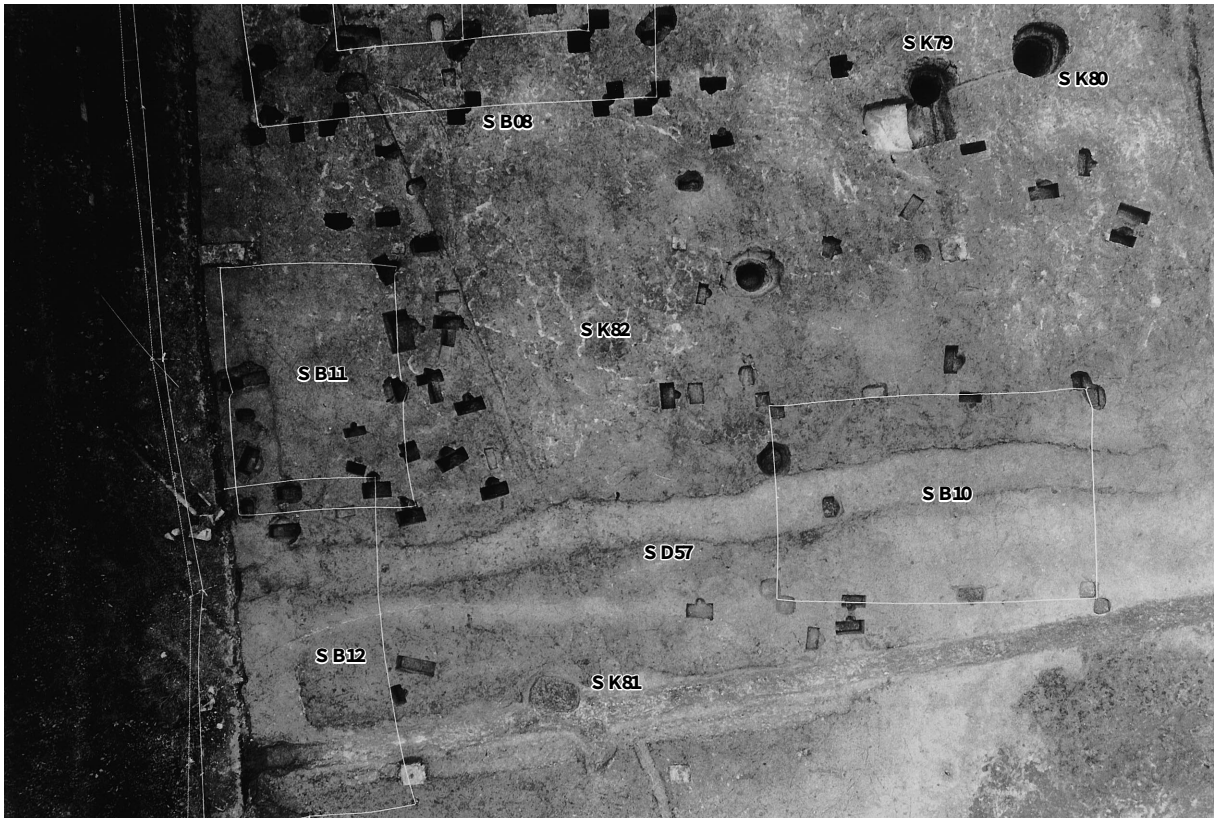
1　P13（北西から）
2　P19（北西から）
3　P20（北東から）
4　P22（北東から）
5　P22遺物出土状況（北から）
6　P25（北東から）
7　P26（南西から）
8　P27（北東から）



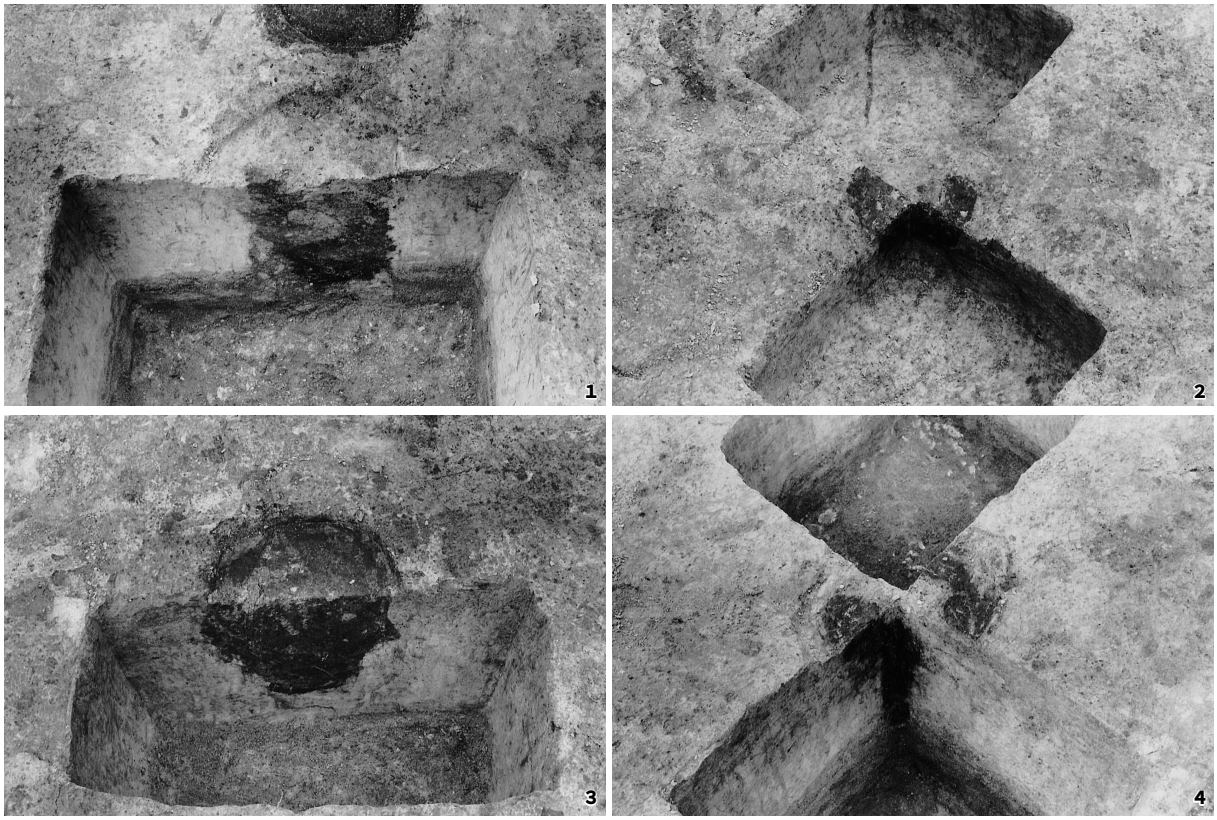


7　９号掘立柱建物跡

1　全景（北から）　**2**　Ｐ１（北西から）
3　Ｐ２（北東から）　**4**　Ｐ４（南西から）
5　Ｐ５（北東から）

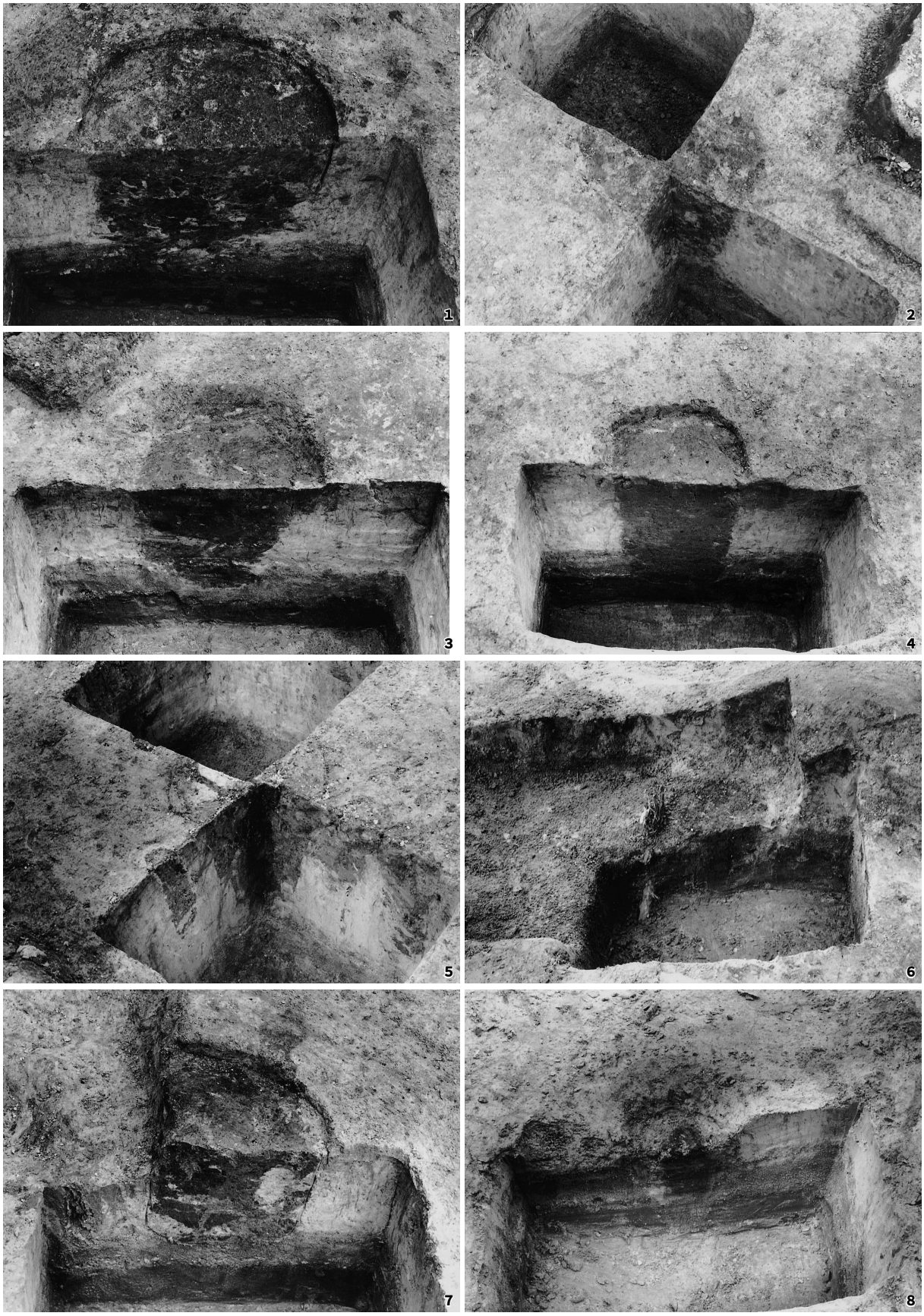


8　10～12号掘立柱建物跡全景（東から）



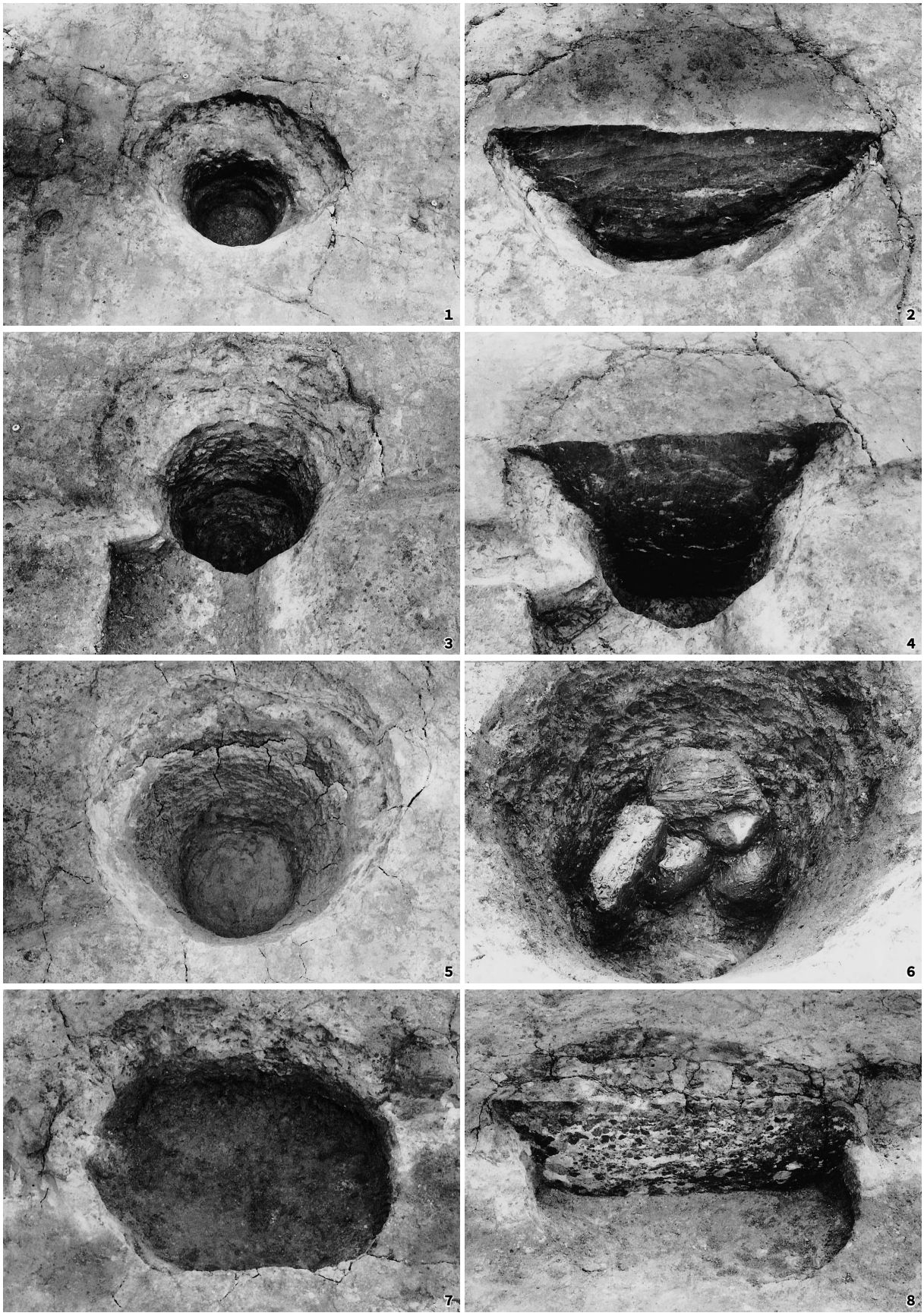
9　10号掘立柱建物跡

1　Ｐ３（西から）　**2**　Ｐ５（北東から）
3　Ｐ７（西から）　**4**　Ｐ８（南西から）



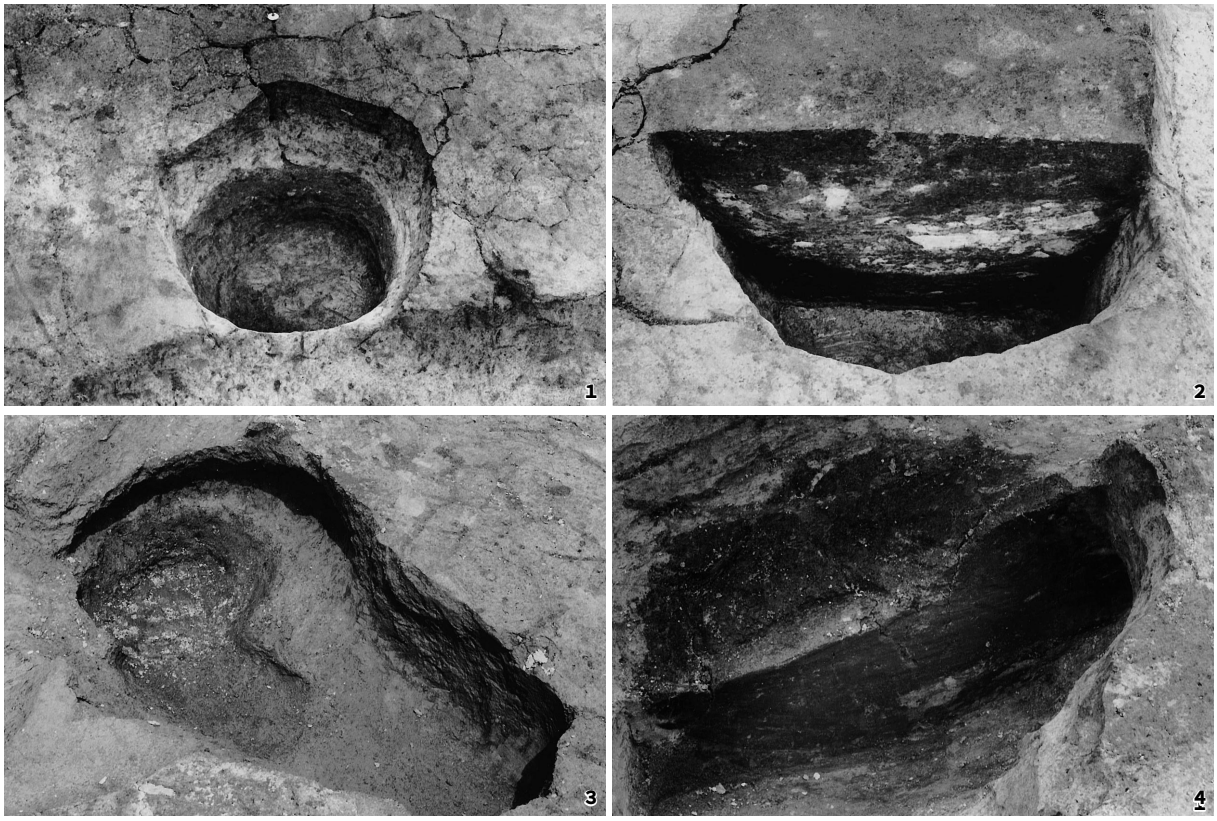
10 11・12号掘立柱建物跡

1 11号掘立柱建物跡Ｐ１セクション（東から）
2 11号掘立柱建物跡Ｐ４（北東から）
3 11号掘立柱建物跡Ｐ５セクション（南東から）
4 11号掘立柱建物跡Ｐ６セクション（南から）
5 12号掘立柱建物跡Ｐ１（南西から）
6 12号掘立柱建物跡Ｐ２（西から）
7 12号掘立柱建物跡Ｐ３セクション（東から）
8 12号掘立柱建物跡Ｐ５（南から）



11 78～81号土坑

1 78号土坑全景（東から）　**2** 78号土坑セクション（東から）
3 79号土坑全景（東から）　**4** 79号土坑セクション（東から）
5 80号土坑完掘（東から）　**6** 80号土坑礫出土状況（東から）
7 81号土坑全景（東から）　**8** 81号土坑セクション（東から）

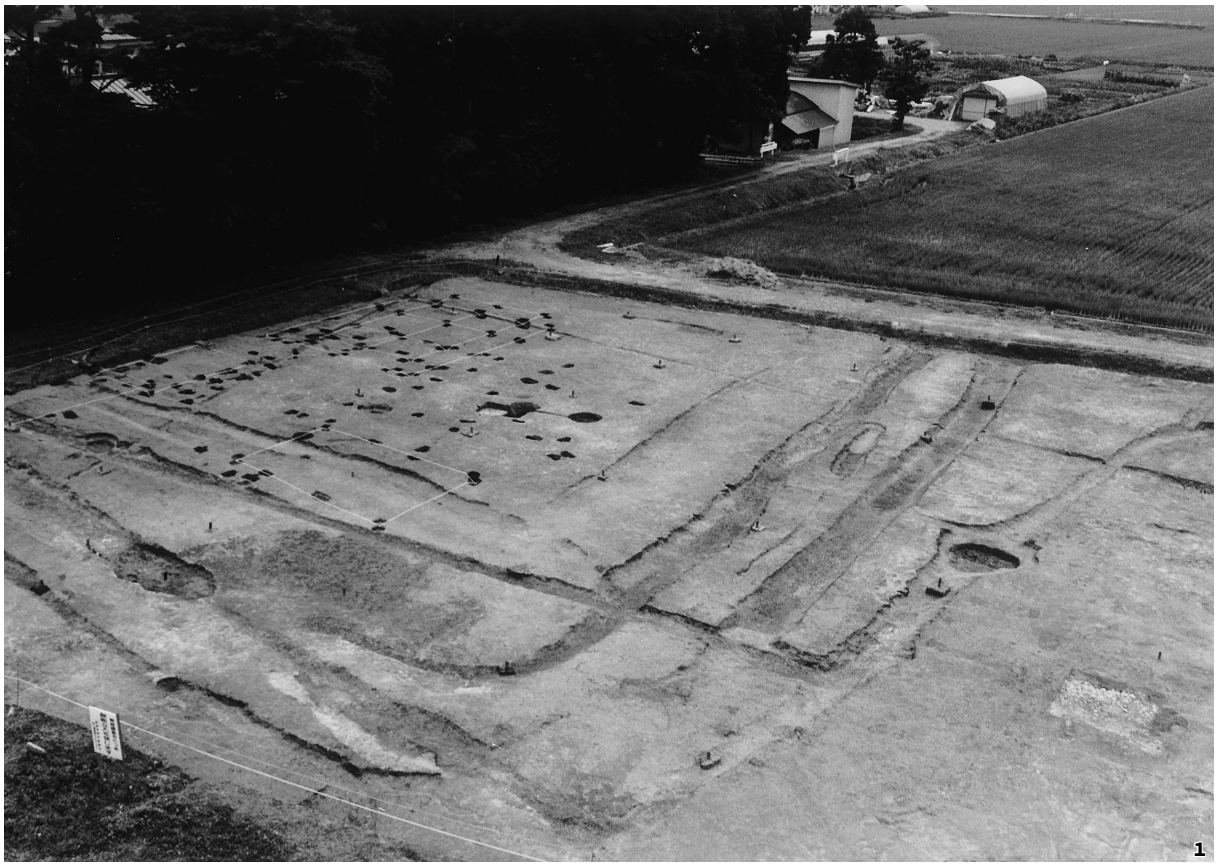


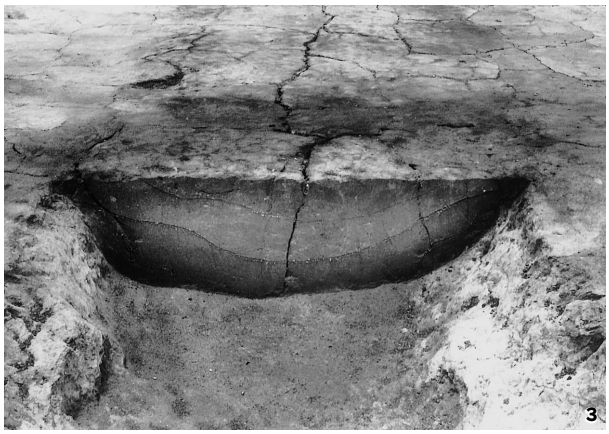
12 82・83号土坑

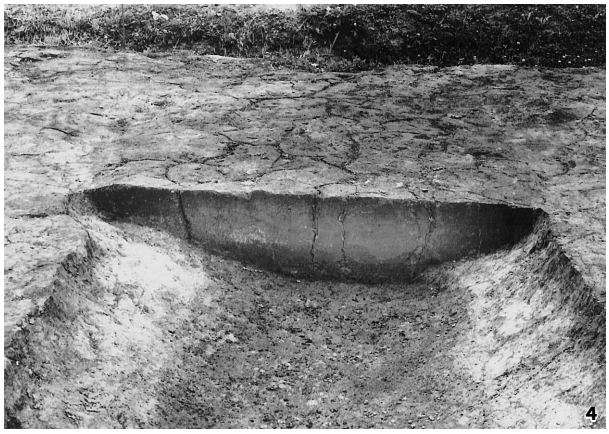
1 82号土坑全景（東から）　**2** 82号土坑セクション（南から）
3 83号土坑全景（南東から）　**4** 83号土坑セクション（西から）

13 基本土層

1 ＡＡ65グリッド基本土層（南から）　**2** ＡＣ61グリッド基本土層（北から）
3 ＡＢ54グリッド基本土層（北から）　**4** Ｅ54グリッド基本土層（西から）

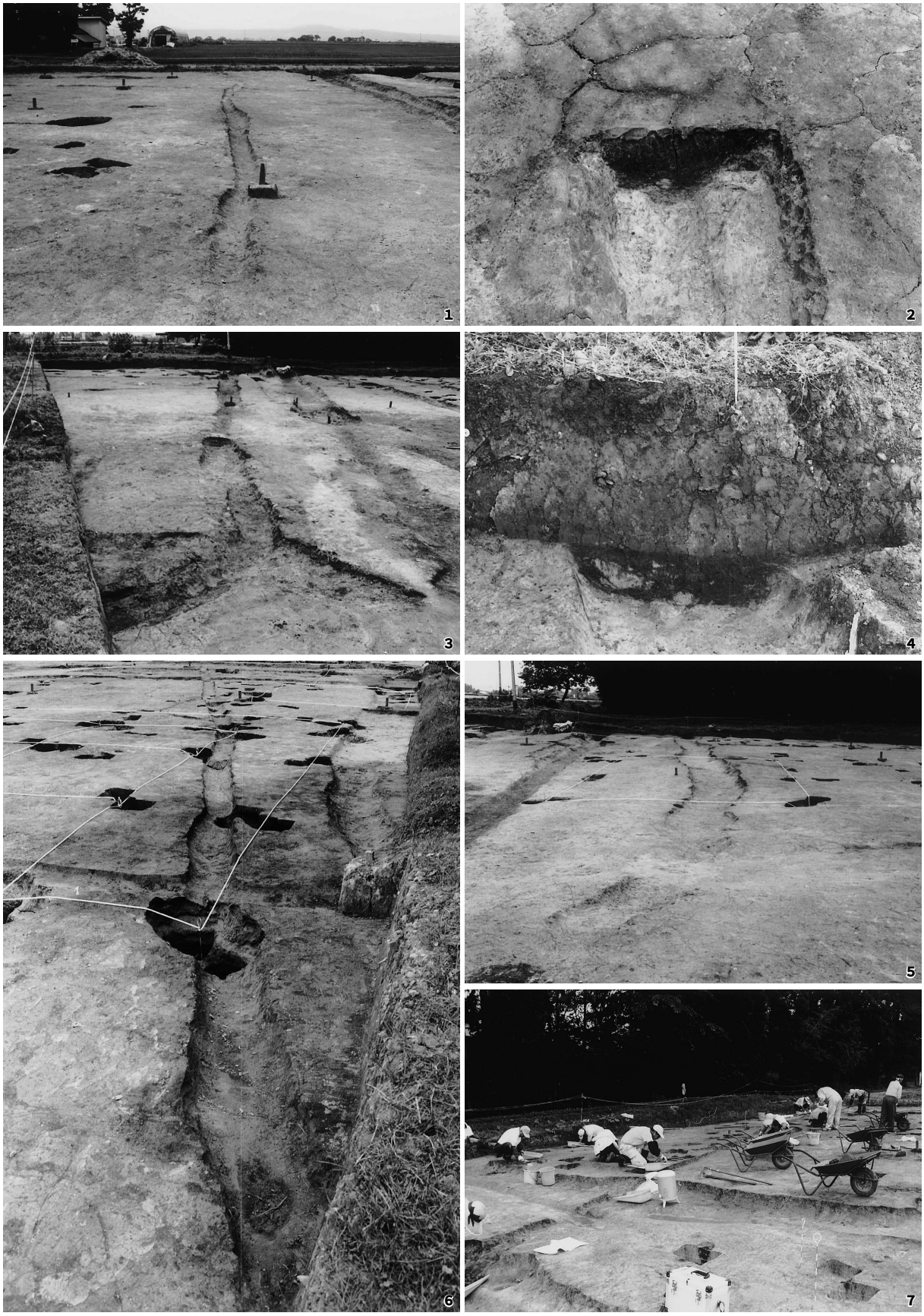






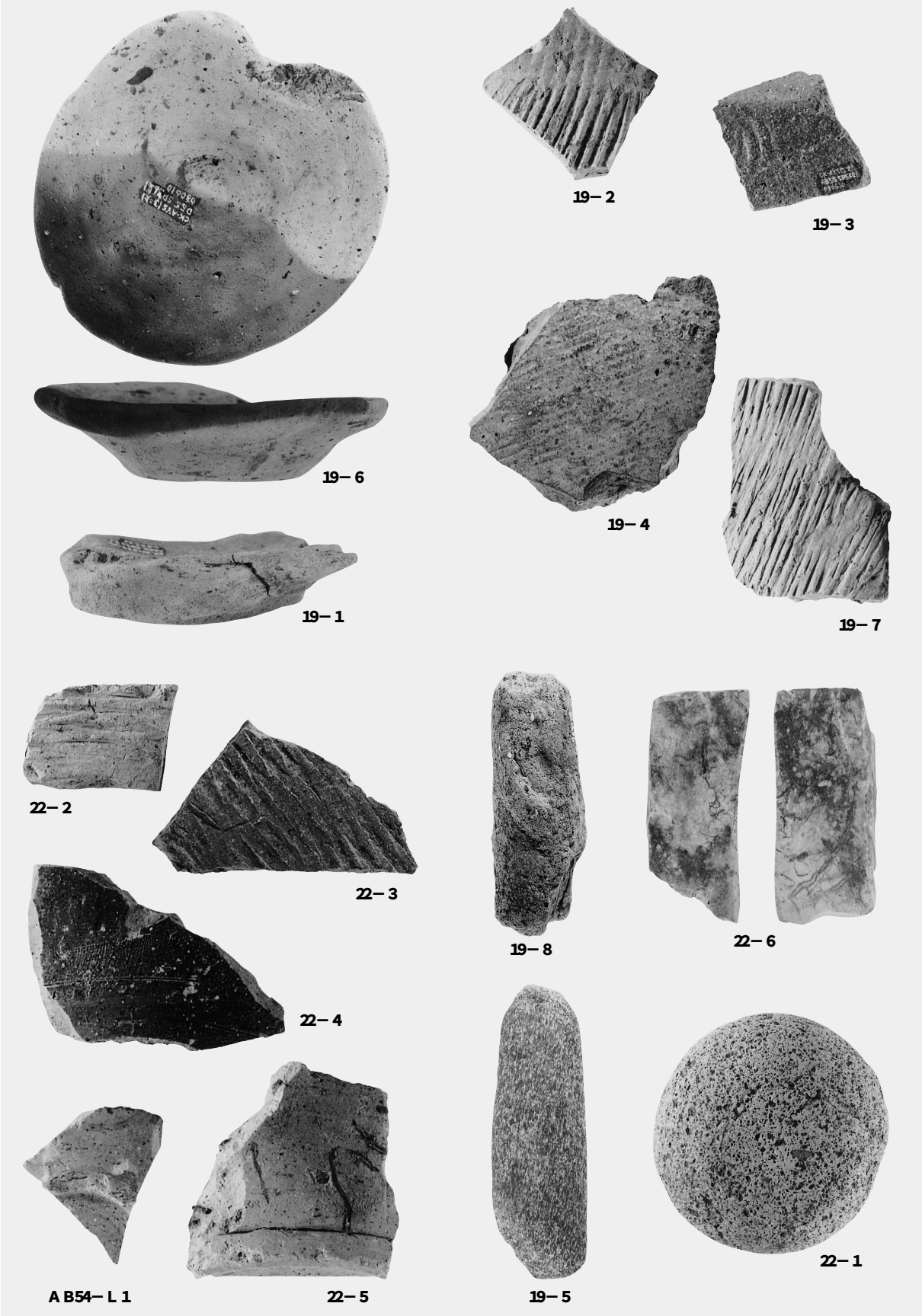
14 53・54号溝跡

1 53・54号溝跡全景（北西から）
2 53号溝跡西端セクション（東から）
3 53号溝跡中央セクション（東から）
4 54号溝跡西端セクション（東から）
5 54号溝跡東端セクション（西から）



15 55～58号溝跡

1 55号溝跡全景（東から）　**2** 55号溝跡セクション（西から）
3 56号溝跡全景（北から）　**4** 56号溝跡セクション（北から）
5 57号溝跡全景（北から）　**6** 58号溝跡全景（南西から）
7 作業風景



16 出土遺物

付章１　荒屋敷遺跡（３次調査）79号土坑堆積物分析

株式会社古環境研究所

１．はじめに

糞便の堆積物は，寄生虫卵密度，花粉群集組成，種実群集組成に特異性を示すため，他の堆積物とは様相が異なる。したがって，これらの分析を総合的に行うことによって，トイレ遺構を識別することが可能である。さらに，その遺体群集から今まで以上に食べた食物を直接的に探ることができる。

ここでは，荒屋敷遺跡で検出された土坑の堆積物を対象として，トイレ遺構の可能性について検討する。

２．試　料

試料は，荒屋敷遺跡３次調査で検出された土坑（ＳＫ79）の堆積物で，４層（試料14，暗黒褐色粘土），５層（試料15，灰褐色シルト），６層（試料16，暗灰褐色シルト粘土）の３点である。

３．寄生虫卵分析

（１）原理

人，動物などに寄生する寄生虫の卵殻は，堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また，トイレ遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く，他の堆積物と識別することができるトイレ遺構を確認することも可能である。さらに，寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。現状では近年研究されだした研究でもあり分析例も少ない。

（２）方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

１）サンプルを採量

２）脱イオン水を加え撹拌

３）篩別および沈殿法により大きな砂粒や木片等を除去

４）25%フッ化水素酸を加え30分静置（２～３度混和）

５）遠心分離（1500rpm，２分間）により水洗の後にサンプルを２分割

６）２分割したサンプルの片方にアセトリシス処理を施す

７）両方のサンプルを染色後，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

８）検鏡・計数

（３）結果

１）４層（試料14）

寄生虫卵および明らかな消化残査は検出されなかった。

２）５層（試料15）

寄生虫卵および明らかな消化残査は検出されなかった。

３）６層（試料16）

寄生虫卵および明らかな消化残査は検出されなかった。

４．花粉分析

（１）原理

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

（２）方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）の方法をもとに，以下の手順で行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎

２）水洗処理の後，0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去

３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

４）水洗処理の後，氷酢酸によって脱水して，アセトリシス処理を施す

５）再び氷酢酸を加えた後，水洗処理

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

７）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については，中村（1974, 1977）を参考にして，現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが，個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

（３）結果

１）分類群

出現した分類群は，樹木花粉15，樹木花粉と草本花粉を含むもの２，草本花粉17，シダ植物胞子２形態の計36分類群である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し，花粉数が200個以上計数できた試料は，花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図１に示す。主要な分類群は写真に示した。

表1　荒屋敷遺跡（３次調査）における寄生虫卵・花粉分析結果

分類群		79号土坑		
学名	和名	4層	5層	6層
Arboreal pollen	樹木花粉			
Tsuga	ツガ属	1		1
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	1	2	
Pinus subgen. *Haploxylon*	マツ属単維管束亜属	1		
Cryptomeria japonica	スギ	12	8	3
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ		1	
Alnus	ハンノキ属	7		1
Betula	カバノキ属		2	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属－アサダ	1	2	
Castanea crenata	クリ	1		2
Castanopsis	シイ属		1	
Fagus	ブナ属		2	
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	9	3	2
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属		3	1
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属－ケヤキ		1	2
Aesculus turbinata	トチノキ		1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科	1	4	8
Leguminosae	マメ科	1		
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Typha-Sparganium	ガマ属－ミクリ属	1	1	
Sagittaria	オモダカ属		2	
Gramineae	イネ科	124	74	126
Oryza type	イネ属型	1	30	27
Cyperaceae	カヤツリグサ科	75	20	47
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	1		
Fagonum	ソバ属	1		
Chenopodiace-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	4	2	4
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	1	1
Cruciferae	アブラナ科	2	1	1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	8		1
Apioideae	セリ亜科	4		
Calystegia japonica	ヒルガオ	1		
Lactucoideae	タンポポ亜科	4		3
Asteroideae	キク亜科	9	2	7
Xanthium	オナモミ属		2	1
Artemisia	ヨモギ属	122	39	94
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	15	16	19
Trilate type spore	三条溝胞子	9	1	5
Arboreal pollen	樹木花粉	33	26	12
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	2	4	8
Nonarboreal pollen	草本花粉	359	174	312
Total pollen	花粉総数	394	204	332
	試料１㎤中の花粉密度	1.6 $\times 10^4$	1.5 $\times 10^3$	4.6 $\times 10^3$
Unknown pollen	未同定花粉	2	4	6
Fern spore	シダ植物胞子	24	17	24
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

ツガ属，マツ属複維管束亜属，マツ属単維管束亜属，スギ，サワグルミ，ハンノキ属，カバノキ属，クマシデ属－アサダ，クリ，シイ属，ブナ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属－ケヤキ，トチノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科，マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属，オモダカ属，イネ科，イネ属型，カヤツリグサ科，タデ属サナエタデ節，ソバ属，アカザ科－ヒユ科，ナデシコ科，アブラナ科，チドメグサ亜科，セリ亜科，ヒルガオ，タンポポ亜科，キク亜科，オナモミ属，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

２）花粉群の特徴

・４層（試料14）

樹木花粉より草木花粉の占める割合が高い．樹木花粉は少なく，スギ，コナラ属コナラ亜属，ハンノキ属などが低率に出現する。草木花粉ではイネ属型を含むイネ科，ヨモギ属優占する。次いで，カヤツリグサ科などが出現し，キク亜科，チドリグサ亜科などが伴われる。

・５層（試料15）

草木花粉の占める割合が高い。樹木花粉は少なく，スギ，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属などが低率に出現する。草木花粉では特にイネ属型を含むイネ科が優占する。次いで，ヨモギ属が多く，カヤツリグサ科，アカザ科－ヒユ科，キク亜科，オナモミ属などが出現する。次いで，ヨモギ属が多く，カヤツリグサ科，キク亜科，アガサ科－ヒユ科などが出現する。

・６層（試料16）

草木花粉の占める割合が高い。樹木花粉は非常に少なく，スギ，コナラ属コナラ亜属，ニレ属－ケヤキなどが非常に低率に出現する。草木花粉では特にイネ属型を含むイネ科が優占する。次いで，ヨモギ属が多く，カヤツリグサ科，キク亜科，アガサ科－ヒユ科などが出現する。

５．種実同定

（１）原理

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く，堆積土中に残存する。堆積物から種実を検出し，その群集の構成や組成を調べ，過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また，出土した単体試料等を同定し，栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

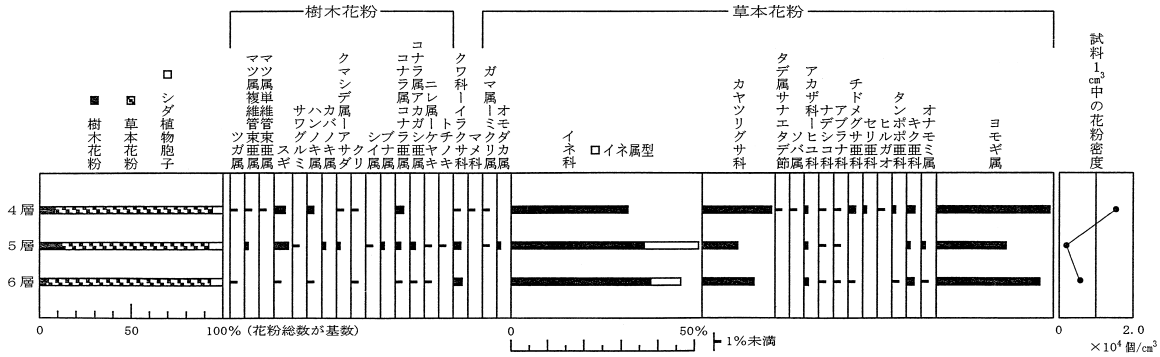


図1　荒屋敷遺跡（３次調査）79号土坑における花粉ダイアグラム

（２）方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

１）試料150㎤に水を加え放置し，泥化

２）撹拌した後，沈んだ砂礫を除去しつつ，0.25㎜の篩で水洗選別

３）残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し，種実の同定計数を行う

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い，結果は同定レベルによって科，属，種の階級で示した。

（３）結果

１）分類群

４層より草本１分類群が同定された。検出された分類群に写真を図版１に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

カヤツリグサ科　Cyperaceae　果実

茶褐色でやや狭い倒卵形を呈す。断面は三角形である。

カヤツリグサ科は，畑，野原，路傍，畦畔，荒地，水田などに生育し，広く分布する雑草である。

1　カヤツリグサ科果実

1.0㎜

図版１　荒屋敷遺跡の種実

６．考　察

（１）トイレ遺構の可能性について

ＳＫ79の４層，５層，６層のいずれからも寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。花粉が検出されたことから，寄生虫卵のみが分解したとは考えられず，寄生虫卵は当初より混入していなかったとみなされる。花粉群集はイネ科，ヨモギ属，カヤツリグサ科の人里植物ないし耕地雑草となる草木が多く，種実もカヤツリグサ科が検出されたのみである。

以上のことから，当該土坑がトイレ遺構である可能性を肯定することはできない。周囲からもたらされた堆積物が自然に埋積したと考えられる。

（２）周囲の植生・環境

草木花粉の占める割合が高く，イネ科が優占し，ヨモギ属，カヤツリグサ科などが出現すること

から，周囲はこれらの草木の生育する陽当たりの良い開地で，やや乾燥していたと考えられる。

イネ属型の出現率が高くオモダカ属などの水生植物や，タデ属サナエタデ節（ミゾソバ）などの出現から，集約した水田稲作が営まれていたと考えられる。イネ科，カヤツリグサ科，ヨモギ属は，人里植物ないし耕地雑草の性格を持ち，また，ソバ属，アブラナ科，イネ科などは栽培種を多く含むことから，これらを作物とする畑作も営まれていたと考えられる。周囲の森林植生は，スギ，マツなどの針葉樹とコナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹，コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹の森林が分布していたと推定される。

７．まとめ

荒屋敷遺跡３次調査で検出された土坑（ＳＫ79）の堆積物について，寄生虫卵分析，花粉分析，種実同定を行った。その結果，寄生虫卵は検出されず，花粉および種実は人里植物ないし耕地雑草が主体であり，糞便の要素は検出されなかった。よって，ＳＫ79がトイレ遺構である可能性は認められなかった。花粉群集は，人里植物ないし耕作雑草が優勢であることから，周辺には水田を主に畑の分布が示唆される。

参考文献

Peter J．Warnock and Karl J．Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils．Jounal of Archaeological Science，19，p. 231-245.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，８，医歯薬出版，p. ９-55.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，２，同成社，p. 151－158.

中村　純（1973）花粉分析．古今書院，p. 82-110.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

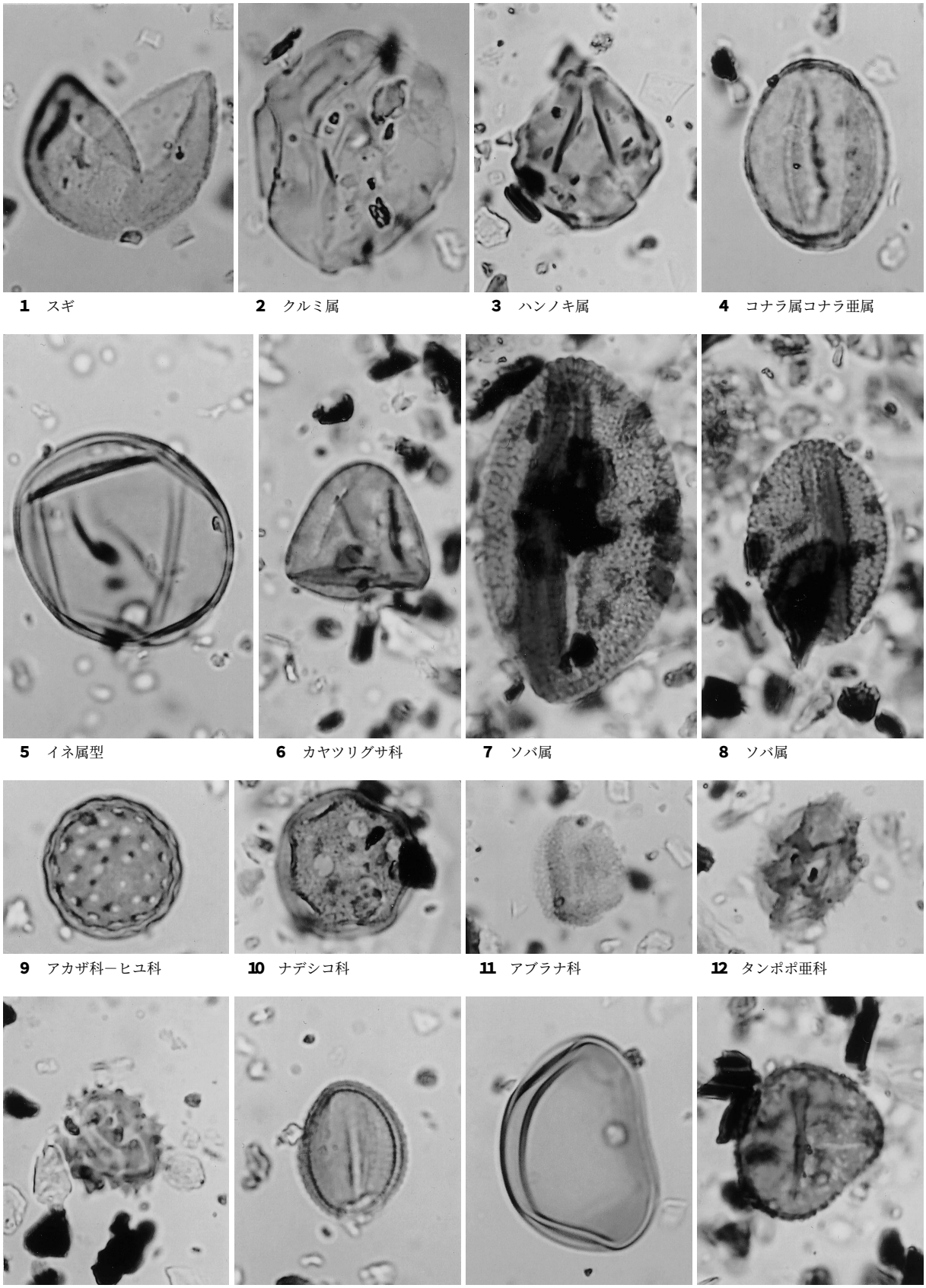
中村　純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村　純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza　sativa）を中心として．第四紀研究，13，p. 187-193.

中村　純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p. 21-30.

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣出版，p. 131-139



1　スギ　**2**　クルミ属　**3**　ハンノキ属　**4**　コナラ属コナラ亜属

5　イネ属型　**6**　カヤツリグサ科　**7**　ソバ属　**8**　ソバ属

9　アカザ科ーヒユ科　**10**　ナデシコ科　**11**　アブラナ科　**12**　タンポポ亜科

13　キク亜科　**14**　ヨモギ属　**15**　シダ植物単条溝胞子　**16**　シダ植物三条溝胞子

10μm

図版２　荒屋敷遺跡の花粉・胞子

付章２　荒屋敷遺跡（２次調査）出土鈴について

本章で取りあげる鈴は，荒屋敷遺跡２次調査において12 '号溝跡から出土したもので，『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告３』（2004：井他）として既に報告されている。しかし報告書刊行時までに鈴の劣化防止処理が未了であり，表面に付着した錆や内部に詰まった土の除去など事前処理ができなかったため，一部観察と図化に不十分な点があった。

今回，鈴の劣化防止処理が完了したため，同遺物の詳細な観察が可能となった。加えて蛍光Ｘ線による材質調査などを実施し，鍍金・金銅装等の有無も併せて確認することができた。ここでは，前掲報告書を補足する形で鈴の材質・製作方法についてまとめてみる。なお，材質調査は当事業団の奥山誠義が担当した。

第１節　鈴の蛍光Ｘ線分析

１．分析方法について

蛍光Ｘ線分析は文化財の分析の中でも、比較的容易に材質調査が行えるため広く利用されている。資料にＸ線を照射すると含有する元素に特有なＸ線（蛍光Ｘ線）が発生する。このＸ線を半導体検出器等で捉えて，Ｘ線のエネルギーとその強度をピークとして表すものである。この方法により資料に含まれる元素がわかる。今回荒屋敷遺跡出土銅鈴について，その材質や製作方法を検討する一つの材料とするため蛍光Ｘ線分析を行ったので報告する。

分析は当事業団遺跡調査部のＸ線分析顕微鏡（堀場製作所製ＸＧＴ－2700）を使用した。本機は試料の採取を伴わない『非破壊』分析が可能なうえ，微少領域（直径10μｍ）から20㎝四方にわたる広範な領域の分析が可能なエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置である。

分析条件は，管電圧50kV，管電流0.7mA，Ｘ線管球の対陰極はロジウム（Rh）である。測定雰囲気は大気状態で行った。

出土考古資料は埋蔵環境中に表面を錆や土砂に覆われ製作された当時と全く同じ状態，つまり，オリジナルな状態ではない。さらにもともと表面が必ずしも平滑になっているわけではない。したがって，分析の際は結果に対して表面状態が影響を及ぼし，測定値が必ずしも資料本来の構成元素を正確に示しているとは言い難い面がある。しかしながら，分析結果はおおよその組成を与えてくれるため，資料の概略を把握するための情報を得ることは可能であろう。詳細な調査を行うには腐食部分を避け，標準試料を用いて校正された成分の定量値を求めるなど厳密さを必要とするため定性分析に止めておくべき必要がある。しかしながら，本分析ではおおよその傾向を調査することを

目的とし便宜的に含有量の多少を判断できる方法として，検出元素をもとにファンダメンタルパラメーター法（ＦＰ法）により100wt ％に規格化された数値を用いた組成比を見ることとした。したがって，結果については便宜的な数値であることに留意されたい。

事前の観察では全体が緑青色を呈し，鈕と鈴本体との接点には鑞付けされたような痕跡は見られなかった。

分析に当たっては，表面に付着する土壌等を丁寧に落とし，可能な限り汚染物質の無い部分を選び銅鈴本体４カ所，鈕２カ所を選択し分析した。

２．結　果

分析の結果，本体及び鈕では，銅と鉛が顕著に検出されたが，青銅製品に含まれる錫が全く検出されなかった。ヒ素とビスマス，鉄が少量，銀と亜鉛が極微量検出されている。本体及び鈕はほぼ同様な傾向を示しておりほぼ同一な材料により製作されていたことが推察される。

上記検出元素をもとにファンダメンタルパラメーター法（ＦＰ法）により100wt ％に規格化された数値を用いた組成比を表１に示す。繰り返しになるがここで示す数値は，便宜的に含有量の多少を判断するためFP法により算出したものであること，また，必ずしも資料本来の構成元素を正確に示しているとは言い難い面があることに留意いただきたい。

表１を見ると鉛が最も多く含んでおり，次いで銅，ヒ素，鉄，ビスマス，亜鉛，銀の順になっている。

表１　銅鈴の蛍光Ｘ線分析結果

	銅	鉛	ヒ素	銀	鉄	亜鉛	ビスマス
本　体	23.18	66.97	6.44	0.04	1.70	0.04	1.63
	16.37	75.36	5.19	0.06	1.54	0.04	1.14
	26.78	66.92	2.88	0.04	1.91	0.05	1.42
	34.76	56.97	0.32	－	6.23	0.05	1.66
鈕	32.99	59.84	0.56	－	4.85	0.06	1.69
	13.74	77.41	0.04	0.03	8.11	0.02	0.66
平　均	24.64	67.25	2.57	0.03	4.06	0.04	1.41

－は検出限界以下であったことを示す。

銅鈴は，錫が全く検出されていないことと，銅に比べ鉛を多く含んでいることから，青銅製品とは言い難い。安易に結論づけられないが，銅鉛合金製遺物と呼ぶ方がふさわしいかもしれない。

資料の構造上の問題から鈕の付け根については分析できていないため，本体と鈕が一括で作られているのか，別々に作られ何らかの接合方法を用いて接合されているのか明確な答えは出せない。

（奥　山）

第２節　鈴の製作方法について

１．銅鈴の形状と製作方法

銅鈴の形状

銅鈴は，現状で上半部を中心として約半分の遺存度である。その形状は胴部中央に軽いくびれを持ち，下半部の径が上半部よりもわずかに大きくなる。形状を復元的に見れば，やや下ぶくれの球形になる。鈴の規模は，くびれ部の直径が2.0㎝，最大径が2.3㎝，厚さが1.5～2.0㎜である。鈕の部分は下半部のみであるが，遺存する孔の形状から楕円形になると推定される。孔径は４㎜前後と復元できる。鈕の幅は鈴本体との接する部分で最大８㎜であり，厚さは３㎜を測る。鈴口はその端部がわずかに残る程度であり不明な部分が多いが，体部中央のくびれ直下まで確認できる。鈴口はわずかにその端部が遺存するのみで全体的な形状は不明であるが，鈕の孔が穿たれている面に対して直交する位置に設けられている。鈴口端部の形状は，角が明瞭な四角形となる可能性が高い。なお鈴内部には丸は遺存していない。

銅鈴の製作方法

銅鈴の製作方法については，球形となる鈴本体の製作方法，鈴本体と鈕の接合方法の２点に着目した。鈴本体の製作方法には，大きく①鋳造，②鍛造（一枚板の銅板をたたき，しぼり上げて成形する方法）がある。鈕の取り付け方には，鈕と鈴本体が別作りの場合，Ａは鋲止め，Ｂは鑞付けによる接着がある。その他に鈴と鈕が一体作りの方法Ｃが上げられる。

荒屋敷遺跡の銅鈴について，以上の製作方法に着目して詳細な観察をすると，鈕と鈴本体の接合では，鈴の内外面ともに鋲止めのような接合痕は見られない。また材質調査からもＢとした鑞付を示す痕跡は確認できない。したがって鈕は，Ｃとした鈴本体との一体作りと推定する。

次に鈴本体の製作方法では，鈕が鈴と一体作りを考慮に入れると大きく鋳造と鍛造（一枚銅板の絞り成形）の違いが挙げられる。鈴の観察では，鍛造による銅板の合わせ目などが見られないだけでなく，上下の半球を接合する痕跡も見られないことから，鋳造により作られた可能性が高い。

材質調査の結果では，銅板の接着材の痕跡を示す錫は検出されていないことからも，一体づくりを裏付ける知見となるであろう。また銅の割合に比して鉛の含有率が高い結果が得られている。これは鈴の埋没過程において銅が流出したことも考えられるが，本来的には鉛が高い割合で含有していたことを示す。一方奈良時代における銅銭の含有物に鉛が高く検出されるものもあり，当時の青銅製品として銅に混ぜられる錫の代用品として鉛が用いられている。鉛を多用する銅合金は，融点が下がり，流動性が高くなることが指摘され，主に鋳造による銅製品が作られる傾向がある。

以上の観察結果と材質調査の結果から，荒屋敷遺跡出土銅鈴の製作方法は，鈴本体と鈕を含めた鋳造により製作されたと考えている。また鈴表面の材質調査では水銀が検出されていないが，鍍金が施されて金色に輝いていたのであろう。

類例との比較検討

ここでは荒屋敷遺跡出土の銅鈴とは基本的に製作方法が異なる事例であるが，石川県寺家遺跡の銅鈴（図１－２）を取り上げる。この鈴の特徴は，一枚板の銅板から鍛造により半球を２個作り，これを上下につなぎ合わせて鈴としている。つなぎ方は外側に反り返る上半球端部に内側に屈曲した下半球端部を被せ，この部分をカシメ止めている。平城京出土の銅鈴では，カシメ部分に錫を主成分とする鑞材の存在が確認され，銅鈴の上下半球は鑞付接合が指摘される。鈕の接合方法は，天頂部に穿たれた小穴に鈕の脚部を差し込み，内側からカシメ止めている。鈴口は上半球との接合前にタガネで切り開けられている。下半球の鍛造成形前に鈴口が開けられている可能性が高い。鍍金・金銅装などの外表面の装飾は報告されていない。鈴本体の成形方法を言及する報告は少ないが，当て金や金型を用いた鍛造が想定され，図２に示す半球状に掘りくぼめた金型を用い，その中に銅板を入れて木鑿などで打ち込むことは古くから指摘されている。また上下半球の接合には，上記のカシメや鑞付接合の他に，大谷古墳出土の馬鈴のように覆輪を用いて止める方法なども知られている。いずれにせよ，鍛造による鈴の製作は，鈕と上下半球はそれぞれ分割してつくり，それぞれ組み合わせる方法で製作する特徴がある。

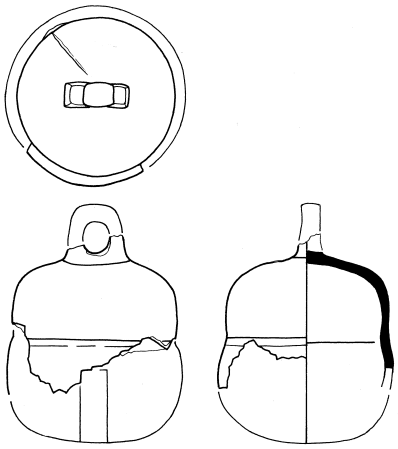
次に鋳造について，弥生時代からの青銅製品や生産遺跡に見られるように，古くから鋳造が行われていたことは確実である。銅鈴に関連する遺物では，古墳時代の鈴鏡や馬具（環鈴・馬鈴・鈴杏葉）などがあり，遺物観察や鋳型出土例から鋳造で作られていることは既に知られている。古代から中世にかけては，装飾具や仏具などに付随する様々な銅鈴が鋳造により作られている。

福岡県太宰府市大宰府条坊跡から出土した鈴鋳型（図１－３）は，外型の破片である。この鋳型から復元される鈴の直径は，３～４㎝と荒屋敷遺跡の鈴よりは若干大きい。中型が遺存していないため，鈴の厚さは不明である。鋳型の観察では，鈕の部分に湯口が１カ所設けられている。鋳造の製作工程を復元的に見れば，図２に示すように，鋳型は鈴の天地から縦に２等分した外型，中型を含めて３つのパーツによって構成される。鈴の成形には，鑞型が用いられていると推定される。中型は鈴口で支持する構造をとれば，型持は特段必要ないであろう。さらに鈴内部の丸については，粘土で作られた中型にあらかじめ小石や鉄球を入れて丸とすれば容易になる。

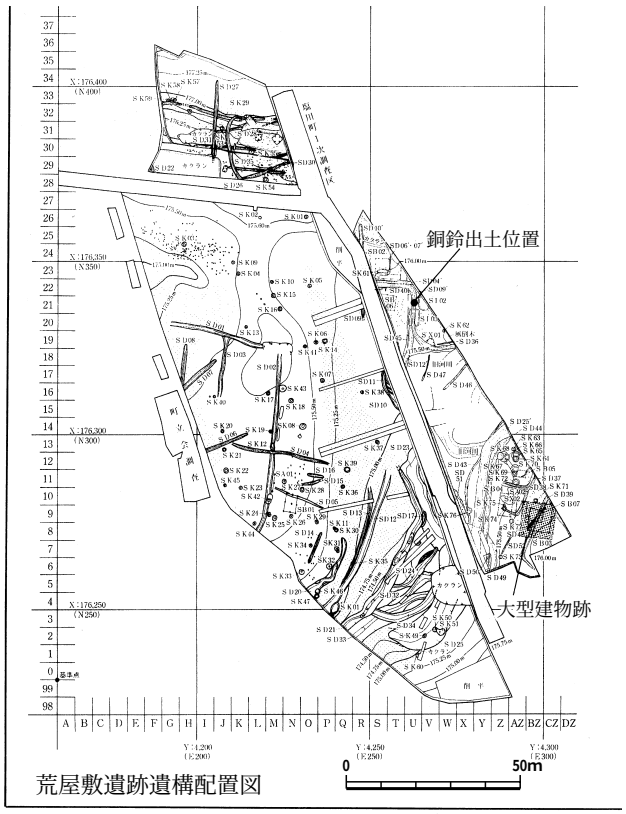
鋳造による鈴は，その製作過程において外面に残る鋳型の合わせ目や鋳込みの際に出るバリなどは，ヤスリ仕上げ・渡金により明確な鋳造の痕跡が残らない特徴を持つ。

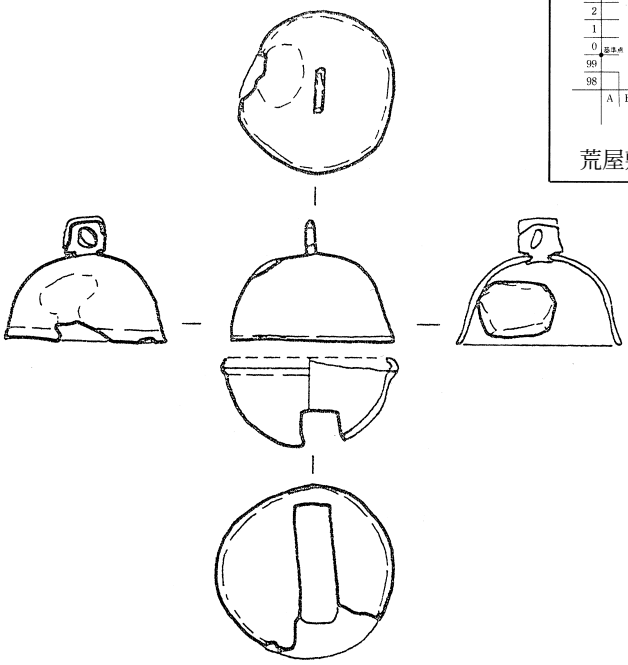
２．まとめ

荒屋敷遺跡出土の銅鈴について，その製作方法に着目した観察と科学分析から，鋳造による一体づくりの可能性を指摘した。荒屋敷遺跡の銅鈴は，他の出土遺物の検討から12～13世紀と考えられている。さらに周辺の遺構分布から，一般的な建物とは異なる特徴を持つ大型建物跡（３号建物跡）が確認され，報告によれば寺院跡など宗教施設の可能性を指摘している。この点から銅鈴の使用方法を推察すれば，鈴単体の「楽器」として存在したのではなく，仏具・仏像やその持物，神具の一

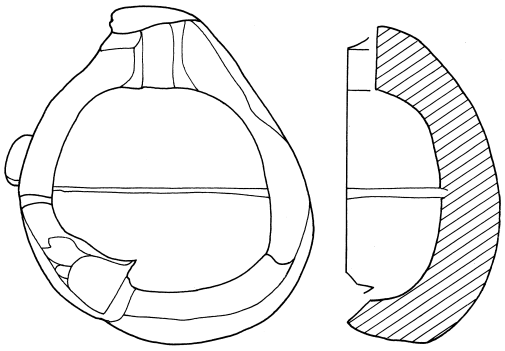


1　荒屋敷遺跡（２次調査）





2　石川県　寺家遺跡



3　福岡県　太宰府条坊跡
（一部加筆）

0　3cm
(1/1)

写真1　鈴（横から）　　**写真2**　鈴（上から）　　**写真3**　鈴（内部）

図１　荒屋敷遺跡出土銅鈴とその類例

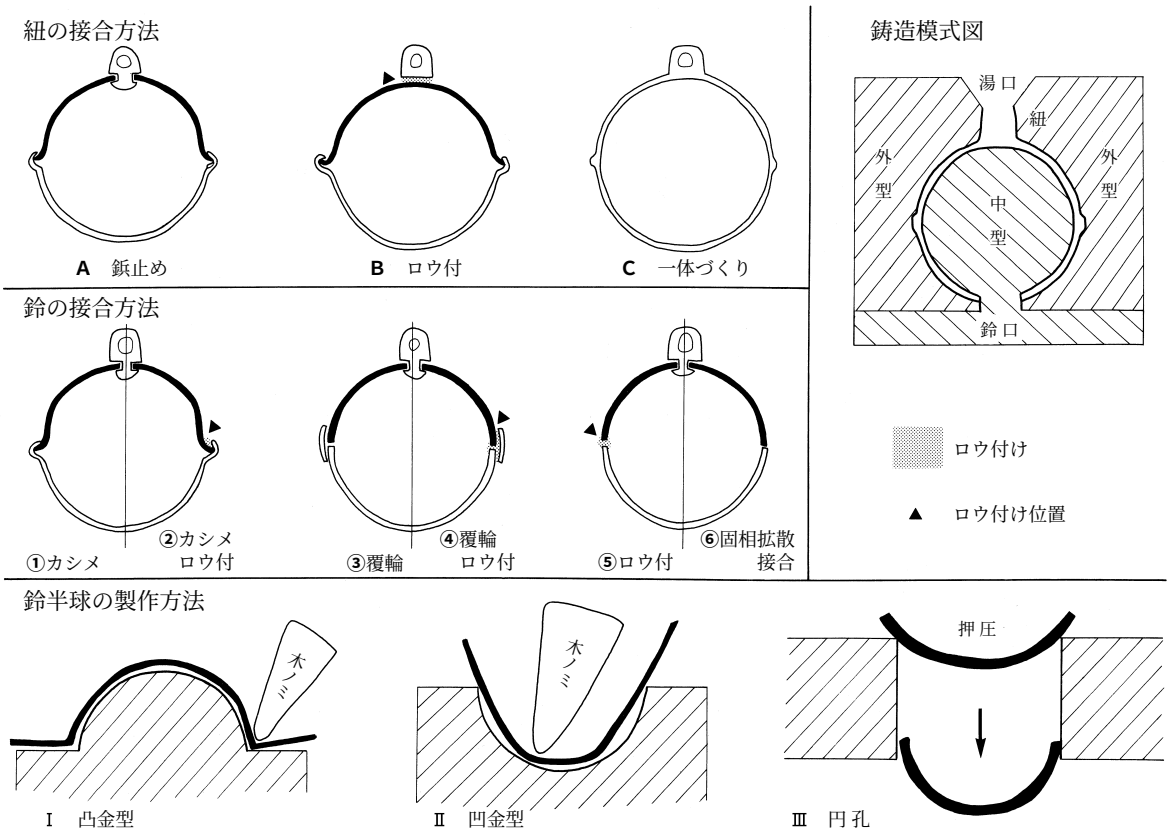


図２　銅鈴製作の模式図

部で，鳴物としての「音具」の可能性が高い。

更に荒屋敷遺跡の特徴的な出土遺物として砥石の出土数が多いことが挙げられる。このことは単純に鉄製刃物の普及を示すだけではない。「会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告３」の図43－16は，研磨痕の断面形がU字形やV字形になる砥石であり，彫刻刀・タガネのような金工や木工に関わる刃物が存在し，それに携わる技術者集団が想定できる。このことからも様々な職能を持つ人々が居住していた集落，または報告で指摘する「川湊」のような地域経済拠点と理解すれば，それに付随する広義の宗教関連施設も必然的に想定される。銅鈴を仏具・神具など荘厳具の一部と理解することに大きな矛盾はなく，３号建物跡を宗教関連の建物とすることを暗示する可能性を指摘しておく。

最後に，荒屋敷遺跡（４次調査）の継続調査は，平成16年度以降に予定されている。この調査成果を待って，会津盆地内の歴史景観の復元を踏まえた荒屋敷遺跡の再評価を試みたい。　（福　田）

参　考　文　献

勝部　明生，鈴木　勉　　1998『古代の技　藤ノ木古墳の馬具は語る』吉川弘文館
小林　行雄　　1962『古代の技術』塙書店
狭川　真一　　2001「中世大宰府の鋳造関係遺跡」『第11回鋳造遺跡研究会』資料
宋應星，藪内　清（訳注）　　1996『天工開物』東洋文庫130　平凡社

太宰府市教育委員会　1984　「学校院南前面地区」『大宰府条坊跡Ⅲ』
太宰府市教育委員会　2001　「鉾ノ浦遺跡」『大宰府条坊跡ⅩⅥ』
太宰府市教育委員会　2001　「鉾ノ浦遺跡」『大宰府条坊跡ⅩⅦ』
奈良国立文化財研究所　1997　「平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告」『奈良国立文化財研究所学報第56冊』
復元研究プロジェクトチーム　2001　「福島県内出土古墳時代金工遺物の研究」『研究紀要2001』福島県文化財センター白河館
村上　隆　1996　「古代金工における金属接合技術－銀鑞（ろう）による「鑞接」技法を中心に－」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会
2000　「蛍光Ｘ線分析における諸問題」『保存科学研究集会2000』非破壊手法による考古資料の分析・観察　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
山田　光洋　1998　『楽器の考古学』ものが語る歴史シリーズ①　同成社
濱住松二郎　1972　非鉄金属及び合金内田老鶴圃

報　告　書　抄　録

ふりがな	あいづじゅうかんきたどうろいせきはっくつちょうさほうこく
書名	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告４
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第423集
編著者名	井　憲治・福田　秀生
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査課 〒960－8116　福島県福島市春日町５－54　TEL 024－534－2733
発行機関	福島県教育委員会 〒960－8688　福島県福島市杉妻町２－16　TEL 024－521－1111
発行年月日	2004年12月24日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
荒屋敷（あらやしき）	福島県耶麻郡（ふくしまけんやまぐん） 塩川町大字遠田（しおかわまちおおあざとおだ） 字荒屋敷（あざあらやしき）　他（ほか）	403	0073	37 35 55	139 52 50	2003年５月12日 ～ 2003年７月14日	2,600㎡	道路（会津縦貫北道路）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒屋敷（あらやしき） （３次）	散布地	平安時代 ～ 近世	掘立柱建物跡（５） 土　坑（６） 溝　跡（６） ピット群　など	土師器・須恵器 陶磁器・石器類 など	本遺跡は平安時代～近世を主体とする複合遺跡である。今回の３次調査は遺跡の北側部分であり，区画された堀跡内からは建物跡や土坑などが確認されている。南側で確認された遺構群（１次・２次調査）とは時代・性格が異なる可能性が高く，近世の会津地方の歴史を考える上で興味深い資料といえる。

※経緯度数値は世界測地系（平成14年４月１日から適用）による。

福島県文化財調査報告書第423集

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告４

荒屋敷（あらやしき）遺跡（いせき）（３次）

平成16年12月24日発行

編　集　財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部

発　行　福島県教育委員会　（〒960-8688）　福島市杉妻町２-16

財団法人福島県文化振興事業団　（〒960-8116）　福島市春日町５-54

国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所　（〒963-0111）　郡山市安積町荒井字丈部内28-１

印　刷　六陽印刷株式会社　（〒960-8056）　福島市八島田字中干損田８-１